高円寺パル史誌編集委員会

# 高円寺

## 村から街へ

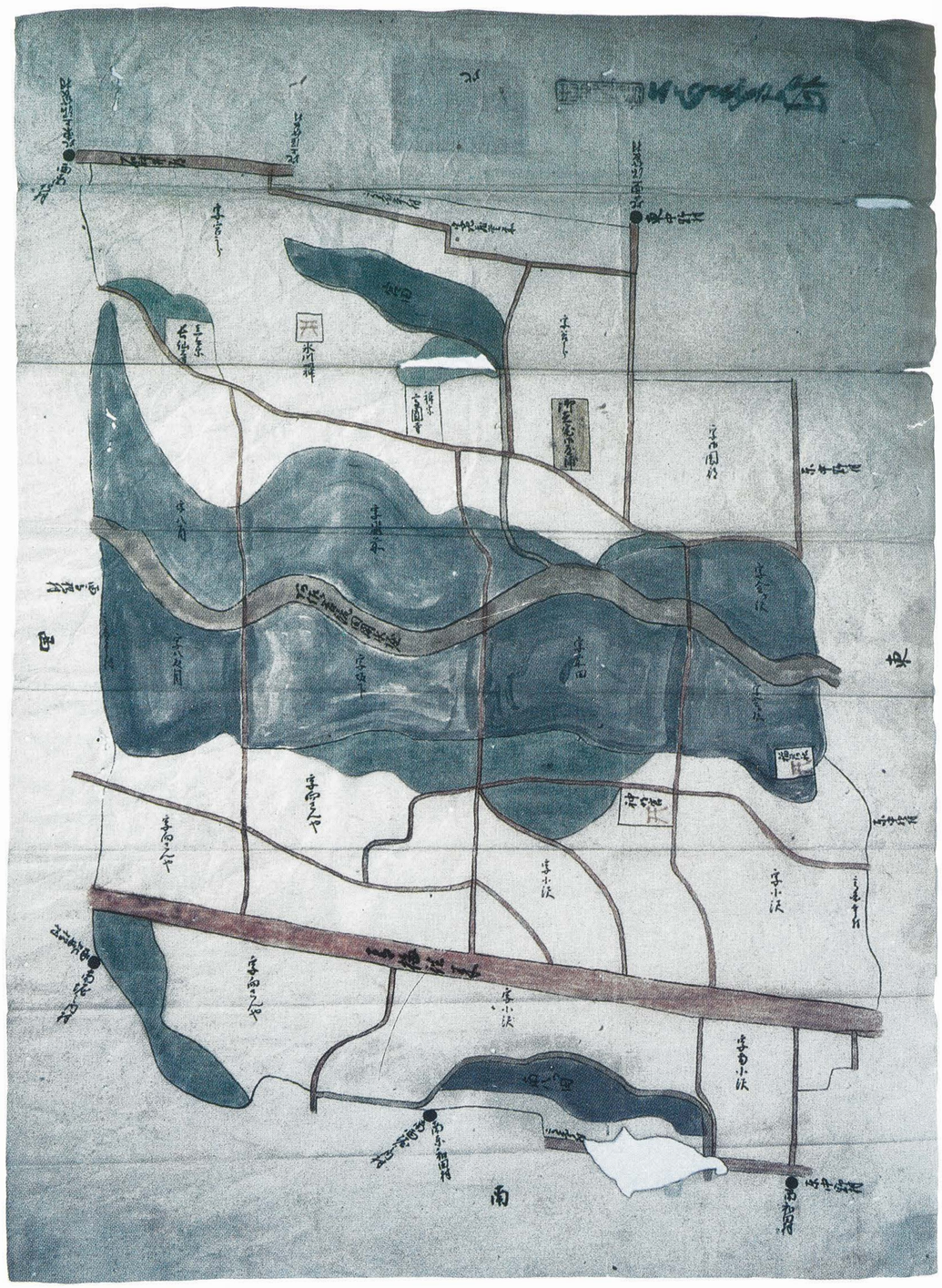
表紙の写真：大正９年現在の高円寺南５丁目付近

# 高円寺

高円寺パル史誌編集委員会

## 村から街へ

高円寺村絵図



堀江家文書　東京都立大学附属図書館所蔵

馬橋村絵図



堀江家文書　東京都立大学附属図書館所蔵

## まえがき

杉並区高円寺は、その昔豊多摩郡杉並町大字高円寺といった。それまでは杉並村高円寺、その前は高円寺村、そしてもっと遡れば小沢村といったそうである。何故小沢村が高円寺村になったのか、通説によれば、しばしばこの辺りに鷹狩りに来た三代将軍家光の命によるとのことだが、これの真偽はさておいて、当時から大正中期まで、この辺りは畑と雑木林、美しい清流流れる武蔵野の一角であった。そういう風景が一変するのは、大正末期から昭和初年にかけてである。明治、大正と年を経るに従って地方から東京へ流入する人が増え、いわゆる旧市内から郊外へと住居地域が拡大し始めた。それに拍車をかけたのが、大正十一年の高円寺駅開設、翌十二年の関東大震災であった。住居を失った下町の人達が続々と移り住み又、東京復興の為、地方からやってきた職人達が交通便利なこの辺りに住まいした。みるみる内に武蔵野は面影を残すのみとなる。住宅が増えるに従って当然商店街も形成され、賑わいをみせるようになる。賑わいは昭和十年前後ピークを迎える。当時の高円寺商店街は、東京でも指折りの力のある街だったようだ。しかしその賑わいも長くは続かない。昭和十一年の二・二六事件翌十二年の日中戦争勃発、戦時統制経済の強化等々、商店街は冬の時代へ突入して行く。やがて太平洋戦争。大きな悲劇を繰り返しつつ昭和二十年終戦。私達の高円寺は、戦災と強制疎開で見るも無残な姿をさらしていた。明日の希望もなく今日一日生き延びるのが精一杯の時代であった。そんな中高円寺を離れていた人々が徐々に戻り始め、又、他所から移り住んでくる人も多かった。混乱の時代ではあったが雑草のようにたくましい庶民の復興への意欲が、高円寺を蘇らせた。ほぼ数年の内に、殆ど以前と変わらぬ街並みを作り上げていたのである。その後行われた区画整理事業によって、

この街は再び大きな変貌を遂げる。木造建物が減少し、コンクリート造りの中高層ビルが林立する街となった。近代化は結構なことではある。しかし以前の温もりを失いつつあることも事実である。建物は立派になってもそこに住む人々が、かつて「山の手の下町」といわれた高円寺の心を持ち続けることを祈りたい。

今、私達の街は賑わっている。立派なアーケードもある。明治、大正の時代に、こんな姿を予見した人がいただろうか。大正末期からの約七十年の歩みは、さながら壮大なドラマの如くである。そして、それぞれの節目には、それぞれ大・小のドラマが演じられていたに違いない。それ等の積み重ねが大河となって次の時代へと流れて行くのである。

私達は先人の歩んだ風雲の日々を想い、多くを学び、それを次の世代へ確実に伝えておかなければならないのである。

付記

本書は「高円寺南商店街振興組合設立二十周年」の記念として制作されたものです。従って記述に、やや南商店街に重点を置いた箇所があることをご諒承下さい。

# 高円寺 ——村から街へ——


まえがき …… 7
第一部　高円寺の変遷と南商店街の歩み …… 7
はじめに …… 7
第一章　村の始まりから近郊農村へ …… 26
第二章　村から町へ …… 33
第三章　町から街へ …… 38
第四章　戦後の復興から現在まで …… 49
第二部　高円寺雑記 …… 52
中央線物語 …… 60
桃園川探究 …… 63
グラフ桃園川 …… 73
道を探る　青梅街道／五日市街道／鎌倉街道／大場通り／環七通り …… 75
消えた町名「馬橋」 …… 77
長仙寺あれこれ …… 79
軍とお伊勢とラッパの森 …… 80
蚕糸試験場とセシオン …… 80
高円寺の小学校 …… 80

ぶらり見てある記 …… 82
第三部　高円寺パル覚書
街づくりの設計図――区画整理 …… 91
お江戸の乱舞――高円寺の阿波おどり …… 93
事務所の変遷 …… 99
法人化とアーケード …… 102
販促娯苦楽帖 …… 105
広報奮戦記 …… 110
【資料】
年　表 …… 111
現役員・OB名簿 …… 114
参考資料（文献、取材先、写真提供者一覧） …… 115
編集委員からひと言 …… 116

# 第一部

# 高円寺の変遷と南商店街の歩み



# はじめに

明治の中期に、初めて甲府と飯田町間が一本のレールで結ばれ、甲府から東京に直通列車が乗り入れるようになりました。甲州の人が東京府に入り荻窪のあたりまで来ると一様に驚いたといいます。線路の周りには杉や檜が黒々と茂っていて、甲州の山でもこんな密林は見たことがないと言うのです。大震災前には高井戸あたりの森に入ると昼でも暗いほどで、荻窪、高井戸、阿佐ヶ谷、宮前あたりには見事な杉の森がありました。

今から僅か八十年ほど前の話です。

高円寺の歴史は関東大震災（大正十二年九月一日）とその直前に開設された高円寺駅の完成（大正十一年七月十五日）の時期を境いにして前後の二つに分けることができます。

大正十二年以前は村の始まりから、近郊農村へ、そして町への移行の兆しの時期。

それ以後現在に至るまでは、町の形成から発展、都市化への道です。

# 第一章　村の始まりから近郊農村へ

高円寺の歴史の一項目は地名の由来をひもとくことから始めましょう。

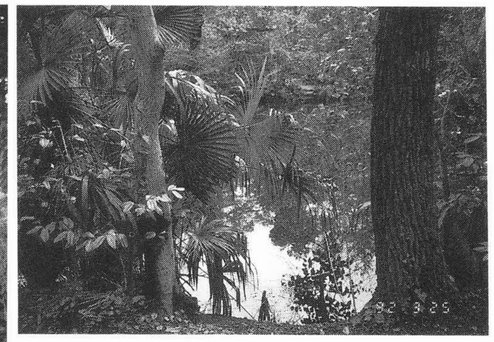
## 「高円寺村」名の由来

高円寺の地名は、衆知の通り曹洞宗高円寺からついた名前で、もとは高円寺村といい、更にそれ以前この地は小沢村と呼ばれていました。

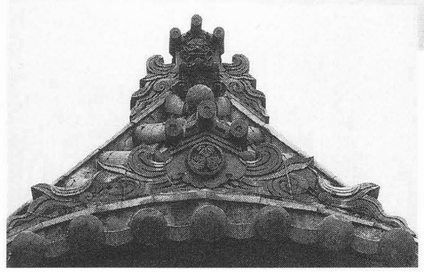
『新編武蔵風土記稿』という資料があります。江戸後期（文化七年　一八一〇～文政八年　一八二五）に昌平坂学問所で編纂されたもので、武蔵二十一郡の地誌を詳細に調べた、郷土史にはなくてはならない資料ですが、これによれば、「明和年間（徳川十代将軍家治の世）に伊奈備前守忠次が代官だった頃、この地区のことを小沢村と書いた記録が民家に残っていた」とあります、このほかにも寛永十年（一六三三）の曹洞宗の記録にも高円寺のことが「武州多東郡小沢村之高円寺」とあって、高円寺村以前この土地が小沢村と呼ばれていたのは確かなようです。ただし、何分今から三百年以上も昔の片田舎のことです、小沢村に関する記述、資料は残っていませんし、村の成立時期や村名の由来については

前頁写真：高南中学校付近（昭和27年頃）





真盛寺新鏡ヶ池
この池は武蔵野の昔をそのまま残す野趣豊かな湧水地である。ここからの流れが「小沢」になったとの説もある



高円寺

紋所にご注目，
将軍家ゆかりの宿鳳山高円寺

まるで分かりません。

小沢村の由来を想像してみましょう。字から見る限りでも由緒ありげな名前には見えません。おそらく小沢の字の通り解釈して「川とも呼べない程の細い沢のある土地」、と言うことなのでしょう。『桃園川探究』の項でも詳しく触れますが、昔の高円寺には小さな沢がたくさんあって桃園川に注いでいました。小沢村の名は、桃園川とそれに流れ込む沢のある当時の高円寺地区の地形を、そのまま村名にしたのではないでしょうか。

梅里一――一の環状七号線に面して天台宗真盛寺があります。この寺は江戸三井家の菩提寺として代々栄えてきた寺で、庫裏、客殿は細川家から移築したもので、山門といい、本堂といいそのたたずまいには名刹の風があり、桜の頃は一見の価値のある立派なお寺ですが、ここの境内に新鏡ヶ池という小さな池があります。門前にある杉並区教育委員会の表示によれば『池の旧名は「小沢の池」といい、ここから流れ出た水が作った小さな沢から小沢村の地名が生まれた』とあります。この周辺は旧高円寺村字南小沢と最後まで小沢の名を残していた土地で青梅街道にも近く、江戸中期以前は村の中心に位置していました。こうして考えるとあるいは小沢村の名前の由来は、この池から流れ出る小川から来たのかも知れません。由来が桃園川か小沢の池かはさておき、高円寺地区は地形が村名になるような、なんでもないありふれた土地だったのでしょう。

この何の変哲もない村にど偉い来訪者があったのは、徳川幕府



の基礎もようやく固まって来た寛永年間（一六二四～四三）のことです。征夷大将軍徳川家光公が鷹狩の途中村を訪れ、休息の為高円寺に入りました。当時の村のことです、見渡す限り一面雑木林と畑が続き、川の渕には田圃が広がっているという武蔵野の純農村で、藁葺きの粗末な民家が点在する程度で、将軍家が休息をとるとしたら高円寺しかなかったのでしょう。家光は以後度々この寺を訪れるようになり、やがて家光公の休憩所として境内に茶室が作られ、仮御殿と呼ばれるようになりました。

本寺は室町時代に創立され宿鳳山と号する曹洞宗の寺ですが、六世の大和尚無倫は家光と親交を持ち、家光も高円寺を訪れ和尚の法話を聴くのを楽しみにしていたと伝えられています。やがて和尚は江戸城にも上り家光に親しく接するまでになりました。高円寺には家光お手植えの樹や、下賜された茶の木があったそうです。

家光の来訪から寺の名がだんだんと有名になりました。正保年間（一六四五～四八）に画かれた多摩郡絵図には、この地域が小沢村ではなく高円寺村と記されています。

さて、この小沢村が家光来訪の縁により、高円寺村となったわけですが、その過程に少し思いを馳せてみましょう。

家光の幾度かの訪問で寺の名前が有名になり、小沢村の高円寺が高円寺のある小沢村になり、ついには高円寺のある村となって、高円寺村になったであろうことは想像に難くありません。これはあくまで推測ですが、将軍が訪れた当時の小沢村の住民が将軍の



徳川家光

高円寺来訪を盛んに喧伝したのではないでしょうか、その背景には、おらが村への愛着と多分に他の地域（村）への対抗心があったと思われるのです。

高円寺の東の中野は後に述べるように、歴史に古くその名前が見えます。

西隣の阿佐ヶ谷はもともと桃園川の浅い水の谷が語源とされる土地ですが、室町前期の応永二十七年（一四二〇）の文書に「あさかやとの」の名があります。これは、平家の流れをくむ江戸氏の枝流である阿佐ヶ谷氏のことで、この時期阿佐ヶ谷には、小豪族が本拠地として居を構えていたということであって、この地名の古さを証明しています。

南にある和田は鎌倉の大豪族和田義盛の館跡から名づけられたとの説があるくらい由緒ありげな土地で、小沢とは重みがまるで違います。

こうした他の村への対抗心が本村にも、小沢といった簡単な名称ではなく、将軍家の威光を背景に由緒正しい名前を求めたのではないでしょうか。

村の名は曹洞宗の記録に小沢とあった寛永十年（一六三三）から、高円寺村の名が登場する

多摩郡絵図の画かれた正保年間までの約十年の間に代わったことになります。

通称ではなく正式な村名ともなれば、それなりの手続きが必要になります。村の寄り合いの結果、代官所に願い出たのかも知れません。またより箔をつける為に高円寺の和尚に懇願して、将軍自ら高円寺村と銘々してもらったというのはどうでしょうか。

何げなく呼んでいる高円寺にも、こんな隠れたエピソードがあったのかも知れません。

## 村誕生以前

高円寺周辺の歴史をずうっと遡ってみます。三万年前から神田川、善福寺川周辺や湧水のほとりには、既に人が住み生活していました。桃園川沿いにも人が住んでいた可能性はあるのですが、周辺の都市開発が早かった為に、今のような発掘調査など実施する機会もなく、流域からの遺跡、遺物の発見の報はありませんでした。

天智天皇の大化の改新によって杉並区の地域は武蔵国多摩郡に組み込まれたという記録はあるのですが、こと高円寺に関する資料は、先程書いた江戸時代のものまで待たなければなりません。

高円寺の周辺では中野の名前が古くから登場します。中野は武蔵野の中程との意味で、もともとは上野、下野の名もあったと言います。平安時代の終わり頃からは行政区画の多摩郡中野郷として独立し、これ以後周辺の地域（無論高円寺も含めて）は村名の上に中野郷の三文字がつくことになります。歴史の中に高円寺地区の存在を確認するには、行政区分からも、桃園川の水利を互いに頼りにしていたなど地勢の上からも中野に含めて考えて見る必要があります。

中野の名は平将門の乱（天承の乱　九三四～九四一）に初めて登場します。

将門軍と藤原秀郷、源経基の連合軍の戦闘が関東広域に展開された時、平将門軍が武蔵中野ヶ原に出陣し、秀郷軍と中野の地で対戦したというのです。平将門は関東に独立した政権を作ろうとして、京都からは朝敵扱いされてきましたが、純朴な自作農民の代弁者としてとても人気の高い武将で、江戸総鎮守の神田明神の祭神でもあります。一方藤原秀郷は俵藤太ともいい、大ムカデ退治の伝説を残す人物で、源経基は頼朝、義経の八代前の先祖に当たります。両軍がこの周辺でも戦を展開していたというだけで、今まで歴史書の中の人物だった彼らを身近に感じてしまいます。

奈良から平安時代にかけて、武蔵野台地のこの地域には、僅かながら住みついた人が、荒れ地を開墾し耕地化しようと必死で働いていたことでしょう。

この状態が鎌倉時代から室町時代に下るにつれ、開墾に成功し、大きく成長する農民が現れ出します。いわゆる豪農の誕生です。

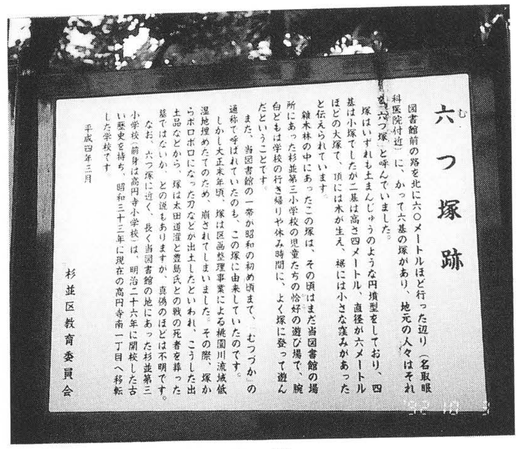
中野の地を開墾して、中野長者伝説を今に伝える鈴木九郎もこの頃の人です。鈴木九郎は室町時代に紀伊国（和歌山県）からこの地にやって来ました。武蔵野の原野を開き、馬を飼い、やがて巨万の富を得ます。その財力は今でも地名や寺社の名に残っています。



将門画像　神田明神蔵

西新宿にある十二社の熊野神社は、九郎が生まれ故郷の紀州熊野の若一王子権現を勧請したものです。

中野本町にある成願寺は九郎の開基によります。




六つ塚

十貫坂も九郎が坂の上から見える限りの土地を十貫文で買ったというもので、このほかにも九郎に関する逸話はいろいろと残っています。

室町も末期になると関東の各地に土豪が割拠して大いに乱れました。関東管領上杉氏の家宰であった太田道灌はそれらの勢力の鎮圧と、上杉氏の統制権の確立強化に努め、最後まで抵抗する石神井城を根城とする豊島氏との江古田沼袋の合戦（文明九年四月　一四七七）に勝利し、関東に小康状態をもたらしました。高円寺南二丁目の区立高円寺図書館から名取眼科付近にかけて以前塚がありましたが（六つ塚）、これは太田道灌に攻め滅ぼされた石神井城の落ち武者がこの地で殺され、その遺骸を葬ったものという伝説があります。大正に高円寺耕地整理組合がこの台地の山を削って桃園川流域の水田の埋め立て工事をした際に、ボロボロに腐り果てた刀が十数振り出土したそうです。

道灌が暗殺されてから関東は再び乱れ、小田原北条氏の統制下に服することによって、ようやく安定をみることになります。北条氏の民生統治は民衆に好感をもって迎えられ、この中で中野郷五ヶ村の開発を行っていた名主堀江氏は天正四年（一五七六）北条氏によってこれら五ヶ村の小代官に任じられ、中野、杉並地域の行政事務を担当するようになりました。堀江氏は後に高円寺とも密接なつながりを持つ中野を代表する名主で、鈴木九郎と同じく武士が帰農した家柄です。

堀江家の天正十八年（一五九〇）の文書によれば当時の中野郷五ヶ村とは中野村、上下沼袋村、枝郷大場村、阿佐ヶ谷村、和田本郷村となっていて、残念ながらこの時期には、まだ小沢村（高円寺村）の名は登場して来ません。

小沢村は未だ集落の形態をなしていなかったのでしょうか。

そもそも、中野には古くから集落が形成され、阿佐ヶ谷も土豪が本拠地とするなど、名もない小沢村（高円寺）とは大きな違いがあります。これは地勢による穀物生産高の差から来ていると考えるのはどうでしょうか。

高円寺村と馬橋村は土壌の質からして農作には適さず、渇水期には湧水も量を減らし、頼みの桃園川は上流の阿佐ヶ谷で使い切って流れて来ません。江戸時代には天水場といわれ、雨水が降らなければ田植えもできない状況でした。

中野は現在の高円寺よりの西側こそ同じ状態でしたが、善福寺川を合わせた神田川の流れが東を潤しています。阿佐ヶ谷は天沼弁天池を源にする桃園川や他の湧水のおかげで高円寺に比べて農業に適していたようです。

土豪といえどもその家人を養うのは農業です。半農状態だった当時の武士にしてみれば、土地は痩せ、水も無いのでは館を置き、本拠を構えるのはどう考えても無理だったのでしょう。

## 江戸時代―村の誕生―

豊臣秀吉の天下統一の展開は関東にも及び、天正十八年七月（一五九〇）小田原城は降伏し、北条氏の支配から、徳川家康の江戸入城を迎えることになります。

この年の八月一日、徳川家康は秀吉の命により旧領から関東に入国しました。関東にあった徳川二百四十万石のうち徳川家の直轄地（天領）は百万石余りで、江戸周辺をこれに当てました。そして江戸から一夜泊りで行ける範囲に一万石以下の家臣を配置し、江戸城の番衆の役目を与え、一万石以上の上級家臣には、外敵に備え更に遠隔地に城付きの領地を与えました。江戸初期の杉並区の地域は今川氏（今川義元の子孫）、内田氏の旗本領と山王日枝神社の社領の他は全て天領になりました。

この他に今の大宮前、松庵などの辺りは林や芝草に覆われた原野で、天領でもなければ家臣の知行地でもない千町野と言われて、今日の武蔵野市の当たりから西の方に見渡す限り続いていました。

高円寺地区は江戸時代には、武蔵野国多摩郡野方領に属していました。

野方の〝野〟の字は武蔵野を指し、〝方〟は端という意味です。もともと武蔵の国は八百里の曠野で、昔ははても限りない荒れ野であったといいます。時代が下るにつれ人が徐々に住み着き、江戸時代になると村も多くできるようになりました。開墾は野の端から行われた為に、そうした野のほとりにある土地という意味で、野方と呼ぶようになったようです。

野方領の〝領〟は、大名などの所領という意味ではなく、武蔵国を地理的に分割した単元のことです。野方領は多摩、豊島、新座三郡内の二百八十ヶ村を指していて、多摩郡内で五十四ヶ村がこれに含まれていました。

この地域は現在の練馬、杉並、三鷹、田無、清瀬、朝霞あたりであり、この中に後、杉並区を構成する二十ヶ村が含まれていました。

江戸中期の元禄時代までは武蔵国多摩郡野方領高円寺村とよばれていますが、後に野方領は省略されて多摩郡高円寺村となって明治維新に至ります。

江戸も中期に入る頃、区内には後の地名に残る二十の村々が成立しました。

これらの支配は、幕府の天領（代官の支配地）、今川氏、内田氏、岡部氏の私領地、旗本御家人の知行地と山王日枝神社領などに分かれていました。高円寺、馬橋は相変わらず天領で、阿佐ヶ谷、天沼、堀之内村は山王日枝神社領でした。

## 高円寺周辺の風景

高円寺の周辺には、桃の名の付く地名（桃井、桃野）や川（桃園川）があり桃には大層縁があるのですが、そのはじまりは家光に関係があります。家光は度々立ち寄った高円寺の境内に桃の樹が多かったので、ここを桃園と名付けました。これにより本尊の聖観音は桃園観音、寺自体も桃堂と呼ばれるようになりました。これが享保の吉宗の時に、新たに中野の地に移し、田圃の角々に桃を多く植えさせ、桃園と呼ぶよう命じられ、以後当時の人は高円寺をさして桃園の旧地と言っていたそうです。

家光の代から高円寺にあったものが、吉宗の時になって中野にその名が移された背景には何か事情が有ったのでしょうか、今となってはうかがい知ることもできませんが……。

中野に移った桃園に関しては記述や資料が多く残っています。それらから当時の周辺の風景を想像することができます。

中野駅一帯の土地は五代綱吉の時（元禄八年　一六九五）に召し上げられ御犬小屋が設けられました。その広さは現在の中野駅を中心に付属施設を含めると約三十万坪にも達しました。これも綱吉の死後の宝永六年（一七〇九）になると廃止され一旦はもとの地主に返されましたが、享保二十年（一七三五）に鷹狩などでしばしばこの地を訪れていた将軍吉宗は、周辺の田圃に桃を植えさせ、この地を桃園と呼ばせるようになりました。高円寺から中野に名前が移ったのはこの時期でしょうか。

さらに三年後には、六万七千坪（二十二ヘクタール）に桃の木を植えたので、春の候ともなれば、桃花咲き乱れ、紅白枝を交えて、艶景目を奪うばかりであったといいます。将軍はこの地に遊覧行事を催し、周囲にも次々と桃を植えました。諸大名もここに逍遥し、詩歌に興じ、春花鑑賞をしたといいます。

花の頃となると江戸市中より訪れる大勢の遊客で賑わい、茶店も十一軒できました。

桃は今でこそ実を食べるものですが、これは明治にはいって中国から入って来たもので、それ以前までは花を愛でる樹だったといいます。

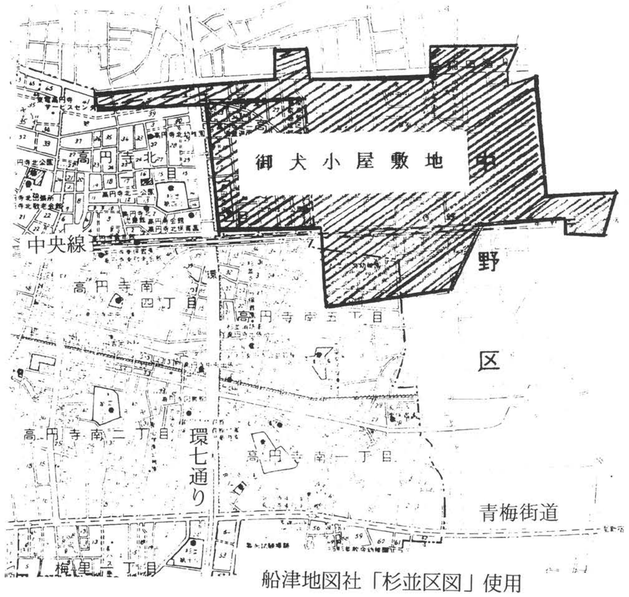
吉宗が将軍に就いた当時の江戸は「諸国の掃き溜め」と言われていました。地方の人が雑多に集まり、樹木が少なくゴミ箱の様にきたない所という意味です。

# 中野御犬小屋

江戸開府より八十有余年、井原西鶴、近松門左衛門らが活躍し、松尾芭蕉が『奥の細道』に旅立ち、イギリスではニュートンが万有引力の法則を発見したちょうどそのころの貞享四年（一六八七年）徳川幕府歴代の中でも博識の上に信仰心厚い将軍として知られる五代綱吉が『生類憐みの令』を発しました。天下泰平、武士は刀を置き、町人は遊興に耽り、闘鶏、闘犬が流行し、果ては犬殺し馬殺しがスポーツをするがごとく行われていました。『生類憐みの令』も当初は単に動物虐待を禁ずるものでしたが、動物愛護の精神が高じ、また綱吉自信が戌年生まれであったため、殊に犬を手厚く保護するようになり、四ツ谷や市ケ谷などの江戸市中にあった犬小屋では収容しきれず、元禄八年（一六九五年）武蔵国中野（現在の警察学校周辺・旧住居表示では中野区囲町）に犬小屋が設置されました。鷹狩り場であった林を切り開き十六万坪の敷地を柵で囲み野犬を移住させました。しかし野犬の数はどんどん増え、その敷地も東西南北に広がり、西は現在の高円寺北一丁目のほぼ全域と北二丁目と南五丁目の一部にまでおよび総面積は三十万坪を超えました。その中には犬を管理する役人の住居や犬小屋が二千棟近く建てられていました。

収容された犬の数は万をもって数えられたと言われていますが、それでも収容できない犬は中野、高円寺など近郷近在の農家に預けられ、その農家には犬一匹につき毎日白米三升味噌五十斤干鰯一升が支給され、病気の犬にはこれとは別に生魚と鰹節の特別配給がありました。これら犬の養育費は農家を潤した代わりに諸物価の高騰を招き、そして幕府の財政赤字の一因にもなりました。

赤穂浪士の討入りのあった元禄十五年（一七〇二年）、幕府は犬の集中管理の方針を改め、武蔵野の村々に分散して預けるようになり、中野の犬小屋は徐々に縮小され、宝永六年（一七〇九年）綱吉死去により『生類憐れの令』は廃止され、犬小屋も解体され、敷地も元の農家に返還されました。江戸時代中期のわずか十四年間の出来事でした。囲町という古い地名や高円寺北一丁目の南北真っすぐの道路は御犬小屋の名残です。ブロードウェー、サンプラザから中野区役所、警察学校、南の住宅地の一帯が数万の犬の咆哮する場であったとは、今では想像することすら困難です。



船津地図社「杉並区図」使用



## 江戸市中と高円寺村

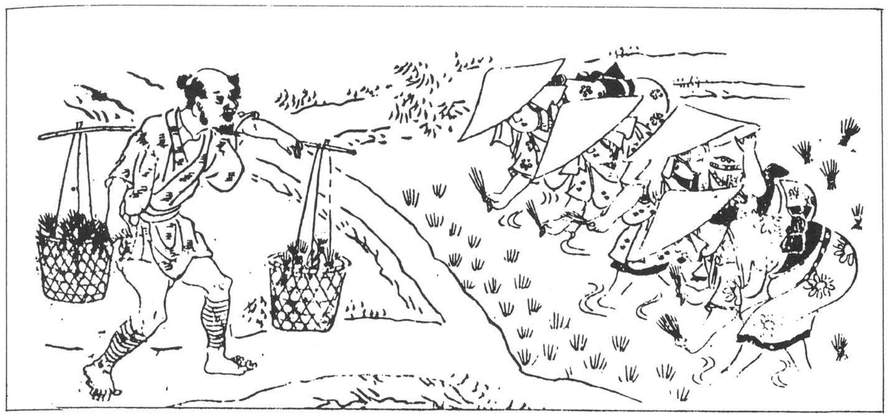


そこで吉宗は、今で言う都市緑化運動を展開し、江戸の周辺に自然に親しむ遊び場を幾つも作りました。

中野の桃園もその一つですが、飛鳥山・隅田川堤・品川御殿山・小金井・玉川上水路岸に桜を植えました。もともと山里に咲く樹木だった桜を都市で愛でる風習はこの吉宗の時に江戸の町で始まったことです。

この桃園で特に眺めが良く、風光景観の極めて優れていたのは、中野三―二八辺りの高台で、吉宗の御立場が作られたとされています。この高台から西南の一面に、桃の花が咲き競う様子は見事であったでしょう。

現在の中野三丁目の表通りは、デパートなどの立ち並ぶ繁華街ですが、一歩奥に入ると邸宅が並ぶ住宅街でもあります。将軍家が咲き誇る桃を眺めていたこの土地はそれから二百年後の昭和六年、青井忠治がのれん分けして起こした赤いカード丸井の発祥の地となりました。



葛飾北斎「富嶽三十六景・下目黒」

中期以降、江戸市民は郊外に足を延ばすようになり、この桃園の地は江戸っ子にとってもピクニックに格好の場所としてたいそう繁盛しました。そして、妙法寺に足を伸ばす人も多く、これから厄除け祖師参りが繁盛するようになったと言われています。

この桃園の賑わいに影が差して来たのは、十代家治の安永六年（一七七七）頃従来行われて来た鷹狩が鵠狩りに変わって来た為に、この周辺の雑木林も切り除かれ景観もすっかり変わってしまい、徐々に人々の遊覧の足も遠のいていきました。桃園の繁盛はだいたい四十年程でした。

### 村のありさま

天領の支配は、江戸府中では町奉行が行い、その周辺に広がる高円寺のような村々は関東郡代が行い、その配下に代官が任命されました。

家康の江戸入城から幕府は年貢の確保の為に領国の検地を進め、高円寺、馬橋村では寛永十六年に実施されました。この検地によって、課せられた年貢を徴収したり、村内の取り締まりには、高円寺村のような天領の村では、代官が手代を使い行っていました。



また村々にも代官の命令を受けて村を収める百姓身分の村役人がいました。彼らは、名主、年寄、百姓代とよばれていた人達で、何れも旧家の本家筋がつとめ高円寺村では、大河原、村田、大谷、伊藤、上野の各氏が、（馬橋村では、大谷、浅賀、高橋、梅原、新堀氏が）その任にあたっていました。江戸末期の高円寺の総戸数は約百戸ですから、本家があり、一代ごとに仮に三つの分家をだすとすると、高円寺村に住んでいたのは、ほとんどここにある五家の親戚ということになってしまいます。おそらくは、家ごとに釣り合いの取れた先と婚姻を重ね、血縁による村社会の形成という、一時代前まではどこの村でも行われていたことが、ここ高円寺村にもあったのでしょう。

高円寺村が旧名小沢村から改名された正保年間と三十年後の延宝二年（一六七四）の村高を比べると二二一石二斗から三倍以上の七九七石あまりに増加しました。

さらに宝暦八年（一七五八）では八〇二石になり、これは杉並区内では下高井戸村の八六一石に次いで二番目に大きな石高です。

こうした増加傾向は幕府の開墾政策によるところが大でした。その幕府の政策は江戸初期に、年貢の増収、浪人対策、江戸大火の後始末などを目的として、市中の浪人や、火事の被災者、防火帯となる火除け地の町人、更に村々の子弟に補助金を与えて、武蔵野台地の開墾を行なわせ、新田開発を奨励するというもので、これにより杉並地方の村も大いに開墾されました。

高円寺村はいくつかの字に分かれていましたが、大別して桃園川を境に北を「原」、南を「通り」と呼んでいました。「原」と「通り」は各々一つの集落を形成するようになったので、名主は一人ずつの二人制、又は交替制で村を収めていました。それぞれ鎮守様は別で現在の氷川神社と高円寺南一丁目の天祖神社がそれです。ちなみに昭和四十年の住居表示により、区内各地の名称や線引きが変わってしまいましたが、昔の高円寺村は住居表示以前の高円寺と重なり、氷川神社と天祖神社の区域です。

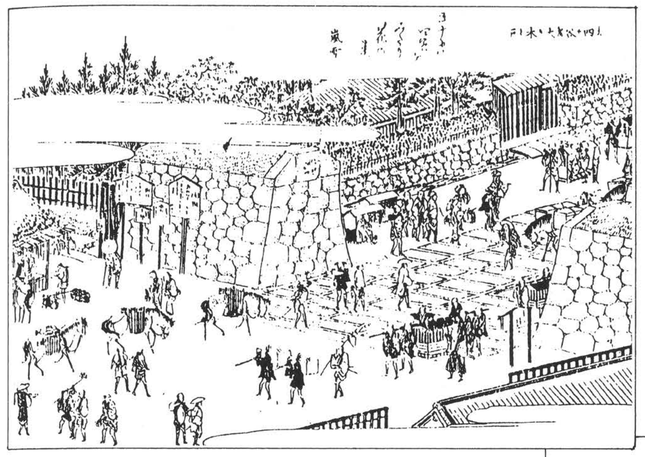
「原」は所沢みち（早稲田通り）、「通り」は青梅街道を利用して農作物を出荷し、「通り」には青梅街道の交通量が増えるようになると農業の片手間に商売をする家もできてきました。

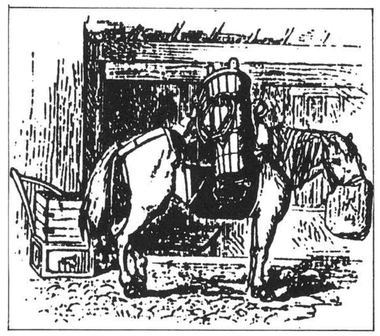
江戸末期の文政年間（一八一八～二九）では「原」には四十数戸、「通り」には六十数戸の農家を数えています。

### 作物と肥料

高円寺周辺の土地は土壌からも、水利からも稲作には不向きな土地でした。

土地は痩せていて、日照りになると、湧き水は涸れ、命の綱の桃園川の流れも上流の阿佐ケ谷で使い切ってしまいます。そうなると馬橋、高円寺、中野の一部では天に手を合わせ、雨乞いを行い降雨を待つしかありません。この状況は天保年間（一八三〇～四三）に善福寺川から新堀用水を引くまで続きます。







江戸の下肥は西部の畑地帯へは馬で運ばれた。『江戸名所図会』の四谷木戸の図には，江戸でくみ取った下肥を，村に運ぶ農民の姿が描かれている。

こんな状態では稲作だけでは到底暮らしてはいけません。そこで高円寺をはじめ、杉並周辺では野菜の栽培に活路を求めました。江戸初期には市中にも農地があって、そこでの生産量で十分でしたが、半ばになると人口増加に伴い開発が進み、畑は人家に取って代わられるようになり、生産地を郊外に求めなければならなくなりました。杉並での野菜の生産は大消費地江戸の近郊にあるという地の利にも合致して、稲作にかわる収入をもたらしました。この時期は需要の高まりともあいまって、近郊農家には野菜の供給基地としての期待がかかっていました。

江戸市中には青物市場、漬物市場が各所にあり、江戸市民の為にこの市場に野菜を出荷するのが近郊農村の仕事でした。

この出荷の様子を、井伏鱒二氏の「荻窪風土記」の中にある、明治期のものを参考に見てみましょう。恐らくさほど変わってはいないと思います。

「野菜の出荷は真夜中に市場に向けて出かけて行きます。行き先は淀橋や京橋のヤッチャ場です。夜なべで支度をして、セリに合うように夜も明けぬうちに出発します、大八車に提灯を下げたり、時には家族の者が下げてついて行くこともありました。中野坂上や鳴子坂（筆者注　現成子坂）の袂には立ちん坊がいて一回いくらで後押しをしていました。

新宿まで行けば後は下り坂です、夜も白々と明けて来ます、ここで家族のものは戻って行きます。」



江戸周辺の農村では、全くといっていいほど農民一揆はありません。それは、一揆をおこす必要がないほど野菜の需要があり、現金収入があったからです。米作りは年貢に出す分と自家消費に当てる分を生産するだけであとは全力を挙げて畑作りに打ち込み、江戸市中の青物市場に出荷しては日銭を手にしていました。高円寺周辺ではナスとゴボウ、タケノコの栽培が盛んで、土質にもあっていたのでしょう、美味しく評判がよかったようです。

近郊農民の懐を豊かにしていた要素の一つに江戸っ子独特の「見栄っ張り」があります。食べるのが好きとか、旨いとかはあまり関係なく、いち早く食べたことを自慢するという変な癖で、これはけっして初鰹にかぎった事ではありません。なす、きゅうり、かぼちゃなど初物が出れば我先に買って自慢します。これが江戸っ子の真骨頂なのでしょうか、値の高い初物が売れれば農民はホクホクです。

野菜をはじめ作物の生産に欠かせないのが肥料です。肥料には、糠、灰、ふすま、干鰯など買わねばならない肥料（金肥）と、人の糞尿、厩肥、草木の刈敷といった自然肥料が必要でしたが、金肥の高値から糞尿が大きな比重を占めていました。

農家の下肥は自家用糞尿ではとても足りず、大量に集める必要があります。近郊農民が地の利を得ていたのは、大消費地に隣接していたというだけではありません、糞尿の大生産地にも隣接していたことです。もっともこれは、江戸の庶民からしても近郊農家は百万人分の糞尿の処理場でもあったわけで、しかもそれはだんだんと高値をよび金肥になるほど貴重にされ、飛ぶように売れたといいますから、農民はいいお客さんでした。江戸市中から汲み取る下肥はカロリーが高かったといいます。農村では米は作りますが、三度白米を食べられる家など、どこの村でもほんの僅かで、麦や粟、稗まで食べていました。そこへいくと、江戸っ子は白米を食べます。熊さん、八っあんのような職人衆といえども、ひき割りの麦をまぜたかは定かではありませんが、三食とも白米を食べるのです。食べるおかずにしても市中の人は贅沢でしたので、江戸の市民から排泄される糞尿は近郊農民のものとは違って肥料として優秀でした。これが更に栄養状態のいい大名屋敷の便所となるとまさに宝の山です。当然誰もがその糞尿を汲みとることを望みますが、なかなかうまくは行きません。出入りの農家は決まっていて年に二両とか五両とか汲み取り料を定めて、その便所を一手に汲ましてもらうのが通例でした。大名によっては料金を、沢庵漬や漬菜何樽で収めよ、というところもありましたが、時代が下るにつれて権利金も上がり、金のほか沢庵の樽などを余分に要求する所も出てきました。江戸初期は無料で汲ませてもらっていた下肥ですが、江戸の町がしだいに発展し、野菜作り農家が増え、現金収入が生活を支えるようになると、そのもととなる下肥の獲得に奔走するようになってだんだんと値段が高くなっていきました。しかも農家としては、それでも下肥を確保しなくてはならず、高くなっても我慢するより仕方ありません。大名、

旗本の屋敷では三太夫が、町の大店では番頭が、長屋では差配が腕を振るい汲取り料金をつりあげます。落語で家賃をためた店子の話がよくでてきます。どうして大家は立ち退きを迫らないものかと不思議に思っていましたが、貧乏長屋では家賃よりも汲み取り代の方が大きな収入となっていたのです。江戸市民の糞尿に頼りながら、野菜を江戸市民の食膳に供給することによって農家の生活は支えられていましたが、農家の経営の中に占める下肥えの割合はどの位だったのでしょうか。

大根の生産では肥料代が売上の三十七パーセントになります。下肥の他に油糟、糠、灰なども若干使うので、全部がそうでないにしても下肥代はかなりの負担になります。

江戸時代には、度々大きな飢饉が発生しました。その代表的なのが天明、天保の飢饉です。ことに天保の飢饉では高円寺地区でも大きな打撃を受けました。何度も書いてきましたが、高円寺は水利に乏しく旱魃のつど、どうすることもできない状態が続いてしまいます。こうした中、天保十一年に、中野村、馬橋村と共同で新堀用水の開削の請願を代官所に出し、苦難の末に完成したのが善福寺から取水する新堀天保用水です。これによって高円寺、馬橋、中野の三村はようやく旱魃の水不足から解放されることができました。

高円寺村馬橋村は徳川家の直轄地でしたので、税は六公四民とされ、全体の収入のうち六割が年貢になります。この六、四の比率は今から考えると重いものですが、当時の平均からすると、さほど苛酷なものとは考えられません。

同じ杉並区の今川氏の私領だった下井草、上井草地区を見ると、八公二民の年貢の上に、窓税まで取っていました。窓の大きさに対して、米何升かの冥加金を年毎の収穫量に応じて徴収するというもので、今年は不作で窓税が支払えないと、窓を塗り潰してしまっても、窓塞ぎ税を取りに来ます。夏の暑い日などどうすればいいのでしょうか。これは決して極端な例ではなく全国の平均的なものであったようです。日本全国が大名家、将軍家などの領地に分かれ、現在のように統一したものではなく、各家の事情により徴税方法が異なっていました。どんな無体な領主でも逆らうことは許されず、全く百姓の災難は大変なものでした。こうした大多数の農民から比べたら、高円寺地区の農民は、年貢は無論、収入的にも平均以上のレベルにあったようです。

杉並地区の米は品質が悪いため、野菜作りが盛んになった江戸時代の半ば頃から米で収めずに、幕府の定めた米価に換算して現金で収めるようになりました。

この税とは別に村々を苦しめたものに助郷の制度があります。元禄七年（一六九四）以来宿駅付近の村を指定して、荷物の運搬、道普請などを行わせるもので、村高の百石につき馬二頭と人足二人の割合で出さねばなりませんでした。高円寺村の石高は大体八百石ですから、馬一六頭に人夫十六人の計算になります。労役に



対しては一定の賃金は与えられますが、交通量の増大に伴ってこの助郷の負担はしだいに増加し、農繁期、凶作の時を選ばないうえに、青壮年の働き盛りが駆り出され村を疲弊させる一因となりました。高円寺村は板橋宿の助郷に割り振られていました。

この他にも鷹狩人足の提供や、鷹の餌などの上納も課せられ、上納品は村高によって割り当てられていました。これらは触頭（ふれがしら）の中野村名主堀江氏を通じて、各村々に伝達されます。その記録の中には、「江戸城の奥女中が鑑賞した蛍の幼虫の餌にするオケラの上納」といったものも残っています。

### 青梅街道と内藤新宿

高円寺村に様々な情報や文物は青梅街道によってもたらされました。

青梅街道は江戸城の築城や城下の整備の為に必要とされた石灰を奥多摩から運ぶのを目的に、慶長十一年（一六〇六）大久保長安の指揮のもと設けられましたが、その役目は青梅などで伐採される杉材の運搬に殊に顕著でした。

青梅街道は内藤新宿の追分で甲州街道から分れ杉並を横切り、やがて青梅にいたります。その先は多摩川の上流沿いに大菩薩峠を越えて、甲州の塩山に通じているので別名を甲州裏街道とも呼ばれ、途中、関所の取り締まりもゆるく、大名行列にぶつかることも無く急用で旅をする者にとっては利用しやすい街道でした。

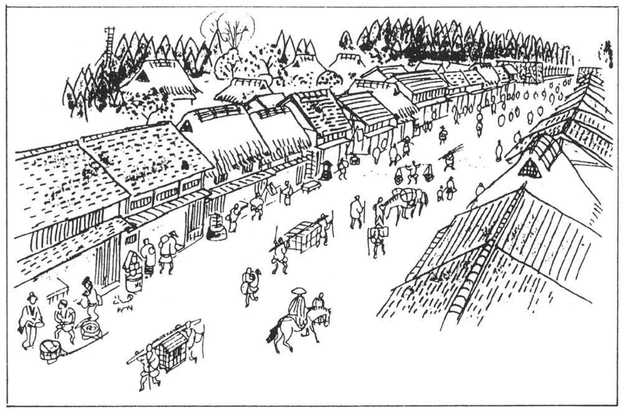
江戸初期、四ッ谷から新宿の追分までの甲州街道沿いには、所々武家屋敷が並んでいましたが、新宿以西の青梅街道はもの寂しい道で、時たま石灰や材木を満載した馬役や野菜や肥桶を車に積んだ農夫が通る程度だったのでしょう。幅も狭く、人や車が通る中央部だけが、道の体裁をなしていて、そのすぐ両側は草に覆われていたに違いありません。土は赤土（関東ローム層）で、雨や霜どけの時にはすぐドロンコになり、土に轍がめり込んで、難渋したことが容易に想像できます。

江戸も中期になると武蔵野の村も世界最大の消費都市江戸への食料供給の生産拠点となり、青梅街道の往来はだんだんと賑わっていきます。江戸名物の火事は、普請用木材や大名屋敷の壁をふく石灰の需要をよび、青梅街道も賑わいが増しました。

寺社ではご開帳というお祭りが行われていますが、明和のころになると、開帳師という者が現れて、本尊の神仏を方々に持ち歩いて景気を煽りたてました。明和元年（一七六四）には、深川で堀之内妙法寺本尊のご開帳が行われ、これが大当たりしたので、堀之内が急に有名になり、妙法寺参詣の為に、街道を下って来る善男善女の姿も多く見られるようになりました。

落語の「堀之内」を聞くと江戸からの道順がよく分かり、江戸っ子の足の達者さに驚かされてしまいます。

江戸市中から妙法寺の参詣をかねた遊客が多くなるにつれ、高円寺村「通り」には、江戸の風俗がだんだんと入り始めます。また元禄十一年に内藤新宿が新設されて、「通り」の人々はその華美な風潮に直接影響を受けるようになり、借財を作って土地を離



内藤新宿

れる者も出始めました。

これに対して「原」では少し離れているせいか余り影響を受けなかったといいます。

内藤新宿の影響を心配し、お上に願い出た文書が残っています。

この文書は文政年間（十一代家斉の世　一八一八～二九）に親村制度の実施で内藤新宿を高円寺、阿佐ヶ谷、馬橋、ほか近郷各村の親村にしようとする動きに対して、とても風紀の乱れた内藤新宿とは一緒になれないと「武州二十一ヶ村の者、一同申し上げます。」の書き出しで始まる陳情書です

これによると、「村の若い者から壮年までが、江戸に商いの途中や農作業の合間をぬって内藤新宿へ行き、酒食を過ごし、女色に溺れる始末。年若い者の中には小唄、三味線を遊び、好ましくない芸事を学び、これが村内の女子にも移り、変な口まねをしたりしてどうしようもありません。止めさせようとしても目が行き届きません、どうぞ親村の件は再考願います。」というものです。

当時の高円寺村はまったくの農村で人々は純朴な働き者だったに違いありません、彼らは農作物を江戸の市場に卸に行く途中に、江戸の中でも、最も刺激的な街を通らなければならなかったのです。行灯の明かりが煌々とした様を見、町屋からこぼれて来る常磐津の三味線の音を聞き、なまめかしい女性の胸元から漂って来る香を嗅いでしまった時、鎮守様の祭りに田舎娘と手を握るのが精一杯だった若者がどうなってしまうかは大体見当がつきます。なにせ免疫がないのです。手元にお金のない者は納屋に忍び込み米俵を金に代えたり、懇ろになった彼女にと当時貴重品だった卵を届ける者もいたでしょう。また持ち金以上に遊んで付け馬（店の若い衆）を連れて帰って来るものや、賭場に入り浸り有り金を叩いてしまう者などもいて、近郷近在の親たちは岡場所を抱えた宿場町の悪風に大変おびえていました。

なにはともあれ新宿は高円寺にとってとても重要な町です。ここに宿場が置かれてから、新宿は長い間江戸の文物、風俗の窓口となって、さまざまな刺激を高円寺に与えつづけてくれました。

新宿は元禄十一年（一六九八）に、日本橋と高井戸宿の四里の間に開設され、品川、千住、板橋、とともに、江戸四宿として発展しました。もともと甲州街道で参勤交代する大名は、信州高遠、飯田、高島の三藩だけで、往来する旅人も少なく、街道沿いの宿屋はさほど儲かっていなかったようです。高井戸宿は二十四軒の宿屋がありましたが、街道沿いだけのいわゆる〝ふんどし街〟でさほど賑わったとも言えぬ宿場でした。これに対して新興の内藤



新宿は商売上手で、宿場を遊郭化させ集客能力を高めて大いに繁盛しました。

四宿一帯には岡場所が立っていました。岡場所とは公認の遊郭の吉原に対する私娼の遊里のことで、遊女としてではなく飯盛女という名目で女性を抱えることが許されていましたが、その仕事は無論給仕ではなく、遊女として客に侍ることです。この新宿は江戸の人からは西里といわれ、吉原、品川、深川と四大遊里と称されていました。ただ、甲州街道は江戸五街道の中でも最も旅行者が少なく、その為か飯盛女の強引な客引きが目立ち、問題も多かったようです。旗本と地元の若者との間に起ったトラブルや宿駅維持に経費がかかり過ぎるというような経済的理由で、享保三年（一七一八）十月に廃駅を命じられました。

この廃止期間が五十四年間続き、明和九年二月二十四日（一七七二）再開されます。田沼時代の賄賂政治と社会制度の緩みが、需要を生み、これ以降ますます岡場所として発展し、江戸末期まで衰えることはありませんでした。

文化五年（一八〇八）には、旅籠の総数が五十軒、遊女の世話をする引き手茶屋が八十軒もあったとされ、そのころの唄に次のようなものがあります。「四ッ谷新宿馬糞の中で、あやめ（遊女）咲くとはしおらしい」

神田川の水運の使えない四ッ谷以西では、物資の運搬は荷駄で行っていました。往来は荷車を引いた馬子の列で、道中のあちこちに土饅頭のような馬糞が落ちていたのでしょう。

内藤新宿は宿場町といっても、日本橋から僅かに二里あまり、訪れる客は旅人よりも勤番の侍や商人、職人たちが、堀之内の妙法寺参りにかこつけたり、近郊農村から江戸へ小売りにでる農民や馬子たちが、帰途を楽しむ所でした。

新宿で遊んだ武士には、ここから登城するのでは道が遠いので、四丁目の天龍寺の時を告げる鐘は便宜上早めに鳴らしていました。この鐘で遊客は袂を分かったので、俗に天龍寺の鐘を追い出しの鐘と呼んでいました。

東海道中膝栗毛の作者十返舎一九、万能天才の平賀源内、狂歌師蜀山人なども、新宿を愛した人達で新宿の三奇人といわれていたそうです。

新宿の隆盛はその後も続き、現在では新都心となり、東京の顔となっています。また岡場所の伝統か、江戸時代後も遊郭がおかれ、また戦後も昭和三十三年に売春防止法が施行されるまで赤線が置かれ、ここにお世話になった男性諸氏も多い筈です。

### 鷹場

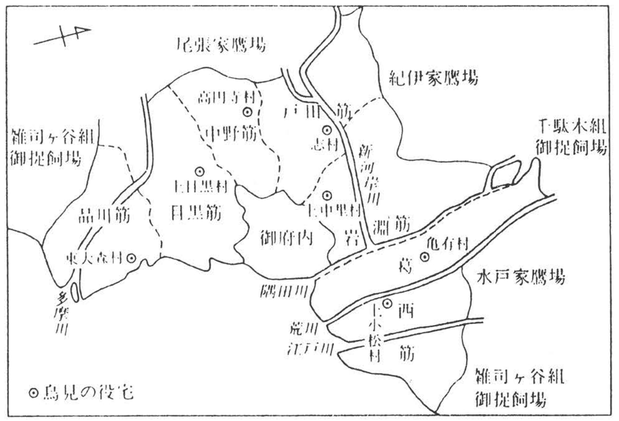
武家の領主の家柄では武芸の嗜みとして昔から鷹狩が行われて来ました。

寛永五年（一六二八）に江戸から五里以内の村々が幕府の鷹場に、その周りには水戸、紀伊、尾張の御三家の鷹場が置かれることになりました。家光が高円寺を訪れたのも鷹狩の途中です。

天領、私領にかかわらず鷹場の指定をうけると、本来の領主

（代官）の他に鷹場関係の役人（鳥見役）の二重支配を受けることになります。

将軍家には、統括する役職を含めると約五十名の鷹匠と配下の鳥見役、野廻役、犬索、餌指といった下役がいました。鳥見役は鷹場中の野鳥の繁殖状況を監督するのが役目で、その権勢は大変強く、「権兵衛が種蒔きゃ烏がほじくる、三度に一度は追わずばなるまい」の諺ももともとは鳥見役を風刺する目的で作られたものといいます。



江戸周辺の鷹場

寛永二十年（一六三四）に三代将軍家光が中野、杉並、練馬、武蔵野方面の九十四ヶ村を鷹場に指定し、これを管理する為に高円寺村の東（高円寺南五―一八付近）に鳥見役宅を設けました。その役宅は、建坪が五十坪余り、将軍が休憩される部屋もあって大層立派だったそうです。

元禄六年になると、五代綱吉の「生類憐みの令」により、鷹狩が禁じられ、高円寺の鳥見番所の役人は罷免されて、鷹は伊豆の新島に放されましたが、綱吉が亡くなると「生類憐みの令」が取り消され鳥見番所が復活し、鷹狩には将軍家のほか御三家も、後には御三卿（田安、清水、一橋）も訪れるようになりました。

八代将軍吉宗の時になると、鷹場に指定された村は九十四ヶ村から七十五ヶ村に減らされましたが、慶応三年幕府がなくなるまで、村々は鳥見役の厳重な管理下に置かれていました。

将軍家、御三家（水戸、尾張、紀伊）、御三卿（田安、清水、一橋）が鷹狩のさいには、鳥見役より命令が発せられ、青梅街道筋の触頭、中野村名主堀江氏を通じて管下の村々へ伝達されました。各々村々に道普請、橋の整備、荷物運搬、勢子、人夫などの賦役が課せられ、そのうえ御鷹場禁制や法度で村民の日常生活を縛り農作業を制限しました。

一　雀をはじめ野鳥を追い払ってはいけない。むろん捕らえたり、巣を取ったりしてはいけない
二　許可なく川ざらいをしたり、八月より翌年三月まで、魚を釣ったり、捕まえてはいけない
三　冬の間は田に水を入れたり、耕してはいけない
四　許可なく大木を伐ったり、畑に苗木を植えてはいけない
五　犬を放し飼いにしてはいけない
六　家を新築、新規に商売を開業してはいけない
七　許可なく、家を改築してはならない
八　花火を上げたり、許可なく寺院の鐘をついてはならない

などと、農民の生活より野鳥の保護を重視し、これを監視するため鳥見役が村々を巡回しました。ずいぶんひどい法度で、住民は窮屈な生活を強いられていましたが、鳥見役は直参旗本の看板と御鷹場禁制を盾に、いばり散らしていたと言います。そして百姓のちょっとした落ち度にも難癖をつけ、賄賂をとったりするので、百姓は無論、代官所からも疫病神のように恐れられ嫌われていましたが、鳥見役は将軍直轄の若年寄支配の為に、勘定奉行支配の代官や旗本領の役人より、格は上でしたのでどうすることもできませんでした。

徳川幕府最後の年となった慶応三年十一月（一八六七）に御鷹場は廃止され、高円寺御鳥見役宅も閉鎖されました。綱吉の時を除いて、二百二十四年間にわたって置かれていた御鳥見役宅ですが、今までの恨みでしょう、役宅はぶち壊され、役人はひどい目に合わされてしまったそうで、その為か長年にわたって領主や代官よりも、権力を誇っていた御鳥見役宅の跡は古絵図からみて現在の南五丁目附近と推定されますが、正確な位置は分からず、関係文書も一切残っていません。

明治の中期に甲州の人が、杉並の森の深さに驚いたというのも、キツネやタヌキ、カワウソが沢山生息していたというのも、この地が鷹場で鳥見役の厳重な管理を受けていたからです。


鷹狩の絵

# 第二章　村から町へ

## 明治

徳川幕府崩壊から明治維新前後の変革はとても慌ただしいものでした。

慶応三年（一八六七）十月徳川慶喜が大政を奉還し、翌四年（一八六八）四月官軍が江戸城を手中に収め、ここに徳川幕府は倒壊しました。彰義隊討伐が終わった五月、東征大総督有栖川宮熾仁親王が鎮台となって駿河、甲斐以東の十三ヶ国を管轄しましたが、いまだ市井の混乱は収まりませんでした。ことに彰義隊の敗残兵が埼玉の天覧山を目指して青梅街道や所沢街道を落ち延びて行く途中、沿道の各地に押し込みに入る事件が続発しました。五月の半ば所沢街道沿いの農家に、それらしき侍の三人組が押し入りました。彼らは金品、食料を強奪し、ついに婦女子に暴行をするに至って、村人が手に竹槍、天びん棒などをもって駆けつけ、暴行した侍たちを馬橋稲荷神社付近に追い詰めて殺してしまいました。この事件をきっかけとして、村々に自衛組織が急速に作られ、これが後の消防団の下地となります。

明治になって制度が落ち着くまで長い時間がかかり、行政区分も例外ではなく、目まぐるしく変わりました。

明治元年（一八六八）の六月には新しく武蔵県知事が置かれて旧代官支配地を管轄し、七月に江戸を東京と改称し、旧江戸市中を東京府、旧代官支配地を武蔵県、韮山県などと称しました。九月には明治と改元、十月には天皇が東京に行幸されました。

翌二年には武蔵県を廃止して品川、小菅、大宮県が置かれ、多摩郡に属する杉並地域は品川県の管轄下に入りました。三月天皇は再び東京城に入り、以来東京城が皇居となりました。

明治四年七月、廃藩置県が行われ、新たに全国を三府三百二県に分けましたが、十一月それらを整理して三府七十二県として府と県には知事（県は後に県令）を置きました。新制度の東京府は旧東京府（江戸市中）のほか武蔵国の荏原、豊島の二郡と多摩、足立、葛飾三郡のそれぞれ一部を管轄することになって品川県はなくなり高円寺村は東京府多摩郡高円寺村と呼ばれるようになりました。

こうして多摩郡は品川県から東京府にひき渡されましたがその後いったん神奈川県に移り、地元の運動の結果再び東京府に戻りました。

明治十一年　区域の二十ヶ村は東京府東多摩郡に編入。

明治二十二年　市制、町村制公布により区内二十ヶ村が四村に統合。

高円寺、馬橋、阿佐ヶ谷、天沼、田端、成宗の六ヶ村は合併して、戸数四八八、人口二八九九人の杉並村が成立し、高円寺村は東多摩郡杉並村大字高円寺に馬橋村は東多摩郡杉並村大字馬橋になりました。



明治二十二年四月に内藤新宿—立川間に甲武鉄道（現在の中央線）が開通して中野駅が開業、駅の北側に陸軍鉄道隊が創設されました。中野駅から近い現在の高円寺南五丁目の東部に鉄道隊勤務の将校の住宅が建ったのが、きっかけになって、付近に家が建ち始め、この辺りが区内で一番早く住宅地になりました。

大正に入ると宮内省が地主から土地を借り上げ、きちんと区画した職員住宅を作りました。地元の人々は、一帯を千代田村と呼んでいたそうです。現在でもこの周辺は大企業の社宅や瀟洒な住宅が並び、商業地区の多い高円寺の中にあって、落ち着いた住宅街となっています。

政府は明治五年（一八七二）に厳重な地押し調査（検地）を実施したところ、高円寺村の戸数は一一四戸人口は五七二人、耕地一二四町一反歩余でした（馬橋村は五六戸、三一二人耕地、六十七町一反歩余）、文政年間の調査から五十年余りたっていますが、戸数はほとんど増えていませんが、耕地は広がっています。

新堀天保用水のお陰でしょうか

杉並の名は、江戸時代の初期、成宗と田端二村の領主岡部氏が境界に植えた杉並木から来ています。

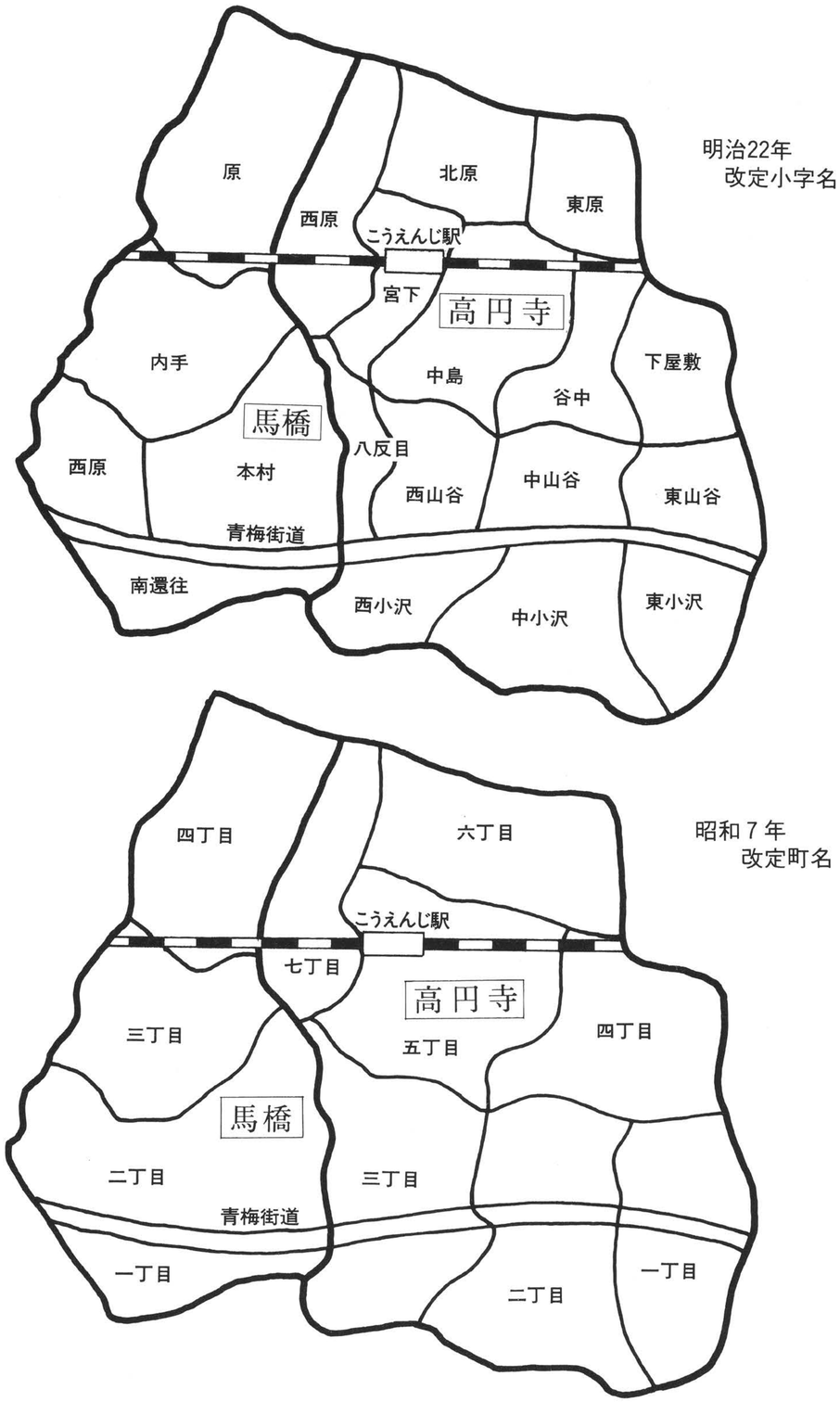
この並木は江戸時代には相当近郷に名が通っていたようで、文化文政の頃の絵図には、村名と並んで杉並の名が青梅街道沿いに記されているといいます。

この杉並の名を冠する村が高円寺、馬橋、阿佐ヶ谷、天沼、田端、成宗の六ヶ村が合併してできました。しかしその時期には、杉並木は開発の為に姿を消してしまったといわれています。

この杉並村が大正十三年の町制施行により杉並町になります。そして、杉並町、井荻町、高井戸町、和田堀町の四町が一つの区を構成することが予定された時、区役所には杉並町役場が充てられることになって、必然的に新区名は杉並になることに決まりかけました。ところが、どこでも町村合併に際しては名称の決定、役所の争奪が起こりがちですが、杉並区の場合もご多分に漏れず、他の三町には、杉並町だけが特別扱いされることへの不満があったようです。実際三町側は名称を多摩区その他への変更を希望しましたが、それ以上の動きにはでませんでした。なんと言っても四町の中では、杉並町が圧倒的に人口が多く、また景観も都市の様相を随所に見せ、新区の中心地にふさわしいことは、衆目の一致する所だったからでしょう。

### 学校誕生

明治五年、政府は学制を発布し、これを受け明治八年（一八七五）中野村の宝仙寺を仮校舎として桃園学校が開校しました。杉並地区からは遠く通学が難しい為に、馬橋、高円寺、阿佐ヶ谷、天沼、田端、成宗村を通学区域に一番分校が馬橋村の清見寺に設けられました。この時杉並区内では、上井荻村に二番分校が、五






日市街道沿いに郊西学校が、甲州街道沿いに高泉学校が開校しています。

こうしてスタートした学校制度ですが、校舎も間借りで学校らしい設備もなく、年齢もばらばらな生徒を一人の先生が教えるのですから大変でした。当時は子弟を学校に通わせることができたのは、生活にゆとりのある中農以上の家か僧侶、医者、神主など学問に理解のある家庭に限られ、一般には「百姓に学問はいらない」という風潮が支配的な時代でした。

明治十七年（一八八四）桃野学校が阿佐ヶ谷村に、つづいて成宗、田端村の成田学校（現在の杉二）が、高円寺にも桃野学校の分教場（現在の杉三）が開校しました。

明治十九年には小学校令が公布されて尋常小学校、高等小学校の二種に分かれそれぞれ修業年限が四年間となって、尋常小学校は義務教育となりました。

二十一年桃野小学校の学区域は天沼、阿佐ヶ谷、馬橋、高円寺の四ヶ村で尋常小学校の該当児童数は三八三名、このうち実際に通学していたのが、二三一人ですから就学率は六〇・三パーセントになります。これは他の地区に比べて高いほうでした。

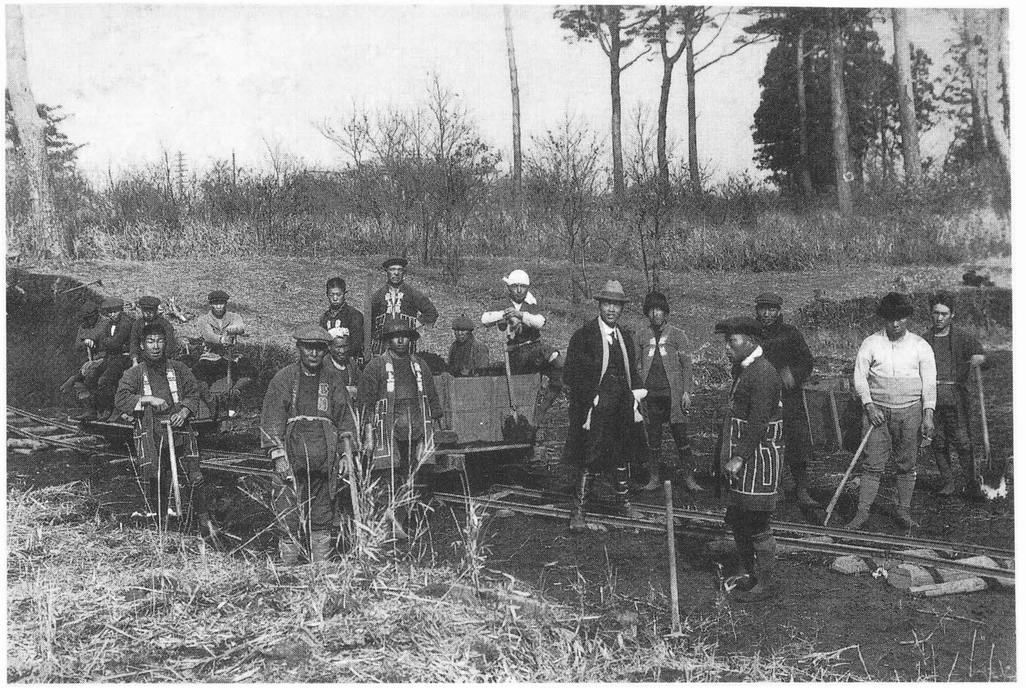
杉並村として高円寺、馬橋、阿佐ヶ谷、天沼、成宗、田端の六村が統合したのも、青梅街道という道路を共有し、善福寺川や桃園川といった共通の水利を有しているからだけではなく、学校制度によっても結び付いていたのも大きな理由のひとつです。

明治一七年、公爵九条道孝の四女節子姫がお七夜から里子として、現在の北一丁目の大河原家で五年間をすごされました。この節子姫こそは後の貞明皇后（大正天皇の皇后）で、昭和天皇の母君です。大河原家では大切にご養育し、気候風土もよくスクスクと成長され、九条家に戻られてからも夏休みにはたびたびお泊りに来られました。陛下が中央線で行啓のおりには、大河原家の当主が門前に正座して奉迎申し上げ、お召し列車は徐行して、陛下にご幼少時代の思い出の家をご覧に入れるのが慣例になっていました。

大正に入って高円寺の西小沢に火葬場ができたとき、「高円寺の名は皇后陛下に縁のある由緒正しいものであるから冠してはならぬ」と宮内省からのお触れがあり、高円寺地区（当時）にありながらも堀之内火葬場と名づけられたといいます。

青梅街道は高井戸の木材、練馬の大根の産出で馬による交通が多く、所々に一膳飯屋と蹄鉄屋が今のガソリンスタンドとドライブインのような関係で大抵一対になってありました。また馬に水をやる水屋も所々にあり、戦前まではジュジュ化粧品の前に残っていたようです。

高円寺の「通り」の農家は妙法寺の参詣人や青梅街道を通る旅人の影響からか東京の生活に憧れて、事業に手を出し没落する旧家が多くありました。



長仙寺西側道路造成工事（大正13年）
丘を切り崩してスロープ状の道を作っている様子がわかる。商店街通りも同様の方法で作られた（佐藤人止氏提供）

維新後、杉並から田無方面にかけて天然染料の藍草の栽培が盛んになり、高円寺の有力者は紺屋を開業しました。そこに働く職人衆が手慰みに始めた博奕が大流行して、毎夜のように賭博場が開帳し、村の衆も多く出入りするようになりました。博奕の負けが込み田畑を手放した農家も多くあったといいます。

藍の関係者は明治三十八年にドイツから化学染料が輸入されるようになった為に価格が大暴落し大損害を受けました。江戸時代から度々名主を勤めて来た旧家でも没落するものがあり、この屋敷跡へ宗泰院、長龍寺、西照寺などが市内から移って来て高円寺の寺町をつくりました。

お寺が移って来た当時の話です。ここに移転して来たのは、牛込などの旗本寺が多く、檀家は中野駅から歩いてお参りに来ます。何も遮るもののない当時のこと、寺のある高台から中野駅が一望でき、春の彼岸の時など蓮華の花咲く小道をつながってやって来る様が望めたといいます。

## 大正―生活、耕地整理、新駅開設、そして関東大震災―

大正に入ると東京の文明開化の流れが漸く高円寺村にも及んで来ました。小学校には素足で藁草履ばきか駒下駄で通っていた子供達も、だんだんと洋服を着て、ゴム靴を履くようになりました。教科書を入れるのも風呂敷から白い肩掛けカバンが多く目につくようになりました。もっとも大きな変化は電気です。「通り」の青梅街道沿いでは八年頃すでに明るく、「原」の人々は夜目にも羨



ましく眺めていました。電灯が「原」に灯ったのは大正十年のことです。電灯会社との交渉の結果、電柱は地元で供出し、職工は民家に泊め、食事の世話をして、作業を手伝うという現在では考えられない条件で、中野から線を延長してようやく明かりが灯りました。今までランプのホヤを掃除するのが仕事だった子供達は、そのまばゆい光に感動したといいます。吹いたり、団扇であおいだりしても消えないことを確かめて一層喜びました。

当時は商店といってもよろず屋程度のものがあったきりでしたが、日用品はほとんど行商の人が売りに来て不自由はしませんでした。大きな家には鮭、さんまの開き、めざしなどを売りに来ていたようです。普通の農家では刺し身、肉にお目にかかれることはまれで、せいぜい飼っている鶏をつぶすのが御馳走でした。どこでも麦七、米三のご飯が当たり前で、半々だったら上等でした。小学生の弁当にはご飯に梅干しか塩鮭少々。卵は病人用で自分の家で取れたものも家計の足しや主婦の小遣いになりました。

子供にとって身近に遊び場がいくらでもありました。春になれば田圃の畦や野原ではせりがいくらでも取れたし、竹藪が多かったせいか高円寺のたけのこは有名で季節になると筍掘りをして楽しみました。

いなご取りやきのこ狩りと楽しみを兼ねた仕事もありました。蛇やイタチ、山鳥、時にはタヌキやキツネもでてくる生活、今の高円寺からはどう想像できましょうか。

大正九年、東京市長後藤新平より「高円寺字西小沢に新設する火葬場に通じる道路用地の買収に応ずれば、高円寺地内に二業地（花柳界）の許可を与える」との申し入れがありました。「原」の有力な地主たちは、東京市街に近い地の利と美しい風景を活用して、村を発展させようと考え氷川神社付近に千人風呂（ヘルスセンターらしきもの）の建設に着手しました。ところが火葬場付近の地主が道路用地の買収に応じなかった為、東京市は二業地問題を白紙に戻し、一千人風呂の計画は莫大な損失を出して、失敗に終わりました。

大正十年、この失敗の打開策として打ち出されたのが耕地整理です。水田地帯を区画整理して宅地を造成すれば村は発展すると関係地主は協議して、「高円寺地区耕地整理組合」を設立しました。

丘や山を崩しただけでは、水田を埋め立てる土が足りないので、曲がりくねった桃園川を直線化し、川底を深く掘り下げ、田圃を乾かして宅地化することにしました。この結果、曲がりくねった何本もの小川の集合体であった桃園川が一本の直線的なものになりました。

その後長仙寺の所有地一万坪（三、三ヘクタール）でも宅地造成が行われ、この工事は中央線沿いの高台（後の緑ヶ丘）に新しい通路を二本通し、その残土で水田を埋め六ヶ月程で竣工したそうです。

ところで「高円寺地区耕地整理組合」は、その後内部問題を抱え、昭和十三年に永年井荻村の村長をつとめ、区画整理事業を成

し遂げた西荻の内田秀五郎氏に出馬を依頼しました。内田氏は換地清算業務を処理し昭和十五年に竣工しました、工事開始以来十七年の歳月が流れました。

中央線は中野―荻窪間に駅がなく、馬橋や高円寺の住人は、目の前に線路が走っているのにもかかわらず中野駅まで歩いて行かなければ汽車に乗ることができませんでした。高円寺、阿佐ヶ谷の有力者が協力し、「そんなところに、駅を作ってもタヌキやキツネは汽車には乗らないよ」という鉄道省を動かし、大正十一年七月に高円寺駅は阿佐ヶ谷駅とともに開業しました。

翌十二年九月一日、南関東は大地震に襲われました。激震に見舞われた東京地方は折から昼食の時と重なった為に、火の手がいたるところから上がりました。下町は壊滅状態となり、死者行方不明者が十三万人、焼失家屋四十万戸に上り、ここに首都機能は一時マヒするにいたりました。

こうした中、高円寺はまだまだ武蔵野の長閑な田園地帯で、さしたる被害は受けませんでした。何せ竹藪、雑木林がいたるところにあって、避難する場所には事欠きません。震災直後、避難の途中高円寺を通りがかった井伏鱒二氏は『目の前の電信柱に「どなたでも、御自由にお茶を召し上がって下さい」という貼紙が出て、地べたに並べたニス塗りの机の上に、土瓶と湯呑みが置いてあった。』と「荻窪風土記」の中で触れています。市街地からの避難民の為にこの暖かい心遣い、今でも残っているでしょうか。

都心で被災した多くの市民は、一時非難の場所として、又は新たなスタートの根拠地として郊外に目を向けました。こうして注目されたのが高円寺です。

中央線で新宿にも近く駅があります、しかも区画整理が進み宅地を作るのが容易であることなどが歓迎されたのでしょう。関東大震災を契機に高円寺の人口は急カーブを描いて増加します。さあいよいよ高円寺は街の形成へと発展の歩を進めます。

佐藤人止（ヒトシ）さんのこと

本書の中に大正十三年に撮影された貴重な写真三枚が紹介されています。「桃園川開削工事」「南台地より北方を臨む」「長仙寺西側道路造成工事」です。この写真は佐藤人止氏が大切に保管されていたものを、ご家族の方からお借りしたものです。

同氏は測量技師として神奈川県庁にお勤めになっていたのですが、大正十二年に勤めを辞し当時新開地として注目されていた高円寺に移住され長仙寺の西並びに居を構え測量事務所を開設されました。

耕地整理・桃園川改修他数々の仕事にたずさわれ地元の著名人として、一目おかれた存在でした。

昭和十九年に北口へ移転されたため幸い戦災を免れ、この貴重な写真が残されていたのです。

佐藤人止さんは真面目一途曲がったことは大嫌いという明治人らしい気骨の持主だったそうですが、家庭を大切にし大変子煩悩な方でもあったようです。

昭和六十三年十一月十六日に九十三歳で他界されましたが、高円寺の初期の街づくりの功労者の一人として記憶さるべき人物だと思います。



# 第三章　町から街へ

大正十二年九月一日真昼の関東地方を襲った大地震によって、東京はもとより、わが街高円寺も大変革期を迎えました。前年の大正十一年七月十五日には高円寺駅が開設されていました。後にパル商店街になる道は、駅開設以前は赤土が剝き出しで荷車がやっと通れるぐらいの切通しでした。現在のさくら銀行の辺りは長仙寺の山から続くくぬぎ林、中程は孟宗竹の林、北口の三菱銀行付近は見通しがきかぬほどの熊笹が生い茂っていました。桃園川の南側ルック商店街の道はまだ出来ておらず、その辺りは繁みが深くキツネでも出そうな所でした。川には橋がなく丸太が一本渡してあり『一本橋』と呼ばれていました。まわりは畑や田んぼ、雑木林に囲まれた武蔵野の農村風景が広がっていました。米作は自家消費程度で、畑でナスやキュウリなどを作って出荷していました。殊にナスは土が合うのかおいしいものが出来、神田や淀橋の市場では高く売れました。当時の子供達は雑木林でチャンバラごっこを、桃園川では水泳をし恰好の遊び場としていました。飲料水は井戸水で事足りていましたが、農業用水は桃園川の水だけでは足りず、毎年夏になると水不足に悩まされていました。雨乞いの為、大山詣りにもでかけました。

駅が出来、パルの道も両側の山肌を削り道幅は広げられたものの泥道で雨が降るとぬかるみ、砂利を敷き詰めても馬車が通るとまた水溜りができるほどでした。青梅街道筋には既に電気が開通しており夜になると家々の明かりが一本の帯のように見えました。その青梅街道には大正十年八月西武電車（後の市電・都電）が開通していましたが、まだ砂利道で馬車や荷車が通った後には土煙りが上がる、というような周囲の状況でした。駅から桃園川までの間に商店はわずか五軒しかないうえ、大正九年に電気が通っていたとはいえ街灯など勿論なく、駅への行き帰り夜は提灯をつけて歩きました。そのように人家もまばらだったため震災による被害はほとんどありませんでした。しかし余震を警戒して孟宗竹の林で一週間ほど蚊に刺されながらも寝起きする一家もいました。高円寺駅と同時に開設された阿佐ヶ谷駅は田んぼを埋めて造ったためホームや駅舎は壊れ列車は停車できませんでしたが、高円寺駅は台地を削って造ったため難を逃れました。

駅の開設そして大正十二年三月に発足した高円寺耕地整理組合の活動と相まって、震災直後より東京市中から日一日と人々が移り住んできました。商店街としての形態は、耕地整理でできた通称四間道路（旧夜店通り・現在のシルバー商店街、当時は東より来た道路は現在のパル通りで突き当たり、エトワール通りは後に開通した）から始まったようです。しかし、当初沿道には怪しげな木賃宿がならび、夜になると袖を引くという風紀びん乱した世

相でしたが、大掛かりな取り締まりによりそれも姿を消しました。そして、汚名返上策として露店出店が許可され、毎月片側交代で店が出、高円寺の子育て地蔵の縁日も盛んになり夜店も出たりして、上野広小路にあやかり、一帯は広小路と呼ばれていました。その露店商人の中には商売に成功し通りに店を構える者もおり、夜店通りがいわば高円寺の商店街の発祥の地です。

大正十三年、この年の六月町制施行により杉並村から東京府豊多摩郡杉並町になったのですが、春ごろより次第に商店の数も増え、南商店街に町会が結成されました。しかし、当時はふたつの町会に分かれており、中程より駅寄りは室町町会、南側桃園川までが広小路商工会となりました。室町の道は砂利道ながら整備されていましたが、広小路は泥道のままでした。町会として最初に取り組んだのがその泥道の整備でした。震災で倒壊した中野刑務所（当時は豊多摩刑務所）のレンガ塀を馬車で百五十三台分運び、現在の清水屋さんの角から大下水（当時桃園川はそう呼ばれてもいた）まで敷き補修工事をしました。その後、地主や町会員の寄付金を得、厚さ七～八寸のコンクリートの本工事を完成させました。次の問題は桃園川です。雨が二時間も降れば氾濫し大洪水となりましたが、改修の為の猛運動を起こし、北側の現在の位置に移動し蛇行していたものを直線にし、その拡張にも成功しました。その桃園川といえば、耕地整理当時の高円寺の街づくりの青写真によると、二倍に拡張し両岸に以前あった桃の並木にかえて桜並木を作ることになっていましたが、耕地整理の頓挫により計画だおれに終わりました。今から思うと誠に残念でなりません。

川添に桃の並木があった頃の話です。兵隊さんたちが演習を終え中野の兵舎への帰り道、桃の木の下で小休止を取っていると、それを遠くから見ていた子供たちは跳んで行って携帯品の乾パンを貰うのを楽しみにしていました。現在のようなスナック菓子などなく、畑のキュウリに塩を掛けおやつのかわりにしていた、そのような時代でした。

駅では、大正十四年一月から人力車の営業が、そして昭和二年三月からは構内の売店の営業が開始されました。開設当時から改札口は北口のみで、南口にも設置しようという話が持ち上がり、東（氷川神社付近）と西（商店街入口付近）とで競争になり室町・広小路両町会会員一同団結、熱心な運動を展開し、昭和八年西側に設置されることになりました。商店街から改札口までの道路の拡張には何軒かの家の買収が必要だったため、その資金も会員の寄付により賄いました。

このような先人達の多くの努力と苦労により商店街の礎が出来上がったのです。

時代も大正から昭和へと移り変わり、七年十月区制施行により杉並町から東京府東京市杉並区となりました。わずかながら残っていた畑もこの頃すべて姿を消しました。新興住宅地として東京市中へ通勤する若いサラリーマンのための住宅が続々と建てられ、それにつれて子供の数が急激に増加し、小学校も次々と開校しました。サラリーマンの他にも軍人と学生の多く住む若い町でした。



この頃高円寺の商店街は大隆盛期を迎えます。建物の高さや人口は現在とは比べようもありませんが、商圏範囲や集客力は当時の方が格段に大きいものでした。昭和十四年の荻窪駅の一日の平均乗降客数は一万八千人、高円寺駅は二万二千人、高円寺は杉並一にとどまらず、世田谷の三軒茶屋と並び称される東京屈指の商店街を形成したのでした。現在その三軒茶屋と下高井戸間を結んでいる東急世田谷線も高円寺まで延伸される計画でした。本通りから一本入った細い裏道にはバーやカフェが軒を並べ、中央線沿線でも一大歓楽街でした。昼と言わず夜と言わず人の流れは絶えることなく、ネオンが煌々と輝き空が真っ赤に染まるのが阿佐ケ谷からも望めました。北口商店街は当初庚申通りから発展していきました。その後本通り（銀座通り　現純情商店街）が開通してからは駅へ直結しているためこちらの方が賑わうようになりました。しかしそのような高円寺の賑わいもそう長くは続きませんでした。

昭和十六年十二月太平洋戦争勃発、日増しに戦火も激しくなりどこの店先にも防火用水が置かれておりましたが、その中で鯉や金魚を飼っている店もありました。経営者の中には召集で戦場に赴く者、徴用で軍需工場で慣れぬ作業をする者もありました。また残った人たちも隣組による防火演習や警防団にと駆り出されたりしました。商店街の道路は防火演習の場としても使われたのです。高台にある杉六小学校には高射砲の陣地が築かれ、また区役所の屋上には敵機の来襲を見張る人が常時詰めていました。灯火管制でネオンも消え、商売をしたくとも売る商品も少なく、開店休業の状態が続きました。

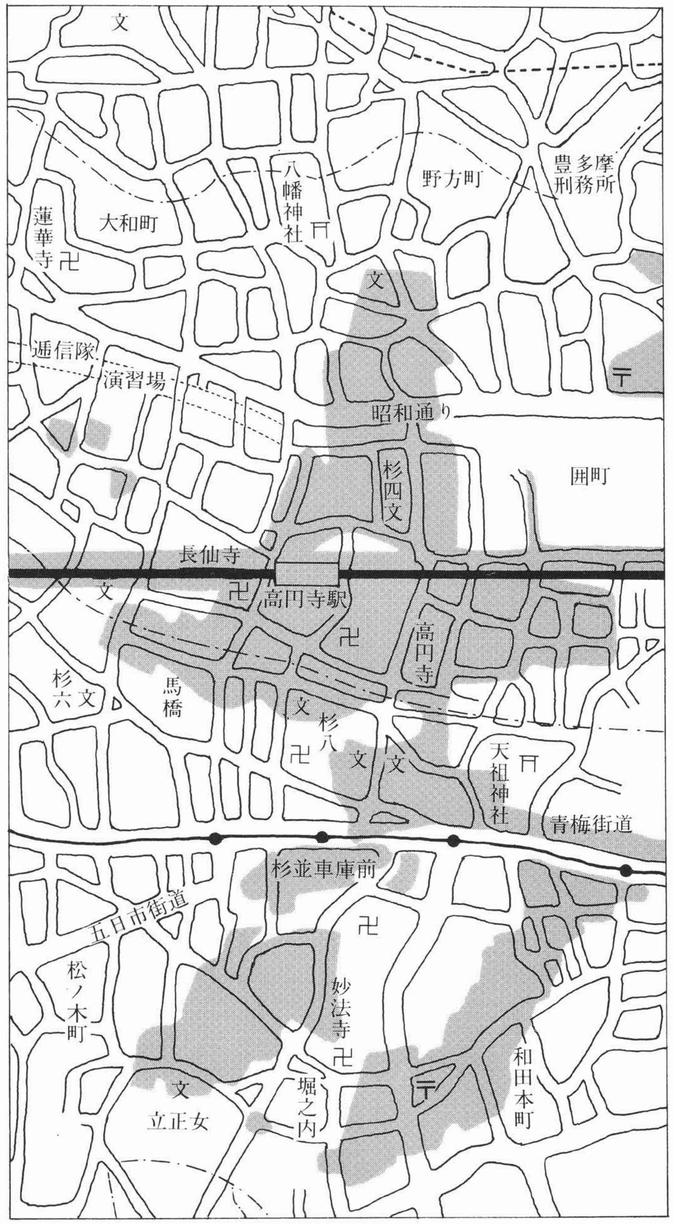
その頃のある商店主のエピソードをひとつご紹介しましょう。徴用で三鷹にあった中島飛行機の工場に通っていたその人は、ある日小学生の息子をその工場へ連れて行きました。空襲により工場の敷地内にはいたるところ大きな穴が開いていました。「工場内はもっとひどい被害を受けている。夜になっても帰らない時、お父さんはここで死んだと思ってくれ」と、息子に語りました。

そのような時代の中をも当時の人たちは一生懸命生きていました。昭和十八年七月都制施行で東京市杉並区から東京都杉並区へと変わります。そして昭和十九年から二十年にかけて強制疎開が始まり、現在のパルとエトワール通りの十字路から南側桃園川までの建物を取り壊すことになりましたが、それが済まぬうちの二十年四月十三日夜の空襲により一面焼け野原となりました。




4月13日の空襲を伝える
4月15日付の朝日新聞

# 戦災焼失区域




戦災焼失区域



# 高円寺駅南商店街の変遷



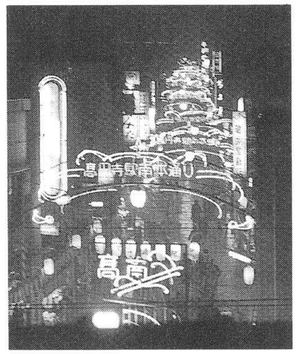

● 昭和１０年頃の図面は正確な史料がなく、皆さんの記憶をもとに描いたものです。

# 第四章　戦後の復興から現在まで

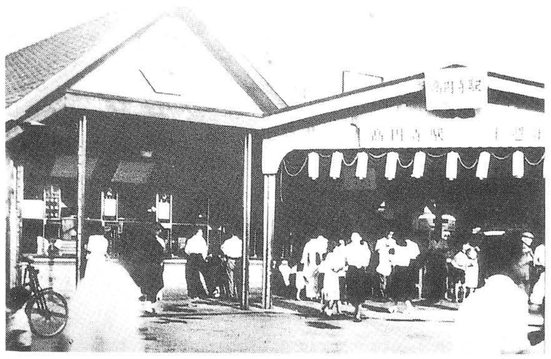
昭和六年九月十八日の満州事変に始まった長い戦争も二十年八月十五日に終わり、復興の鎚音が響き始めますが、まだバラックが数軒建っているだけで、高円寺駅頭に立つと青梅街道を行く荷車が見え、また中野の鍋屋横丁から長仙寺のいちょうの木（現存）も眺めることができました。子供たちといえば、まだあちらこちらに残っていた防空壕などを恰好の遊び場としていました。しばらくして道の東西両側には露店が並び始めました。西側では住民が立川の中島飛行機から材木を運び二間間口の店二十四～五軒を造り、二十年十一月一同商売を始めました。東側はかなりの間露店が並んでいました。戦災で焼け出され故郷へ帰ったり、他へ住居を移したりした人々に変わって商売を始める人たちがいました。現在のパル商店街で商売をしている人たちの多くがこの時期新たに移り住んだのです。その頃の道幅は噂されていた区画整理（別述）を予想し、現在よりも両側二～三メートルずつ広いものでした。そして、店の前にも露店が並び食料品や雑貨、古着等を売り、人通りも大変多く街は活況を呈していました。しだいに商店街は元の姿を取り戻し、二十二年戦前の二町会に変わって商盛会が結成されました。

二十年代後半には、道路の東西を横断して『高円寺駅南本通り』という愛称名の入ったネオン灯が設置されました。

昭和二十八年テレビの放送が始まりますが、家庭への普及は後のことで、街頭テレビが立っていた駅前広場は『力道山』を見る人で溢れていました。北口には駅に隣接して高円寺一高い白木屋デパートが建ち、その前には何台も輪タクが駐車していました。まだ娯楽の中心は映画でした。高円寺には映画館が何軒もあり、子供は月光仮面や白馬童子、大人は石原裕次郎や小林旭の活躍に胸を躍らせていました。やがてテレビが映画に取って変わるようになり映画館も一軒また一軒と減り、『高円寺東映』と『ムービー



ネオン灯



昭和27年，開設30周年を祝う高円寺駅





昭和32年高円寺駅付近。踏切北側より南商店街を望む。右側木造建造物は踏切番小屋

山小屋』は西友に、最後まで頑張っていた『平和劇場』も現在自転車駐輪場に姿を変えています。

昭和三十二年八月十四日、商店の若手二世や従業員有志の親睦と相互理解を深めるために商盛会青年部まどか会（当初は《ぼんぼんくらぶ》と称した）が発足しました。それを記念して催されたのが阿波おどり（別述）でした。このまどか会の会員たちが後の振興組合の中枢を占めることになります。父親たちが組織する商盛会の下若き会員たちは、売り出し・宣伝・装飾事業、商店街視察、レクレーションなどあらゆる分野において大活躍をしました。大雨で桃園川が氾濫すると緊急動員され、コンクリート製のゴミ箱が流されてくる濁流の中を腰まで水に浸かりながらロープを張り安全確保に努めたりもしました。

三十年代の中元・歳末の福引売り出しは、若手のユニークなアイデアと活発な活動により大変活気のあるものでした。（販促娯苦楽帖に詳述）そのような商業活動により三十九年には区商連主催の商業まつり売り出しコンクールで金賞を、翌年の都と区の商店街コンクールでは東京商工会議所会頭賞、区の名誉賞を受賞しました。

しかし、そのような活発な販促活動とは裏腹に商盛会内部では深刻な問題が発生していました。区画整理とその対応の相違からおこった対立です。それまで一致団結計画に反対してきたにもかかわらず、計画縮小により商店街の道が境界線になってしまい対象区域に残った東側住民と対象から外れた西側住民との反対運動に対する熱意、取り組み方に大きな差が生まれてしまったのです。商盛会の役員も東西に分かれ、組織としての会の機能も低下して

いきました。その打開策として、一気に世代交代を行い、感情的対立のない若手二世たちに組織の運営を移譲し活性化をはかることになったのです。昭和三十八年八月十五日商盛会臨時総会が開かれ理事長以下全役員に若手が起用され、新たなスタートを切ったのです。区画整理問題は都側の対応の軟化、最高裁まで行った裁判の敗訴など状況の変化により、反対運動も徐々に沈静化し、単なる反対から条件交渉へと移っていきました。四十四年頃駅の南側地区の区画整理は一応終了しましたが、北側地区では今なお都市計画に対する反対運動が続いています。

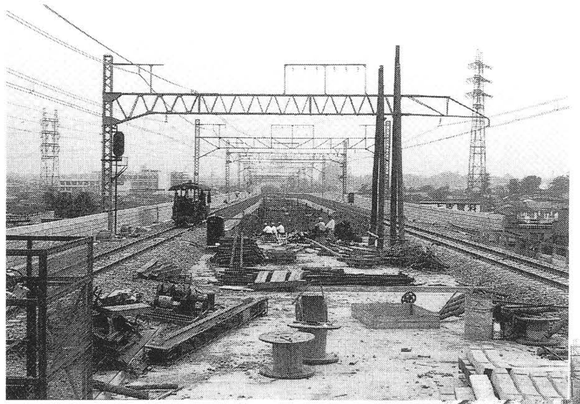
昭和三十九年の東京オリンピックを頂点とする日本経済の高度成長は高円寺を取り巻く環境をも大きく変えました。建築ブームに乗るように木造から鉄骨へと街並も変わります。商店街の名前もそれまでの『高円寺駅南本通り』から、三十八年十二月には『高円寺ショッピングセンター』となり南北の入口にはアーチも設置されました。三十六年十一月の地下鉄開通（荻窪までの全線開通は翌年）、三十八年十二月の環状七号線開通、都電廃止と交通網が整備されていきます。しかしそれは消費者を新宿や荻窪、吉祥寺へと流出させることにもなりました。商店街通りを自動車通行禁止にする交通規制（午後四時～七時）が実施されたのもこの頃からです。そして永年南北商店街を分断し、朝九時北口の三菱銀行へ両替に行き、戻って来たら店の者は昼食を食べていたというほど開かなかったあの有名な『開かずの踏切』が中央線の高架化の完成（複線の開通）によりなくなったのが三十九年九月二十日のことでした（複々線の荻窪までの開通は四十一年四月）。踏切とともにもうひとつの悩みの種であった桃園川の下水暗渠化が四十二年完成、高円寺開村以来幾度となく大洪水を起こし、阿波おどりを中止させた暴れ川は地下に没しました。現在その上にはアーチや街路灯、花壇が整備され、きれいな遊歩道に姿を変えています。

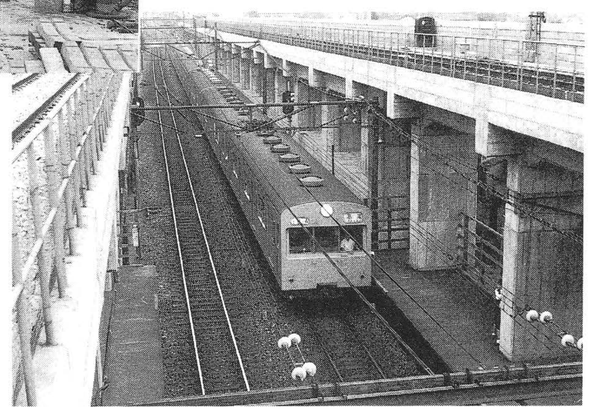
昭和三十九年頃から商店街の法人化（振興組合の設立）が論議されるようになりました。オリンピックを境に日本経済も下降線をたどりはじめます。中野、阿佐ヶ谷など周辺商店街が、ますます発展の様相を見せ、ひとり高円寺だけが取り残されているような状況でした。それに対処するには各店の努力は勿論ですが、街路灯やアーケード、駐車場などの施設の整備が不可欠です。都などから融資を受けそれらの施設を建設するには組合の法人化が必要であり、設立機運が盛り上がって行ったのは当然のことでしょう。区画整理の終了とともに商盛会の内部も安定し、法人化へ向けての勉強会や検討会が頻繁に開かれるようになりました。

中央線の高架化によりその下に大ショッピング街が出現するのではないかという不安から、四十年には庚申通り、銀座、商盛会三商店街合同でフラワーセールを開催したり、南北各商店街が行う中元セールの期間を統一するなど対抗策もとられました。

昭和四十二年から四十四年にかけてそれまで親しまれていたネオン灯に変えてモダンな街路灯を設置しました。スーパーなど大型店の進出に対抗し、また消費者の他地区への流出を防止し且商







中央線高架工事

店街の活性化を図るため商店街一丸となってのワゴンセール『どんとく』の第一回目が四十四年六月二十七日から二十九日の三日間にわたって行われました。この『どんとく』は、好評を得ていた銀座商店街の『びっくり市』を範として始めたもので、『びっくり市』に追い付き追い越せとばかりにその熱気たるや凄まじいものでした。

その間にも組合設立問題は徐々に進展し、法人化ののろしが上がってから実に八年後の昭和四十七年五月九日組合設立の為の総会が開催され、そして区への認可申請、出資金の預託、登記と進み六月一日『高円寺南商店街振興組合』が誕生しました。しかし、組合設立が最終目的では勿論ありませんでした。

組合設立はアーケード建設に向けての第一のハードルに過ぎませんでした。研究を進めれば進めるほど難問が待ち構えており、それをひとつずつ乗り越えて行くという日々が続きます。しかし、組合員の心は一点アーケード建設に集中していました。その時すでに中野や阿佐ヶ谷にはアーケードがあり、その発展を目のあたりにするにつけアーケード建設が急がれました。建設資金の八割は東京都の高度化資金を利用しますが、残りの二割は自己資金で賄わなければなりません。その積み立ても始まりました。建設委員に任命された理事たちは、都内のアーケードのある商店街だけでなく、遠くは大阪、神戸、姫路まで視察に行きました。調査研究も着々と進み、昭和四十九年五月十六日の通常総会において建設推進を決議、昭和五十二年三月二十八日に開かれた組合の臨時

総会でアーケード建設事業実施が満場一致で可決され、設計などの本格的準備に入りました。五十三年五月二十三日、東京都より建設の認可がおり、その年の十一月着工しました。アーケードとともに道路のカラー舗装も行われていたため至るところ掘り返されており危険でした。真冬の寒い夜、組合員は交代で立ち事故防止に努めました。翌五十四年三月末、待ちに待ったアーケードが完成しました。愛称名も『高円寺パル』となり、阿波おどりも踊られ盛大なセレモニーが催されました。幾多の難関を克服してこの完成の日を迎えた組合員の胸には万感迫るものがありました。『ハワイ旅行ご招待』を目玉とした完成記念の福引セールも好評を博しました。

アーケードが出来順調に推移しているかのように見える商店街にも問題はありました。ひとつは五十七～八年頃に発生したキャバレーやサロンといった風俗店の問題です。風俗店は地下や二階などに出店し、商店街路上において大声での呼び込み、強引な客引き果ては若い女性へのホステスの勧誘と通行人を巻き込んでのトラブルを起こすに至りました。現状を放置すれば青少年に与える影響は勿論一般通行人の不安と迷惑は計り知れないものになる為、組合としても見過ごすことは出来なくなり、駅南側の近隣商店街、自治会と『高円寺環境浄化協議会』を結成し、警察への取り締まり強化の陳情や家主への説得と手を尽くした結果それら悪質な店は一掃されました。もうひとつは、どこの商店街にも潜在する経営者の高齢化と後継者不足という問題です。それは昭和六十年代に入り顕著になり今後より一層深刻化するのは確実です。廃業し売却したり、テナントに貸したりする店がぽつぽつと出始めます。折からのいわゆるバブル経済による地価高騰により家賃も上昇し、物品販売では経営が成り立たず、勢いパチンコ店などの娯楽サービス産業の増加につながりました。

終夜営業の店が増え、特に若い人たちの行動に夜昼の区別がなくなってきた時代の流れを受け、パル商店街でもそれを反映した企画『ミッドナイトセール』が六十一年十二月から始まりました。閉店時間を夜中の十二時まで延長し、買い物をしたお客様にジュースや缶ビールをサービスするというもので、翌年三月からは毎月第一土曜日に行われるようになりました。しかし、従業員の労働時間の問題、買い物客の特定業種への偏りなどもあり、夏を境に中止されました。

昭和六十一年から三年にかけて、売上税・消費税導入問題が起こります。売上税は国民各界各層の猛反対にあい廃案になりましたが、消費税は賛否両論渦巻き、商店街としてもその対応に苦慮していました。しかし、中小零細商店をそしてそれ以上に消費者に多大な負担を強いる税制には断固反対するという立場を貫き、平成元年三月開催の杉並区商店会連合会の総会においてカルテルを結ぼうとする執行部に対して、高円寺地区の商店街は結束し、政府に消費税実施中止を求める決議案を緊急提案し、杉並区内の他の商店街の賛同も得て、一気に採択させました。パルおよび駅



周辺の商店街はその急先鋒に立ったため多数のマスコミの取材を受けました。しかし、平成元年四月一日消費税は実施されました。

客足が途切れがちになるゴールデンウィーク後半に何かイベントをと考え、六十三年五月三日、四日の両日、アーケードの中を花で飾る『フラワープレゼントセール』を開催しました。花の鉢を両手に提げたお客様が商店街の中を行き交い、季節に彩りを添えます。毎年同じ時期に開催し現在も続いています。

昭和五十年代半ば頃より高円寺のみならず駅周辺に放置される自転車が増え始め、殊に高円寺は東京一という不名誉な記録を作りました。五十九年九月杉並区は自転車条例を制定し、翌年五月一日から自転車放置禁止区域を指定し、警告や撤去などを実施しました。しかし高円寺では、駅前開発計画を持つＪＲ（当時は国鉄）の協力が得られないため駐輪場がなく条例の効果が一向に上がりませんでした。状況はますます悪化の一途をたどるばかり、区とＪＲの交渉も進展の兆しの見えなかった六十三年の夏、住民運動を展開しその解決をはかろうと、高円寺一円の自治会、商店会、ＰＴＡなど約三十団体で『高円寺駐輪対策協議会』を発足させ、区やＪＲは勿論関係官庁に積極的に働きかけを行いました。その結果、翌平成元年五月、住民・利用者・関係諸官庁・鉄道バス事業者・学識経験者など二十五名で構成される杉並区長委嘱による『高円寺駅周辺自転車対策協議会』が誕生しました。その後一年間にわたり会合を重ね、住民・ＪＲ双方が譲歩し、二年四月区長に提言書を提出しました。折しも北口に駐輪場用地（元平和劇場跡地）がみつかり、三年三月その駐輪場の完成とともに駐輪登録制が実施され駅前周辺の放置自転車も大部減りましたが、なおも地下駐輪場の建設など抜本的な解決策が望まれます。

昭和六十三年四月に建設が始まった新宿の新都庁舎の威容が遠望されるようになった頃から、高円寺駅周辺にもビル建設ラッシュが押し寄せ、会社のオフィスや経理・語学といった専門学校が急増しました。道を行く人の流れも以前は駅への一方通行だったものですが、今、朝の高円寺駅頭に立つと改札口に吸い込まれて行く人の数もさることながら、そこから出て来る人の数の多さに驚かされます。都心の街と同様、「高円寺に住んでいる」という人より、「高円寺へ通っている」という人の方が増えて行くのでしょうか。

高円寺の町を、そして商店街の礎を築いた我々の先輩たちは、この七十年足らずの変貌ぶりをどう見ていることでしょう。「冗談じゃねえ、俺たちの頃の方がもっと活気があってすごかったぞ。頑張れ、頑張れ！」と、言っているような気がしませんか？

平成四年、高円寺パルは、高円寺駅開業から七十年、関東大震災から六十九年、商盛会結成から四十五年、まどか会発足から三十五年、組合設立から二十年、アーケード完成から十三年めを迎えました。

## 物価の変遷

（単位・円）平成４年は税込価

| | 昭和25年 | 35年 | 45年 | 55年 | 平成 4年 | S25年を１とした場合の倍率 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 新聞代（月決め） | ５３ | ３９０ | ９００ | 2,０００ | 3,６５０ | ６９ |
| ビール（大ビン） | １００ | １０７ | １４０ | ２４０ | ３２０ | ３．２ |
| 国鉄（JR）入場券 | 5 | １０ | ３０ | １００ | １２０ | ２４ |
| もり・かけ（標準価） | １５ | ３５ | １００ | ２８０ | ４００ | ２３．３ |
| 週刊誌（推定平均価） | ２５ | ４０ | ７０ | １７０ | ２６０ | １０．４ |
| | | | | | | |
| 参考 大学卒初任給 男子事務系－全産業平均 | 昭和27年 10,166 | 14,288 | 40,961 | 118,138 | 平成 3年 183,422 男女同額 | S27年を１とした場合の倍率 １８ |

＊新聞代の上昇率が目立つが昭和30年代までは朝刊だけだったと思う。頁数も少なかったから実質倍率は30倍ぐらいか

＊ビールは酒税との関わりと、趣好品から大衆品への性格変化により低倍率になったと思われる

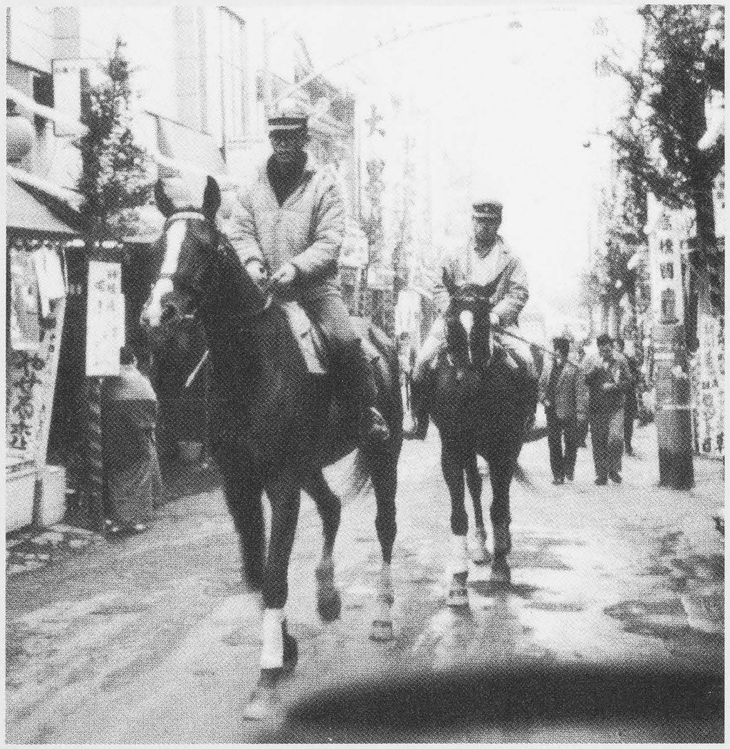
＊初任給、もり・かけ等の倍率から考えて、一般的な物価の上昇倍率は平均20倍ぐらいではないか（S25を１として）

## 高円寺地域町丁別世帯数人口

平成４年

| 町名 | 世帯数 | 人口 | 一世帯当り人数 |
|---|---|---|---|
| 高円寺北 一丁目 | 1,157 | 2,319 | ２．００ |
| 〃 二丁目 | 2,136 | 3,769 | １．７６ |
| 〃 三丁目 | 3,394 | 5,931 | １．７４ |
| 〃 四丁目 | 1,888 | 3,781 | ２．００ |
| 高円寺南 一丁目 | 3,386 | 6,137 | １．８１ |
| 〃 二丁目 | 3,617 | 6,387 | １．７６ |
| 〃 三丁目 | 4,059 | 7,391 | １．８２ |
| 〃 四丁目 | 2,315 | 4,072 | １．７５ |
| 〃 五丁目 | 3,109 | 5,861 | １．８８ |
| 計 | 25,061 | 45,648 | １．８２ |





### そこのけ　そこのけお馬が通る

これは昭和三十年代後半のお話です。

年に二、三回高円寺のメインストリートをお馬さんがカッポすることがありました。

某大学の馬術部の面々が騎乗して庚申通り・銀座通り・商盛会通り・新高円寺通りを抜けて世田谷の馬事公苑へ行ったのです。夕方になると蹄の音を響かせながら逆の道順で帰っていきました。

人々は商店街を通るお馬さんをみて笑いながら道をあけました。

この時代は高度成長のはしりの頃で、自動車もまだ多くなく、青梅街道等では荷馬車を見掛けることも時折あったのです。それにしても狭い商店街を堂々と行く風景は珍しく、この写真がある新聞のトップを飾ったものでした。（午年の正月）

実はこの大学の馬術部ではお金がある時は馬をトラックで搬送していたのですが、費用がない時は騎乗して移動していたのだそうです。

馬は生き物ですから当然生理現象が起きます。歩きながらお荷物を落とすこともあったといいますが、当時の人々は当り前のように後始末をしていたようです。今では考えられないことですね。

ようやく世の中が安定してきたとはいえ、この頃はまだまだ貧しい暮しをしていた時代です。

でも何かほのぼのとした人のココロが感じられる良き時代のお話でした。

# 第二部

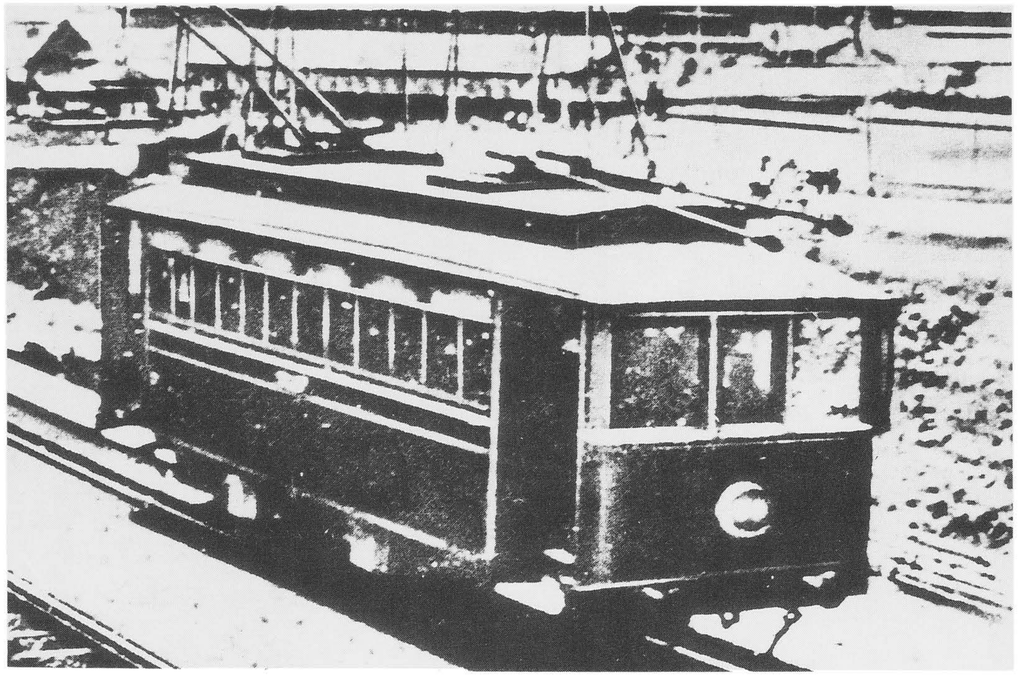
# 高円寺雑記



# 中央線物語

明治五年九月新橋・横浜間にわが国最初の鉄道が開通し、つづいて高崎線、山手線、東北線と開業（全線開通は後年）、東京より西に延びる鉄道を敷設するため明治二十年四月甲武鉄道株式会社が設立されました。当時東京と甲州を結ぶ交通路といえば甲州街道であり、その宿場町である調布や府中は大変栄えていました。鉄道も当然街道に沿って敷設される計画でしたが、沿道の住民から蒸気機関車の火の粉で農作物が駄目になる、藁ぶき屋根が火事になる、宿屋・車夫・人夫が職を失うなどの理由から猛反対され、また青梅街道沿道でも反対、やむなく現在の位置に路線決定されました。現在の中央線沿線も当時は畑や雑木林ばかり、途中に高い山も大きな川もなく、甲武鉄道の技師も地図に定規をあて、淀橋（現在の東中野）から立川まで直線で最短距離を結んでしまいました。鉄道開通以後、甲州街道の交通量は激減し以前のような隆盛は見る影もなくなってしまいました。その反省から、大正初期の京王線敷設の時には猛烈な誘致運動をして開業を迎えました。

中央線敷設工事はその地形ゆえ新宿・立川間はわずか十ヶ月で完成しました。明治二十二年四月十一日開通、四月十六日営業運転が開始されました。開業当時は機関車が一両しかなく、それに



甲武鉄道。中野付近と思われる（明治37年８月，飯田町～中野間電化完成）

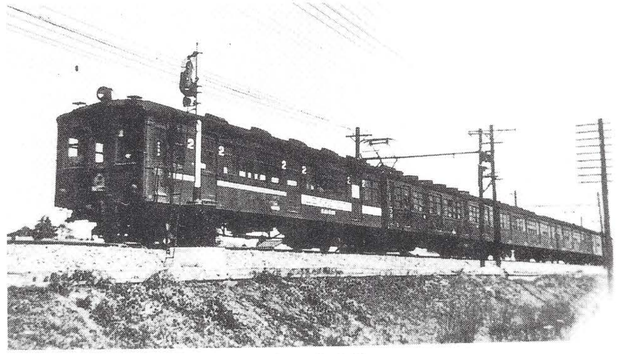


前頁写真：南台地より北方を望む（大正13年）
電柱のところが桃園川。撮影位置不詳なるも
現杉八小近辺から撮ったものと思われる。
（佐藤人止氏提供）

引かれた客車が四～五両、この編成で単線の線路を午前と午後二往復するという誠にのんびりとしたものでした。明治二十四年十二月二十一日荻窪駅が開業します。甲武鉄道も広告に力を入れ、小金井の桜、妙法寺、新井薬師、高尾山などを盛んに宣伝したため、物見遊山の客で混雑するようになりました。中野駅の乗降客の多くが妙法寺や新井薬師への参詣客で、昔は遠くから一日がかりで歩いて来たものが、汽車が走るようになって便利になり足腰の弱いお年寄りは大喜びでした。現在の通勤地獄とは正に隔世の感があります。

明治二十八年四月飯田町まで延伸、三十七年八月にはわが国最初の電車が飯田町・中野間に登場しました。三十九年十月甲武鉄道は国有化（鉄道院）され『中央線』と名を改めました。大正九年五月鉄道院廃止、鉄道省が設置され、以後明治・大正生まれにはおなじみの『省線電車』と呼ばれるようになりました。吉祥寺まで電化されていた中、大正十一年七月十五日高円寺駅、阿佐ヶ谷駅が同時に開業しました。沿線から畑や雑木林が徐々に減り、新興住宅地としての様相を見せ始めてきた昭和八年九月には御茶ノ水・中野間の複々線化に伴い急行電車（現在の快速）が登場しました。高円寺の商店街もこのころ隆盛を極めていました。

戦中には、空襲による火災の延焼を防ぐため沿線は強制疎開の対象となり、駅舎も取り壊されました。戦後間もないころは、利用者の数に比べて車両が極端に不足し、また頻発する労働争議で殺人的ラッシュでした。そのすし詰の車両を尻目に専用車でくつろぐ進駐軍の将兵を見るにつけ、乗客は敗戦国の悲哀を感じたものです。二十四年には『下山事件』『松川事件』とともに『三鷹事件』という悲しい出来事もありました。昭和三十二年十二月には茶色い車両に変わって国電カラー化の先駆けとなるオレンジ色の新型車両が導入されました。東京西郊の宅地化が進み通勤・通学者が急増、慢性化したラッシュを少しでも緩和するために中野・荻窪間が四十一年四月に、荻窪・三鷹間が四十四年四月に複々線化されました。



昭和25年　中央線

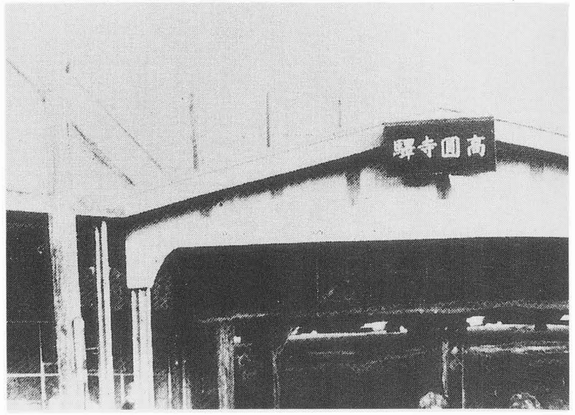
東京の真ん中を東西に貫く中央線も開業以来百年余り、その沿線の風景も様変わりしました。

## 高円寺駅

今からちょうど七十年前の大正十一年七月十五日に御大典記念事業の一つとして開業した高円寺駅がなぜ現在の位置に設置されたのかお考えになったことがありますか！

中央線（当時は甲武鉄道）にはそのころ既に中野と荻窪に駅が






大正11年７月15日　開業当日の高円寺駅

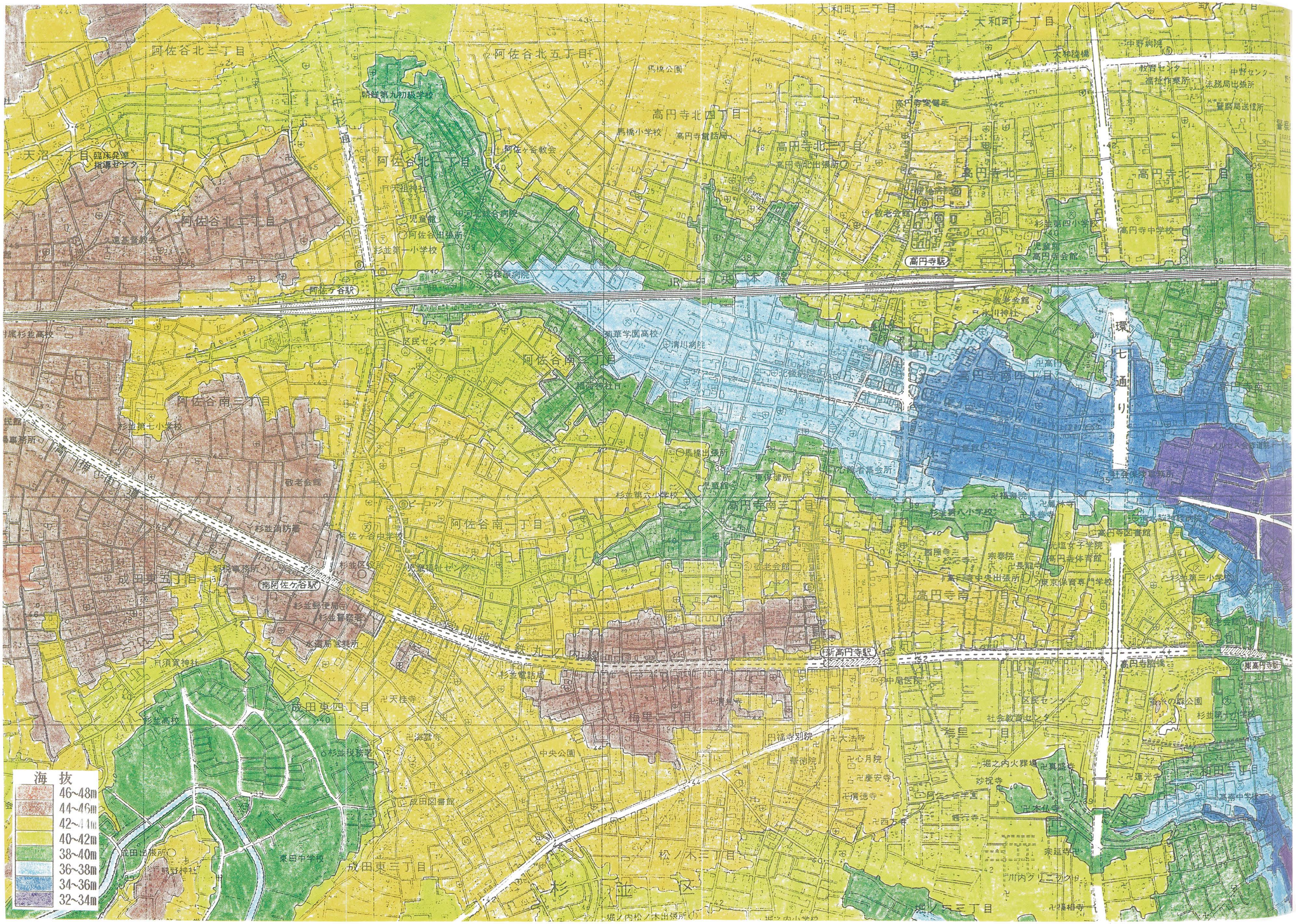



現在の高円寺駅

設置されていましたが、その二駅の間が長すぎるということで、中間に新たに駅を造ろうという計画が鉄道省にありました。その位置というのが高円寺と阿佐ヶ谷のほぼ中間、旧地名でいう馬橋でした。その馬橋村の地主浅賀源太郎さんらは用地確保などに奔走します。当時駅を開設するには住民による用地や資金の一部提供が必須条件だったのです。しかし「駅が出来ても何の利益もなく、また汽車に乗る必要もない、若者が新宿などに行きつまらん遊びを覚えては大変だ」そんな反対意見が多く馬橋駅構想は難航していました。この時に駅開設準備のために整備し開通した道路が、青梅街道と早稲田通りを結ぶ通称杉六通りで、駅の予定地は現在の朝日新聞専売所あたりであったといいます。

高円寺のとなり阿佐ヶ谷でも大正八年ごろ地主の相沢喜兵衛さんや玉野さんらが駅を誘致しようと陳情を行っていましたが、「あんな竹やぶや杉林の所に駅を造るなんて無理な話だ。狐や狸は汽車に乗らないよ。」と一蹴されていました。馬橋駅開設の話が一向に進展しない中その話を聞き付けた相沢さんは馬橋に駅が出来ては阿佐ヶ谷に駅は来ない。これは一大事と地元地主たちと相談し、鉄道省に阿佐ヶ谷に駅を開設するよう再三請願を行いました。しかし阿佐ヶ谷は荻窪に近すぎるという理由で認められませんでした。そこで相沢さんらは高円寺の地主たちに話を持ちかけ、高円寺・阿佐ヶ谷両駅の同時開設ということで、改めて請願を行いました。この請願にあたっては青梅街道沿い（現在の杉並区役所の筋向かい）に住んでいた代議士の古谷久綱さんに協力を依頼、駅の間隔が短かすぎると渋る鉄道省を説得、高円寺・阿佐ヶ谷両駅の開設にこぎつけました。高円寺でも地元の地主たちが用地を提供したのは勿論のことです。そして前記浅賀さんの発案で高円寺駅から青梅街道までの道（パル・ルック商店街通り）が出来ました。阿佐ヶ谷では古谷代議士にお礼を包んで持って行っても受け取らないので、せめて先生のお抱え人力車が通れるように、駅から自宅の玄関まで道を整備することにしました。それが現在の南口パールセンター通りです。

このような経緯で出来た駅を核として高円寺は村から町へとかわっていきました。



海抜
46~48m
44~46m
42~44m
40~42m
38~40m
36~38m
34~36m
32~34m
阿佐谷北三丁目
阿佐谷北五丁目
大和町三丁目
大和町一丁目
高円寺北四丁目
高円寺北三丁目
高円寺北二丁目
高円寺北一丁目
天沼一丁目
阿佐谷北二丁目
阿佐谷北一丁目
阿佐谷南二丁目
阿佐谷南三丁目
阿佐谷南一丁目
高円寺南四丁目
高円寺南三丁目
高円寺南二丁目
高円寺南一丁目
成田東五丁目
成田東四丁目
成田東三丁目
梅里二丁目
梅里一丁目
松ノ木三丁目
和田三丁目
阿佐ヶ谷駅
南阿佐ケ谷駅
高円寺駅
新高円寺駅
JR中央本線
環七通り
杉並区

# 桃園川関連水路図（改修前・後）

この図は「明治期彩並区域図」をベースにし、一部加筆した

[第一師管地方二万分一迅速測図　布田駅・田無町・内藤新宿・板橋駅　上記4枚を合わせたもの]

加筆したところは1，□内の件名、2，着色部分

分水嶺　北ー早稲田通り
南ー青梅街道

池（×）

天沼弁天池（×）桃園川源泉

千川用水

千川用水

千川用水は
関村付近で千川上水
から取水

千川上水
千川上水を保谷市で
分水したもの

千川用水

千川用水

池（×）

池（×）

馬橋稲荷

新堀用水

馬橋弁天池（×）

トンネル

成宗弁天池（現存）

池（×）

新堀用水

新堀用水は
善福寺川から取水

善福寺川

五日市街道

池（×）

福泉寺墓

池（×）

池（×）

長仙寺

氷川神社

高円寺

三角池（×）

桃園川

旧桃園川

田中稲荷

天祖神社

鎌倉街道（通称）

池（×）

青梅街道

真盛寺

新鏡ヶ池（現存）

凡　例　@　線は改修（大正13年）以前

@　線は改修後（高円寺地域）

@×印の池は現存しない。

@⇒印は水流の方向

㊟桃園川には改修前、並行してもう一つの流れがあったが、新流開削で一本化されすべての水路がこれに結ばれた。旧流は埋立てて道路や宅地になった。

# 桃園川探究

「桃園川って知ってるかな」十数人の小学生に聞いてみたことがあります。知っていたのは僅か二人だけ、無理もありません。川が実際に流れていたのは今から二十六、七年前のことですから。当時を知っている人たちさえ今では遠い記憶の一コマになりつつあるのでしょう。しかし今から七十年程前までは私達の高円寺には幾筋もの小川が流れ、その土手には春ともなれば花が咲き誇り、のどかな農村風景が広がっていたのです。

地図を見てください。（地勢図、水路図）高円寺南地域は北と南更に西の台地に囲まれ、云うなれば台地にクサビを打ち込んだような形の谷状の地形です。従って周囲の台地からの湧水が大小の水路となってここに集ってしまうのです。この流れが、桃園川の原型なのです。この原桃園川に幾つかの用水を結んで農業用水とし流域の農耕開発に利用していたのでした。その意味で当時の農民にとっての桃園川は命の水であったのです。しかし大正末期からの宅地開発によって農業用水としての役目を終え、今度は生活排水路として利用されることになります。こうしてかっての清流はドブ川になり下がってしまったのです。桃園川に人格があるならば人間の身勝手に大いに怒るでしょう。その怒りは大雨の時爆発しました。一寸とした大雨でもすぐに氾濫するのです。いったん氾濫すると大変でした。エトアール通り辺りを中心に幅、約百米位のところを音をたてて激流が流れるのでした。時移り今は下水道幹線として生れ変り人々の暮しに役立っています。

桃園川の存在は、何時の時代にもそこに住む人たちの暮しに大きく関わっていて高円寺の歴史を語る上で欠くことは出来ません。本稿ではそんな桃園川に愛着を込めてこだわってみたいと思うのです。

## 桃園川の名の由来

桃園の名は「桃園」という地名から名付けられたものでしょう。「江戸名所図会」に「高円寺境内に桃の木多かりしゆえ、桃園と称すべき旨台命（将軍の命令）あり云々」と記されています。もともとこの流域には桃の木が多く、桃園の他にも桃井、桃野等の地名があります。大正の末年まで農家が川沿いに桃の木を植え、春先には満開の花が川にかぶさるように咲き誇り見事な眺めだったと云います。

## 桃園川は自然流？

高円寺南地区の桃園川は菊華高校辺りから高円寺南五丁目、中野区境のところまで定規で引いたように一直線に流れていました。（現在の緑道）自然の流れならば、微妙な土地の高低に従って蛇行するでしょう。従ってこの川は人工的に作られた用水路だとする見方があります。一方前説で述べたように、この川は北、南、西の台地からの流水が集って出来た自然流だとする意見もあります。いずれも正しいのです。

原桃園川は台地からの自然流によって成り立ち馬橋、高円寺地域では蛇行する二筋の流れになっていましたが（水路図参照）大正十三年の耕地整理でこれを現在の位置に一本化したのです。更に後述する人工の「千川用水」「新堀天保用水」が原桃園川に結ばれたことを考えると、この川は自然流を基礎として、これに人の手を加えたものと云えるでしょう。

## 桃園川の水源

水路図でお分かりのように桃園川は複雑な水系で成り立っていました。従って水源についても幾つかの説があります。阿佐ヶ谷弁天池とするもの、天沼弁天池とするもの、更に天沼の日大二高北の「蓮華寺」付近にあった池とする考え方もあります。蓮華寺池は原桃園川の二筋の流れの北側の方の水源の一つであることは明らかですが、これとても途中で天沼弁天池からの流れと複雑に絡みますから探査グループとしては最も遠くに位置する天沼弁天池を原桃園川の源泉とすることにしました。

前に記したように桃園川には「千川用水」「新堀天保用水」という人工の水路がドッキングしていましたから、これを逆上って水源を求めるなら「千川用水」は「千川上水」の分流であり「千川上水」は「玉川上水」の分水、「玉川上水」は多摩川から取水したものですから、多摩川を水源としてもおかしくはありません。又「新堀天保用水」は善福寺川から取水したものですから、これも水源と云えるでしょう。いずれにしても私達の街を流れていた桃園川の水は多摩川、善福寺川、天沼弁天池、等々多彩なものでありました。

## 千川用水

阿佐ヶ谷、馬橋、高円寺は勿論、当時の武蔵野の諸村は農業で生計を立てていましたが、農業を盛んにするには水が必要です。しかし高円寺地域の場合、自然流による桃園川だけでは充分ではありませんでした。阿佐ヶ谷村にいたっては北部以外には殆ど水筋がない有様、次第に増加する江戸の人たちに食糧を供給するためにも農地を拡大する必要がありました。そのようなことから関係二十ヶ村が「千川上水」から水を引くことを計画、宝永四年（一七〇七）これが認められて作られたのが「千川用水」です。「千川上水」は「玉川上水」を保谷で分水し江戸の北部から寛永寺、小石川御殿、等に給水していたのですがこれを農業用水として分水、毎年四両一分の冥加金を納めることにより正式に「千川用水」と称することになりました。この用水は関町付近から青梅街道沿いに東に進み途中何ヶ所かで分水しながら荻窪へ至り、現在あさひ銀行荻窪支店がある所で二つに分岐しました。一つは北へ折れ天沼へ向い天沼弁天池から発する桃園川に繋がりました。もう一つの方はそのまま東進し、阿佐ヶ谷南三―十付近で北へ曲

ります。現在日大相撲部があるところを通り杉並第七小学校校庭下を経て今阿佐ヶ谷駅になっている辺りを東進、阿佐ヶ谷弁天池の流水と出会って桃園川に結ばれたのです。この用水の完成によって、それまで水に乏しかった村々は大いに潤い農耕地は大幅に拡大したのです。

しかし、馬橋村、高円寺村の場合良いことばかりではありませんでした。何しろ西方からの流れがすべてここに集るのですから大雨などで水量が増した時は一帯が水浸しになりましたし、逆に水不足の時は上流で使い切ってしまってここまで流れてこないのです。流域は水田になっていましたから多少の増水はいいのですが、水不足には困りました。この状態は下流の中野村も同様でした。

これを何とか解決しようとして馬橋村、高円寺村、中野村の名主が協議、計画したのが次に述べる「新堀天保用水」施設です。

## 新堀天保用水

桃園川は千川用水の完成によって水量がずっと増しましたが、上流の阿佐ヶ谷村、天沼村の新田開発が大幅に進み、そのため田植えの時期になると水を使い切ってしまい、馬橋村、高円寺村、中野村では田植えが出来ないという状態もしばしばでした。特に飢饉の嵐が吹きまくった天保年間高円寺周辺では五年の間に四回も旱魃のため凶作に見舞われるという悲劇的状況になりました。

この頃阿佐ヶ谷村との間で激しい水争いがあったといわれています。

このような状態を打開するため馬橋村、高円寺村、中野村の名主が協議、水量の多い善福寺川から引水する計画を立てました。云うなれば自分たち専用の用水を確保しようという訳です。

青梅街道の阿佐ヶ谷寄りに東田町交番がありますが、この少し東寄りに「関の湯」という浴場があります。この辺りに昔湧水池があってこの流水が青梅街道を北に渡った後東に流れ馬橋弁天池を経由して桃園川に注いでいました。青梅街道に石の橋が掛っていたことから、この流水路を「石橋流水路」と呼びます。

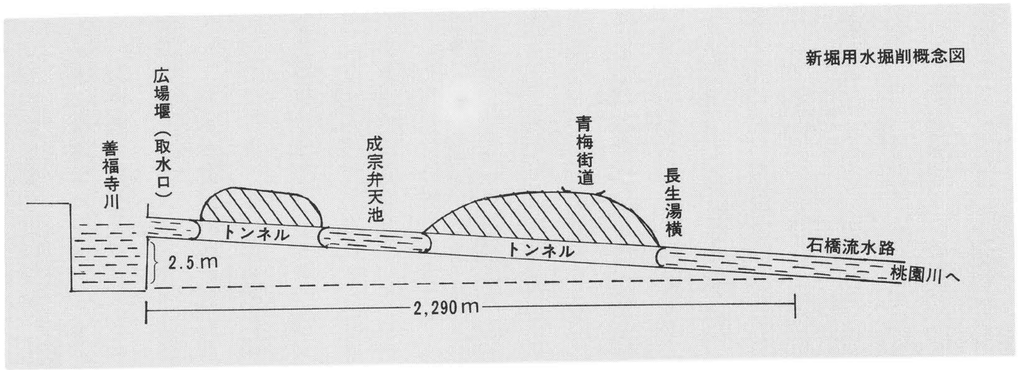
三ヶ村の名主の計画は善福寺川の水を石橋流水路に呼び込もうというものでした。

三ヶ村は代官所や成宗村、田端村とも協議を重ね、幕府から金二七〇両の助成金を得て天保十一年二月に工事に着手しました。

この工事は大変なものでした。善福寺川の取水口（広場堰）と石橋流水路の落差は僅か二・五米距離は二二七〇米、その上途中に青梅街道を尾根とする台地（丘陵）があるのです。水は山に登れませんからここにトンネルを掘ったのです。

そのトンネルは現在都立杉並高校になっている所の北隣に須賀神社がありますが、この辺りから阿佐ヶ谷パールセンターがすずらん通りと分岐する所まで（長生湯脇）でした。トンネル内は高さ一・三米、幅一・六米、所々に掃除用のマンホールを設ける等の工夫をこらし崩れ難い関東ローム層の特性を生かした素掘りでした。






全体のルートは　広場堰（荻窪団地駐車場）—田端神社裏—善福寺川公園北側—成宗弁天池—区役所東側—長生湯脇—石橋流水路でした。

ところが広場堰と成宗弁天池の間の水路は工事中からカワウソがいたるところに巣を作り、そのための漏水が多く又土質が軟弱なため崩壊もあったため、幕府から一五〇両の拝借金を受け広場堰と成宗弁天池を直接結ぶトンネルを作ったのです。

着工から約一年八ヶ月でこの大工事は完成し善福寺川の水が見事に桃園川に流れ込んだのです。江戸時代の土木技術の確かさには驚くばかりです。

［参考—＊成宗弁天池は須賀神社隣の住友銀行独身寮内にあり今も水を湛えていますが、大きさは昔の半分以下とのことです。周囲の樹木は区指定の保護樹林になっているため昔の面影を色濃く残しています。用水建設の際はこの池が調整池として利用されていたようです。＊この用水に関わるトンネルは、今はすっかり埋め戻されてしまいましたが、建設工事等でまれに痕跡が見付かることがあるようです。

＊馬橋弁天池は、鎌倉街道沿いの弁天湯の少し南側、高円寺南三—十二付近にありました。石橋流水路は現在の馬橋児童公園辺りで二筋に分れ北側の方は杉六小南を通り弁天湯西脇から桃園川へ達します。これが新堀天保用水の本流と思われます。この水路は現在遊歩道になっていて区役所への近道です。もう一方の流れは北側水路の約三十米南を並行して流れていました。これが馬橋弁天池に接し、池からの流水を合し東保健所裏を通って桃園川に注いでいました。］

## 南、北台地からの湧水路

桃園川を中心とする高円寺南地域は、北は早稲田通りを尾根とする北台地、南は青梅街道を尾根とする南台地にはさまれています。従って尾根と尾根の間の湧水は全て桃園川に注いでいました。これらの湧水路の規模はさまざまでしたが、その数は多くそれが「小沢村」の名の由来と云われています。小さい沢が多い村ということでしょうか。これらの水路の内幾つかは現在もその痕跡を残していて昔を偲ぶことが出来ます。探査グループはそのひとつひとつを歩き確認して水路図に書き入れました。

1、北一・谷中ルート

高円寺北一―十一付近から「たかはら公園」西脇を南下、谷中通りの少し西寄りを通って桃園川に注ぎます。

2、高円寺・馬橋境界ルート

旧家小永井本家そば北三―三十六付近に小さい湧水池がありました。ほぼ直線的に南下し第三宮下湯西側付近から桃園川に達します。この水路が高円寺村と馬橋村の境界をなしていました。

3、北弁天池ルート

北三―八付近に昔、弁天池がありました。

ここからの流れは初め東へ進んでから南下し大正木工所辺りから桃園川へ注いでいました。

4、三角池ルート

駅南口から線路沿いに環七方向へ進むと窪地状になったところがあります。ここに通称三角池がありました。この池は明治時代鉄道工事関連で掘って後、湧水があって出来たものです。ここのすぐ北側「平安祭典」の裏に昭和五十年代後半まで池がありましたが、この池と三角池は地下でつながっていたようです。三角池の流水路は「つかさ湯」横から環七を東に越え消防署裏を通って桃園川に達していました。

5、馬橋稲荷ルート

阿佐ヶ谷東公園付近から北へ進み馬橋稲荷西脇を通って桃園川に注ぐ水路です。馬橋稲荷横に昔は池があって、ここからの流水もこの水路に合していました。

6、三平ルート

ルック通りの三平ストア付近に昭和二十年頃まで池があったと云います。流水の一部は青梅街道方向にも流れたようですが、大部分は北上していました。確たる水路は分かりませんが、地形から考えて馬橋弁天池方向へ流れていたと思われます。

7、杉三台地ルート

杉並第三小学校はかなり高い台地上にありますが、崖状の所から幾筋かの流がありました。その一つが高円寺天祖神社

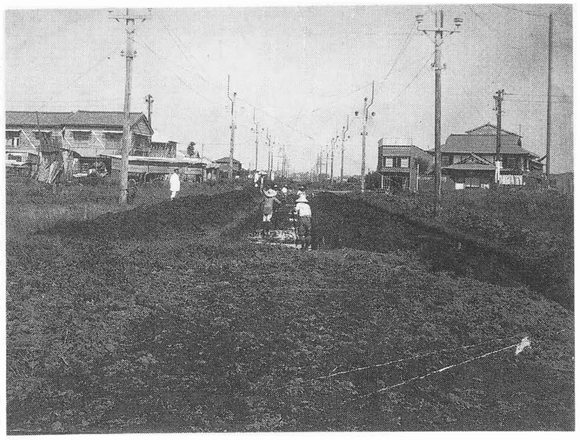


馬橋村の大蛇（おろち）の池

北三丁目　大谷四郎さんにお聞きした話

高円寺北三丁目にあった北弁天池には、おろちが住んでいると噂がありました。事実相当大きな池だったようです。周りは鬱蒼とした林でまたその周りには麦畑が広がっていました。人もあまり近づかなかったそうです。嵐のあくる日、大谷さんのお父さんが様子を見に行くと、一尺ぐらいの幅で一直線に麦の穂がなぎ倒されていました。これはおろちが通った跡に違いないと思ったそうです。明治の末頃のことでした。





桃園川新流開削工事（大正13年）
右側の建物は宝橋高円寺浴場（宝橋はパルとルックの間の橋。佐藤人止氏提供）

裏にありこの水路をたどると「かえる公園」に至り、この辺りから桃園川に注いでいたのでしょう。

この他、杉八小付近にも流れがあったと云いますが水路の確認は出来ませんでした。

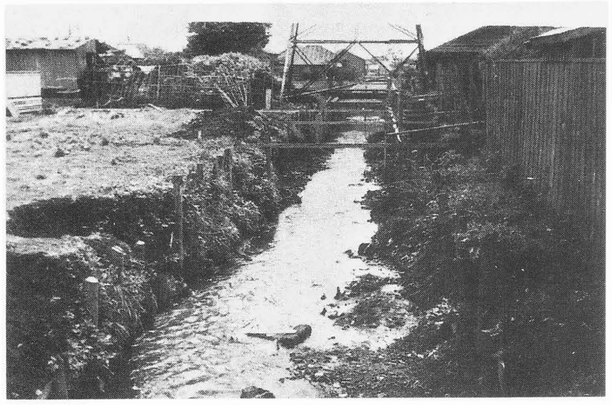
かつて水路であったところでも、現在は道路の一部になっていたり、払い下げで民有地になり建物が建っている所もあるようです。

**桃園川改修**

大正中期までこの地域は、完全な農耕地でした。その中で桃園川が果たした役割は大変に大きなものでありました。しかし大正も後期になると宅地化の波が押し寄せてきます。大正十年頃地元の有力な農家は高円寺地区耕地整理組合を設立、耕地を整理し宅地を供給する事業に取り掛りました。

その事業の一環として、蛇行して流れる二筋の桃園川を直線的に一本化することにしたのです。

阿佐ヶ谷から中野に向って「東京電灯」の高圧線の木柱が四間（七・二米）離れた位置に二列にまっすぐ立ち並んでいましたので、柱列の間に幅員四尺（一・二米）深さ六尺（一・八米）の水路を開削し、従来の水路をすべて新水路に結びました。不要になった旧水路は埋め立てて道路や宅地にしたのです。ところが通水してみると水がはけきれず結局、幅員を十二尺（三・六米）に拡げました。高円寺地区耕地整理組合は、その後内部に問題を抱え完全な形での事業完成に至らず、昭和十三年に西荻



昭和25年頃の桃園川

の内田秀五郎氏に協力を依頼、同氏の尽力によって換地精算業務を終え昭和十五年に事業を終了したのでした。尚、内田秀五郎氏はこれ以前に西荻・井荻地区の耕地整理事業に手腕を発揮、高い評価を得ていた人物です。地域の功労者として善福寺川公園に銅像が建つています。

桃園川は、その後何回か改修工事が行われました。流域が宅地化し以前遊水池の役割を果たしていた水田が無くなったため西方からの水量が、大雨が降れば高円寺一帯は水びたしになるのです。川幅を拡げたり、川底を堀下げたりいろいろな試みがなされましたが、思うような効果が得られず、この悩みは昭和四十二年下水道工事完了まで続いたのでした。

**水路は今――**

桃園川に関わる水路について、ながながと書いてきましたが、これらの水路は今どうなっているのでしょうか。探査グループの知る限り水面が見えるものはありません。あるものは遊歩道に、公園に、又あるものは人も歩けぬような細い路地に、或は道路の一部になっていたりです。それ等の中で「成宗弁天池」真盛寺の「新鏡ヶ池」が昔の面影を残して健在なのは嬉しいことです。

私達の桃園川は今下水道幹線として生活に欠かせぬ存在になっています。そして地表は「緑道」として憩いの場になっています。かって桃園川は農民の命の水でした。

そして今桃園川は人々の生活を支え、潤いを与えてくれます。

感謝と哀惜の心を込めて本稿を終ります。

## 幻の水源をもとめて

桃園川とは直接関係ありませんが、昔青梅街道沿いに水路がありました。幅一米余の用水路状のものだったそうです。これは複数の人の証言ですから間違いありません。青梅街道が拡幅される前のことですから、その位置は現在のセンターライン辺りと思われます。その水路は東に向って流れ現在の高南通りの筋向い辺りで南へ分水し、本流は中野方面に流れます。分水は堀の内葬祭場の横を通り「真盛寺」の湧水池の水を併せ和田方面に流れていました。

一方、五日市街道沿いには東から西への水路があったそうです。街道沿いのお米屋さんの話では昔、この流れを利用して水車を回し精米をしていたと云います。（無論、電気が無かった頃のことです）

又、五日市街道入口を入った突き当たりの「大法寺」横の細道は昔水路だったと推定できます。この細道を南へたどると堀の内小学校へ至りますがこの辺りから台地になるため、小学校の手前で水路は東に折れ更に南へカーブし済美山脇の低地を通って善福寺川へ注いでいました。この水路は現在遊歩道になっているので



容易に確認できます。

以上三つの水路（青梅街道沿い、五日市街道沿い、大法寺脇）を総合して考えると青梅街道直近のどこかに水源があったはずです。この辺りの地形は杉並消防署馬橋出張所付近がもっとも高く、ここからは東西共に下りになりますから、水源があるとすれば消防署と五日市街道入口の間でなければなりません。

この場所を探すために探査グループは何回も自転車でこの付近を巡回し、お年寄りに話を聞くなどしましたが、遂にその場所を特定することは出来ませんでした。この辺りは青梅街道の拡幅以来急激に変貌し住民の移動も多く、昔を知る人が少ないことが残念です。

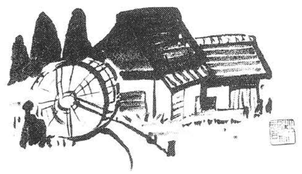
或は私達の推論に誤りがあるのかもしれません。どなたか真実を知っている方がおられましたら是非お教えいただきたいのですが――

水路の見つけ方？

水路を探してさまよい歩いている内に、気がついたことがあります。水路のそばには「プール」「釣り堀」「風呂屋」等大量に水を使う施設があるということです。考えてみれば当り前のことで、下水道が完備された近頃出来たものはともかく、それ以前からのものは大きな排水路がなければ営業できなかったはずだからです。特に軒数の多い風呂屋の場合、その近くを探せば大抵水路が見付かります。以下はそのリストです。

| | |
|---|---|
| 蓮華寺ルート | 富士見湯、玉乃湯 |
| 千川用水・桃園川ルート | 蔦の湯、藤の湯 |
| 〃　阿佐ヶ谷ルート | 開楽湯 |
| 青梅街道沿い | 梅の湯（成田東）、関の湯（梅里2）、千代の湯（梅里2）、旭　湯（和田3）松の湯（中野区本町）観音湯（同） |
| 大法寺脇　ルート | 子宝湯 |
| 新堀用水　ルート | 関の湯、長生湯、弁天湯 |
| 三角池　ルート | つかさ湯、文化湯 |
| 谷　中　ルート | 谷中湯 |
| 高円寺馬橋境界ルート | なみの湯、第三宮下湯 |
| 桃園川（馬橋以東） | 高円寺湯、千代の湯（廃業）、香藤湯（南5）、高砂湯（中野区中央） |

＊南4丁目の宮下湯については、この付近が区画整理によって土地の状態が変っているため確認できませんでした。古くから住んでいる方にお尋ねしましたが、はっきりしませんでしたのでリストにはあげないことにしました。



# Graph桃園川

## 1．千川用水関係




千川用水分岐点
関町付近から青梅街道を東進してきた千川用水は荻窪北口現あさひ銀行のところで直進と左折に分岐，左折した方は天沼で桃園川と合体した。分岐個所は今自転車置き場になっている



青梅街道の千川用水跡
西清掃事務所向かい（北側）の歩道上で発見した用水跡，千川用水は尚東進し阿佐ヶ谷南3－10付近で左折した



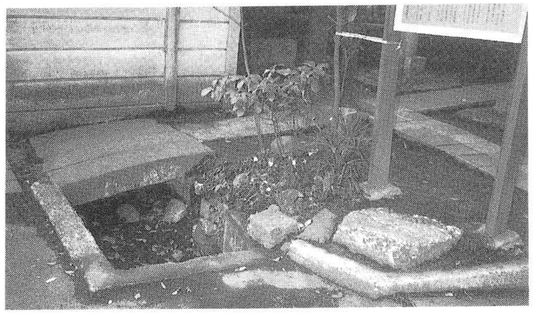
阿佐ヶ谷南の千川用水
青梅街道を左折した用水路は杉七小学校校庭下を通り住宅街を抜け線路北沿いにけやき公園付近に至る



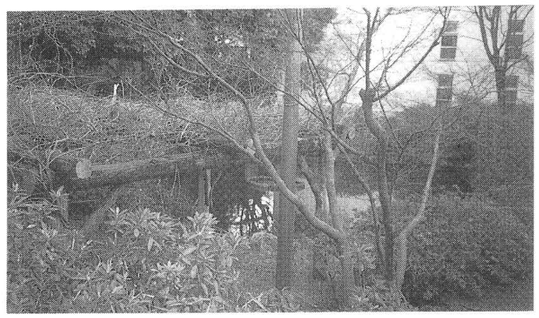
天沼付近の桃園川跡
千川用水と合体した桃園川は静かな住宅街を流れていた



## 2．新堀用水関係



新堀用水遺溝
成宗須賀神社横に新堀用水跡が遺されている。この用水は，ここから少し東へ進みトンネルを抜け馬橋から桃園川へ注いだ。尚，この遺構の裏に成宗弁天池が今も健在である（住友銀行寮内）



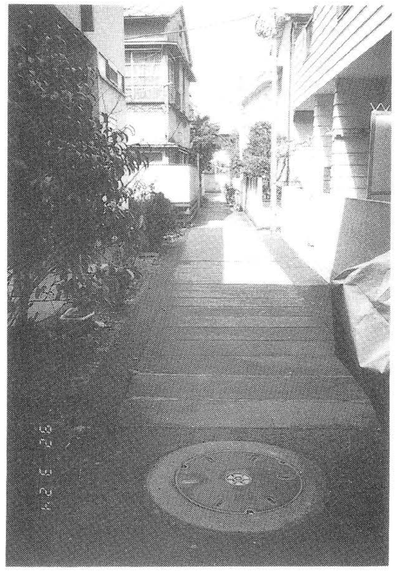
成宗弁天池（住友銀行寮内）

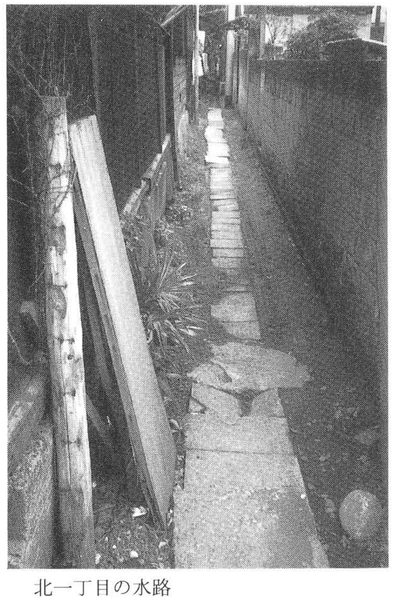



新堀天保用水路
馬橋出張所裏から馬橋弁天湯をのぞむ

## 3．南北台地関係

高円寺北弁天池からの水路

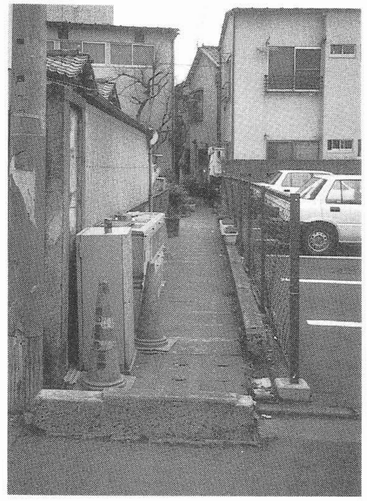




北一丁目の水路
杉並，中野の区境近く北から南への流れがあった。たかはら公園の西際を通り谷中通り沿いに進み桃園川に達した

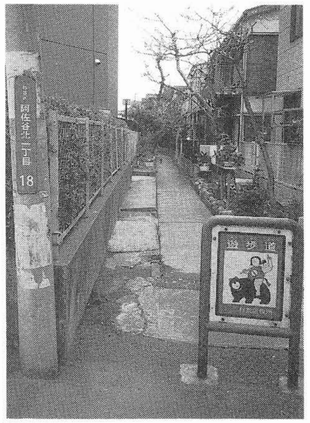


三角池流水路
高円寺南四丁目線路沿いに残る遺構である。この水路は環七通りを斜めに横断し消防署裏を通り桃園川へ注いだ



三角池流水路　南五丁目

## 4．桃園川水源付近



桃園川　天沼弁天池からの水路
阿佐ヶ谷北一丁目

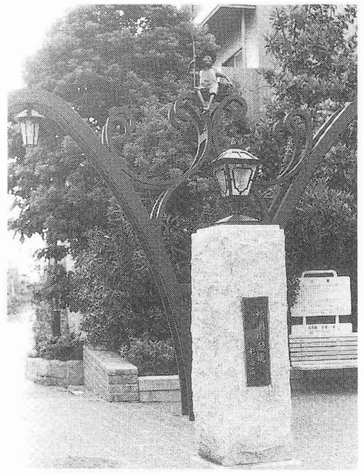


天沼弁天池の祠
この祠の裏側に弁天池があった。これが桃園川の源泉と言われている。残念ながら昭和50年頃枯渇し埋め立てられてしまった

## 5．現桃園川



「河童もいます」桃園川
奇麗に整備された今の桃園川，高円寺南２－52辺りでは可愛いカッパ君が，あなたをお出迎え



桃園川緑道



# 道を探る

### 青梅街道

杉並区のほぼ中央を東西に走る青梅街道は、新宿で甲州街道と分岐して青梅に至る主要地方道である。この道がいつ開かれたのか正確には分からないが、文献によれば慶長（一六〇〇年頃）の頃であろうと云われている。というのは慶長十一年江戸城の大改修の際、青梅市の上成木、北小曽木の石灰を搬送する道として作られたという話が伝わっているからである。古地図によれば、この道を成木街道と記したものがあり、その辺の事情を物語っていると思われる。

しかし、何もない荒野と森林のなかに全く新しく道を作ったとは考えにくい。多分それ以前から連続的か断続的かは分からないが、無名の古道があって、それを荷車が往来できるように拡張整備し青梅街道と呼んだと考えたほうが自然である。

又この道は秩父街道とも呼ばれていた。これは田無村から北へ向い所沢を経て秩父に至ることができ、江戸市中から秩父へ行く人が多く利用したからである。更にこの道は甲州裏道とも云われたが、これは甲州へ行く場合五街道のひとつである甲州街道より二里程近いため主として庶民が利用したからである。

江戸時代、杉並区内の青梅街道の道幅はおよそ五間（九米）乃至五・五間（九・九米）と記録されていてこれは甲州街道とほぼ同じであった。因に現在の青梅街道を西進し天沼陸橋（ＪＲ線をまたぐ）のすぐ手前に左方へ分岐する道があるが、これが青梅街道の旧道である。これを少し進むと車両進入禁止の標識があるが、かつてここに踏切があってこれを北へ越え線路沿いを進み荻窪駅北口広場から交番の裏を通り新道に合する。この旧道の道幅が旧来の青梅街道に近いものであろう。

又、江戸時代初期成宗村・田端村の領主であった岡部氏が阿佐ヶ谷村との境界である青梅街道沿いに杉並木をつくったことが、杉並という地名の起こりと伝えられている。

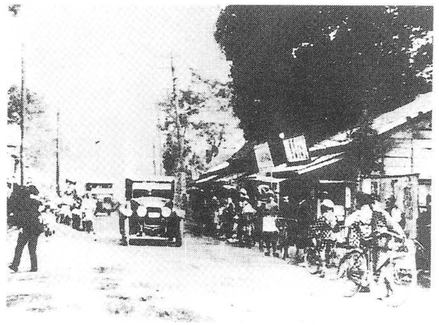
青梅街道は、明治以後東京の膨張に従って主要道としての性格を強め、明治二年に新宿・田無間に郵便馬車が営業を始めた。（明治二十五年頃廃止）

更に大正十年新宿・荻窪間に通称西武電車という路面電車が青梅街道上に敷設された。当時の道幅は現在の半分にも満たない狭いものだったから自動車や荷車の妨げにならぬよう一方に寄った位置を民家の軒先をかすめるようにノロノロと走っていた。

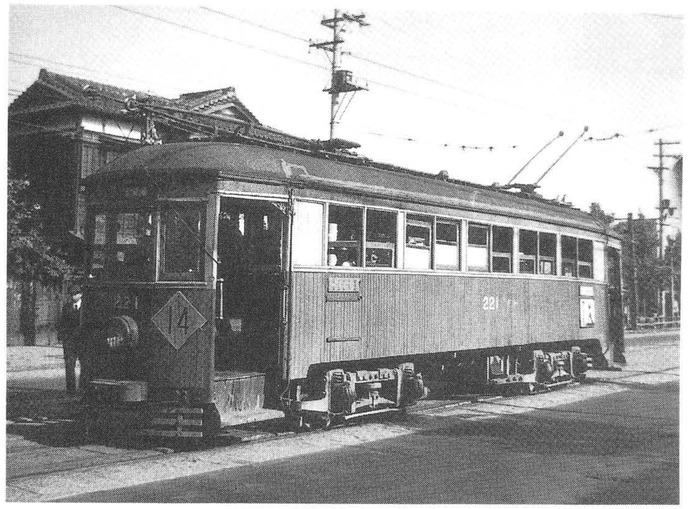
駄足ながら、この西武電車は現在の西武鉄道とは関係ない。何故なら西武グループの創始者堤康二郎氏は、この頃三十才位軽井沢や箱根等リゾート開発に力を注いでいた時期で鉄道経営に進出するのはもっと後だからである。（武蔵野鉄道―現西武池袋線―買収が昭和十三年、西武鉄道―現西武新宿線―買収が昭和十七

年）

青梅街道は昭和十五年から十七年にかけて拡幅され、それに伴って西武電車も中央部分を複線で走るようになるが、昭和十七年二月東京市に移管され市電となった。翌十八年都制施行により都電杉並線となり庶民の足として親しまれたが昭和三十八年廃止された。昭和三十七年には地下鉄丸の内線が開通し青梅街道は、地上の自動車交通と共に、東京西部の幹線道路として重要な役割を果たすことになるのである。



大正12年
青梅街道荻窪駅北口



昭和25年　青梅街道を走る都電






青梅街道　右・新道
左・旧道

青梅街道　昭和10年頃（石川角蔵氏提供）



## 五日市街道

五日市街道は、青梅街道南側梅里一丁目と二丁目の境界地点で青梅街道から分岐し、成宗、田端松庵を経て吉祥寺へ入り小金井、砂川を通って五日市に達する道である。

この街道が何時どんな目的で開創されたのかは不明だが、寛文（一六六〇年代）の頃の古文書や絵図にこの道が明確に記されていることから、相当古い時代から存在していたと思われる。

この道は古くは青梅街道脇道と呼ばれ、又砂川道とも云われていた。五日市街道と呼ばれるようになったのは、寛政（一七九〇年代）以後のことらしい。

現在この道を行くと所により道幅がかなり違うことに気付く。梅里から善福寺川辺りまでは近年改修されて広くなっているが、以前は幅員六米位の極く狭い道であった。この狭い道は柳窪の少し手前のカーブの所まで続く。特に関東バスの折り返し所付近の景観は昔の街道の面影を色濃く残しているが、この道幅が旧来のものであろう。カーブを過ぎた所から道幅は急に広くなるがこの道幅の違いは昔からのものである。古文書によれば、馬橋村、成宗村では幅三間（五・四米）であり、大宮前、中高井戸村、松庵村では幅八間（十四・四米）と記されている。この三つの村では開村の際、在来の狭い道を拡幅したと考えられているが、どんな事情があったのか、壮大な八間道路に潜む謎である。



昔の景観を遺す五日市街道（成田西二丁目）

## 私説　鎌倉街道

青梅街道を中野の方から西進してくると、左側に蚕糸の森公園がある。その向い側交番のすぐ手前に斜めに北西方向に入る小道がある。これを進むと環七通りの高円寺陸橋に突き当る。ここで西方を眺めれば、この道に続く一方通行の道があることが分かる。右に四寺を見ながらこの道を進むと高南通りを越え、ルック商店街を横切り杉並第六小学校横を経て馬橋稲荷神社前を過ぎ阿佐ヶ谷北へ達する。

この道を高円寺の人たちは「寺町通り」又は「鎌倉街道」と呼ぶ。特に古くからこの辺りに住む人は、おしなべて「鎌倉街道」と云う。「何故鎌倉街道か？」と問えば「この道は鎌倉へ通じているからだ。昔からそう云われてる」と答えが返ってくる。半信半疑ながら云い伝えだから多分そうなんだろうという次第。筆者は伝承を重んじたい。火の無いところに煙は立たずの例えの通り、その中には必ず真実に近い部分があると信じたい。

今、筆者の前に二冊の本がある。一つは杉並区教育委員会発行の「杉並の地名」もう一冊は集英社発行の「日本の歴史第七巻」

である。この二冊の本を手掛かりに、この道が何故鎌倉街道なのか探ってみようと思う。的を射たものになるか、はたまた虚構で終るのか甚だ心許ないが、探るという作業はどこかミステリアスで楽しい。

先ず「杉並の地名」の巻末。そこに昔の杉並各村の絵図が載っている。その中から高円寺村、馬橋村を見る。いずれも文化年間（一八〇〇年代）に書かれたもののようであるが、いづれの絵図にもこの道はしっかりと記されている。特に馬橋村のものはかなり太い線で表されていて、東西に伸びる道としては大場通り、青梅街道、五日市街道の他にはこの道だけである。

線の太さは五日市街道と同じであって、そのことは我が鎌倉道も同じ程度の道幅、即ち三間（五・四米）位だったと考えられる。当時としては広いこの道は農道等近辺の住民の生活道路とは思えない。多数の人員や荷馬車を往来させるために作ったものと考えてよいだろう。


鎌倉街道

次の問題は、当時この道をどうたどれば鎌倉へ行きつくのかである。ここで集英社版「日本の歴史」の登場である。この本では鎌倉街道についてかなり詳しく説明されている。そもそも鎌倉街道とは、源頼朝が鎌倉に幕府を開き後、北条氏に至るいわゆる鎌倉時代に、その支配下にあった東国各地の武士集団が鎌倉に参じるために作られたものである。

「いざ鎌倉」という時は多数の軍勢がひしめいたという。又この道は鎌倉の文化を各地に伝える情報伝達路の性格も持つ等この時代の大動脈だったという。では鎌倉街道はどのような道筋になっていたのかというと、おおまかに云って三つのルートで成り立っていた。高崎方面から今市、入間川、府中を経て鎌倉へ向うルート、千葉、土浦方面から松戸、品川を経るルート、そして東北・宇都宮方面から鳩ヶ谷、王子、中野、渋谷、丸子を経由するルートである。ここで注目すべきは王子―中野―渋谷ルートである。これは現在の山手通りと考えられるが、我が鎌倉街道はこのルートの中野へ出るための道だったのではあるまいか。最初に記した通りこの道は阿佐ヶ谷北付近に発し蚕糸の森公園付近で青梅街道に合する。勿論この時代には青梅街道は存在しないが、その前身たる古道があったことは推測される。これを東進し今の中野坂上辺りで本街道に入る。つまり鎌倉街道の枝道だったと考えてよいと思う。

それでは、この道を誰が作り利用したのかである。前述したようにこの道は多数の人員と荷馬車の通行を目的としていたはずだから、当然この付近に豪族（武士集団）の居館がなければならない。

ここで再び「杉並の地名」の登場である。



「阿佐ヶ谷」の地名の起こりについて同書は次のように記述している。『阿佐ヶ谷の名は古来からの村名であるが、その起こりについてはハッキリしない―中略―約八〇〇年前の源頼朝の挙兵に参加した江戸一族から後に阿佐ヶ谷氏を名乗る者が出ている―中略―那智の米良文書（応承二七年〈一四二〇年〉作成の古文書のこと）に「あさかやとの」「中野殿」とその名が見えている。武士の苗字は住所の地名からとったものが多く阿佐ヶ谷氏は地名の阿佐ヶ谷を姓としたものと思われる。―後略』ここまで書けばもうお判り。

阿佐ヶ谷に居住した阿佐ヶ谷氏が鎌倉への往来のためにこの道を作り一族郎党引き連れて中野から本街道に入った、故にこの道を「鎌倉街道」と呼ぶ。

以上は状況証拠による推論であって、確たる証拠はない。しかし鎧兜の騎馬武者の集団が、この道をさっそうと馳せる様を想像するだけでも心躍るではないか。

### 早稲田通り
――旧大場通り――

青梅街道の善福寺交差点から今川、清水、阿佐ヶ谷北を通り小滝橋へ至り更に高田馬場を経て神楽坂で大久保通りに合する道が早稲田通りである。

杉森中学校辺りから環七の少し西寄りの所までこの道が杉並、中野の区境をなしている。

高円寺では、かってこの区境の部分を「大場通り」（だいばどうり）と呼んでいた。早稲田通りという名称は第二次大戦後、この道が整備されてからつけられたもので、もともとこの道には全線を通しての統一した名称はなかったのである。

この通りの古い道筋は中杉通りの少し西寄り下井草一丁目で北へカーブし下井草を経て石神井へ至り更に進んで保谷へ達している。現在は下井草一丁目のところに直進路が出来ていて、これが善福寺へ達し、この道筋が早稲田通りとなっているが、これはいわば新道であって下井草へ向う道が本来の姿である。現在このルートに「旧早稲田通り」の名称が与えられていることがその証明である。


右・早稲田通り，左・日大二高通り
分岐点　いずれも旧大場通り

さて、この道はいつ頃からあったのだろうか。

文化年間に作られたと思われる高円寺、馬橋、阿佐ヶ谷、天沼諸村の絵図に、この道が明確に記されていること、それより古い記録に「大場」の文字が見えること（後述）からみて、少なくともこれ等諸村が成立した江戸時代初期より遥か以前に既に存在してい

たと考えてよいだろう。興味深いのは阿佐ヶ谷村絵図でこの道の東寄りのところに「大場通り」と記され、西寄りのところには「井草通り」と書かれていることである。これから推定して高円寺村、馬橋村ではこの道を「大場通り」と呼び、天沼村、井草村では「井草通り」と云い、阿佐ヶ谷村では恐らく両方の名を適宜使い分けていたのではあるまいか。昔、主要道以外の一般道には特定の名称はなくそれぞれの地域で分かりやすい呼び名をつけていたから、この道も「大場道」「井草道」「石神井道」「所沢道」等と呼ばれていたのであろう。ここで一つの疑問に突き当る、井草や石神井は地名だから「大場」も多分地名であろうが、そのような地名は現在どこにも見当たらない。果たして「大場」という地名があったのか？あったとすればそれは何処なのか？壁に突き当った筆者は中野区立歴史民俗資料館へ教えを乞うたところ、同館の主任専門研究員角田茂氏から「大場の存在について」懇切なご教示をいただいた。以下、同氏の説明を簡略化して記す。

永禄二年（一五五九）作成の北条氏家臣団の役高を記録した文書に「壱貫文　中野内大場」とあり、これが「大場」の初見である。又文化・文政の頃編纂された「新編武蔵風土記稿」には「上沼袋村枝郷大場村」とあり、更に大和町八幡神社に安置してある二基の青面金剛（庚申塔）に、それぞれ元禄六年武州多麻郡大場村・宝暦十三年武州多摩郡上沼袋村大場との刻字があること。馬橋村古絵図の現在の早稲田通りの所に「字大場境」とあること等を考察して「大場」は延宝二年（一六七四）に検地が行われる迄は独立した村として扱われていたが検地を境に上沼袋村の枝郷とされ、更に宝暦期（一七五〇代）に至って完全に上沼袋村内に包含され「大場」という地名は消滅したと考えられる。このような大場の変遷は領主の関係からと思われるが、正式の地名は消えても「大場」という古い呼び名は連綿として受継がれ「大場通り」として生き続けて来たのである。

次に「大場村」の位置であるが、「新編武蔵風土記稿」に詳しく記されてあり、これによればおおむね現在の中野区大和町を中心とした一帯であることは確実である。尚この道はどんな目的で開かれたのか古い時代のことは定かでない。しかしこの道筋には川や池が多く古くから農耕が盛んであったと考えられるから、江戸時代以降は農産物を江戸市中へ運ぶいわば産業道路として賑ったのではあるまいか。

中野以東の道筋は多少の変化はあったものの昔も現在とほぼ同じであったそうである。

――日大二高通り――

早稲田通り沿い杉森中学校の少し西、南側に地蔵堂がありここから斜めに分岐する小路がある。これを道なりに進むと中杉通りを越えて、日大二高、荻窪税務署前を通り四面道に至る。今は日大二高通りと呼ばれているこの道は、古絵図にも記されている古道であるが、以前はこの道も大場通りと呼ばれていた。多分これは「大場村へ通じる道」ということと思われる。



四面道は現在は環八と青梅街道の交差点とされているが、本来は大場通りの方で、昔この角に四面塔という常夜燈があり「火防せの神」として信仰されていたという。昭和初年の大場通りについて井伏鱒二氏は「荻窪風土記」の中でこんなふうに描写している。「四面道から阿佐ヶ谷のラッパの森の方に通ずる（中略）大場通りは蛇がうねるように曲りくねって、夏の夜は道端のクヌギ並木にフクロウが止まっていることがあった。」

ラッパの森＝お伊勢の森（現杉森中学付近）

**『環七』問答**

「こんちは、先生いるかね」

「なんだ寅さんか、今日はなんの用だね」

「チョイト聞きたいことがあってね。先生は大変な物知りだって、皆が云ってるからチョックラ教えてもらおうと思ってね」

「何を知りたいんだね。まぁ、こっちへあがんなよ」

「いえね、教えてもらえてえのは環七のことなんだ。こないだ八のヤツに聞いたら環七通りてのは昭和三十九年にできたんだってね」

「そうだよ、昭和三十九年に東京オリンピックがあったことは寅さんも知ってるだろう。環七通りは、それに間に合うように急いで工事をして出来たもんなんだ」

「だけどおかしいじゃねえか、オリンピックが決ったのは何時かしらねえが、それから用地を買収したりしてたら、そんなに早く出来るわけがねえ北口なんか十年以上も前から再開発だって云ってるのに今だに手つかずじゃねえの」

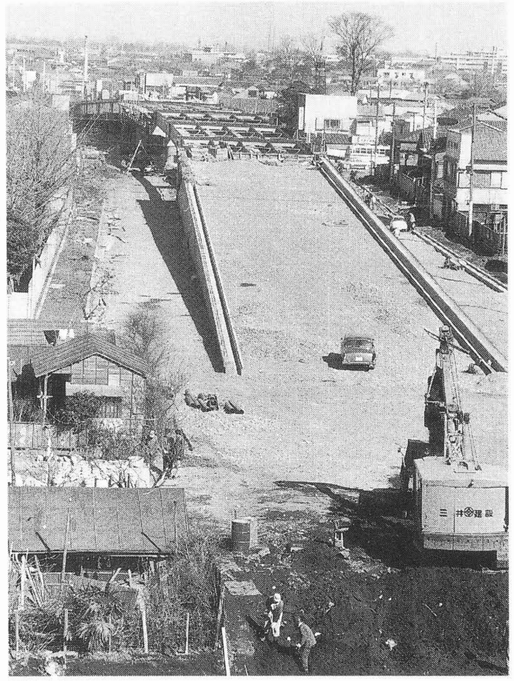
「さすが寅さん、いいとこ突いてくるね。そう思うのも無理はない。だけどね寅さん、実は環七通りを作ることは何と昭和二年に決ってたんだよ。環七だけじゃないよ、環六も環八も昭和二年に都市計画で決定してたんだよ」

「へえー、そんな昔に決めて、出来たのが三十九年、するってえと三十七年も掛ったてえ訳だ。こりゃ恐れいった、どうしてそんなことになったんで」

「話は長くなるけどね、大正十二年に関東大震災があったことは知ってるね。その時東京の市街地は大半が火事で焼けちまったんだ、でも所々焼け残ったところがあってね。そういう所は川や広い空地や森があってそれが延焼を防いだんだね。そういう経験から震災復興では、道路幅を拡大したり公園なんかの緑地帯を作ったりしたんだよ。お金の問題や地権者との関係もあって計画通りいった訳じゃないけど、ある程度のことはできたんだ。何しろそれまでの市内の道路てのは広いところでも幅十米位だったのが、二十五米道路なんかができたんだ」

「震災のことは分かったよ、だけどそれと環七とどう関係があるんだね」

「まあ黙って聞きなさい、震災の後市内から郊外へ移住する人が増えて、それに地方からやってくる人も多くなって東京の西部の人口が増えてきたんだよ。そこで住宅が密集しない内に先手を



環七通り立体交差工事中（昭和38年）



現在の環七通り



完成直後の環七通り

とって広い道路網や緑地を作っておこうてことになったんだ。それで決ったのが昭和二年の都市計画って訳さ」

「ふーん、どんな計画だったんだろ」

「市外環状線が三本、これが環六・環七・環八だ放射線が十六本、補助線が一〇七本これが完成すれば住宅地域のブロック化が出来て災害に強い街になるはずだった」

「そんないい計画だったら、さっさとやりゃよかったになあ」

「やっぱりお金の問題だと思うよ。これをやるには国が費用の大部分を負担しなけりゃならんだろうが先の読めない政治家は緊急性がないことには賛成しないんだよ。大蔵省は出すつもりだったらしいがね。それでも東京府は出来るだけはやったようだよ、既設道路の拡幅とか環六なんかも少しはやったんじゃないかな。青梅街道（放射六号）なんかは昭和十五年から十七年頃広がったしね」

「環七はどうなってたんだね」

「殆ど手つかずだったんだ、ところがヒョンなことから、それが出来そうな見込が出てきたんだよ」

「何だねヒョンなことって」

「防空法だよ。寅さんも知ってる通り日本は昭和五年頃から戦争の時代に入ったじゃないの、それで何時東京も空襲を受けるか分からない。それに備えて空襲に強い街を作らなけりゃならんということで防空法という法律が昭和十二年に公布されたんだ。これに基いて防空を目的とした疎開空地帯を作ることになった訳。



強制疎開といってね建物を強制的に収用して壊してしまう、それで空地帯を作ったんだがこの考え方は都市計画と同じなんだな。実際防空都市計画に携わった人達は従来の都市計画のメンバーだったそうだよ。だから昭和二年に作った計画を下敷きにしてこれをやったんだ。戦争で東京は大変な被害を蒙ったけど都市計画の観点からみれば、防空法のお陰で前進したことになるんだ」

「へーえ、それじゃ戦争が終ったらすぐ道路作りをやればよかったんだ」

「考えてもみなよ、戦争直後は食うことに精一杯、道路どころじゃなかったんだよ。それとねこの空地が防空空地と云ってたのがまずかった。GHQがね戦争目的の空地をそのまま残すのは問題だと云ったんだ、元の持主に返すべきだとね。それで戻してしまった所もあったようだ。高円寺はずーっと空地のままになってたがね。それやこれやで道路作りが遅れたって訳よ」

「そこへオリンピックってことか」

「そうだよ、空地のまま残してあった所はすぐ工事にとりかかる、民間に戻してしまった所は再び買戻して大慌てで環七が作られたってことよ」

「だけど分かんねえのはさ、昭和二年の計画をそのままやってことよ、世の中の状態がまるで変ってるのに昔決めたことをそのままやる手はないね」

「その通りだ、だから戦災復興計画ではね何と主要道路の道幅は四〇米から一〇〇米なんてことが決められたんだよ。環七通りは道路幅五〇米それに沿って幅二〇〇米位の部厚いグリーンベルトを配置しようとしたんだがね、結局計画倒れで昭和二年に決めた通りのものになっちまったんだ」

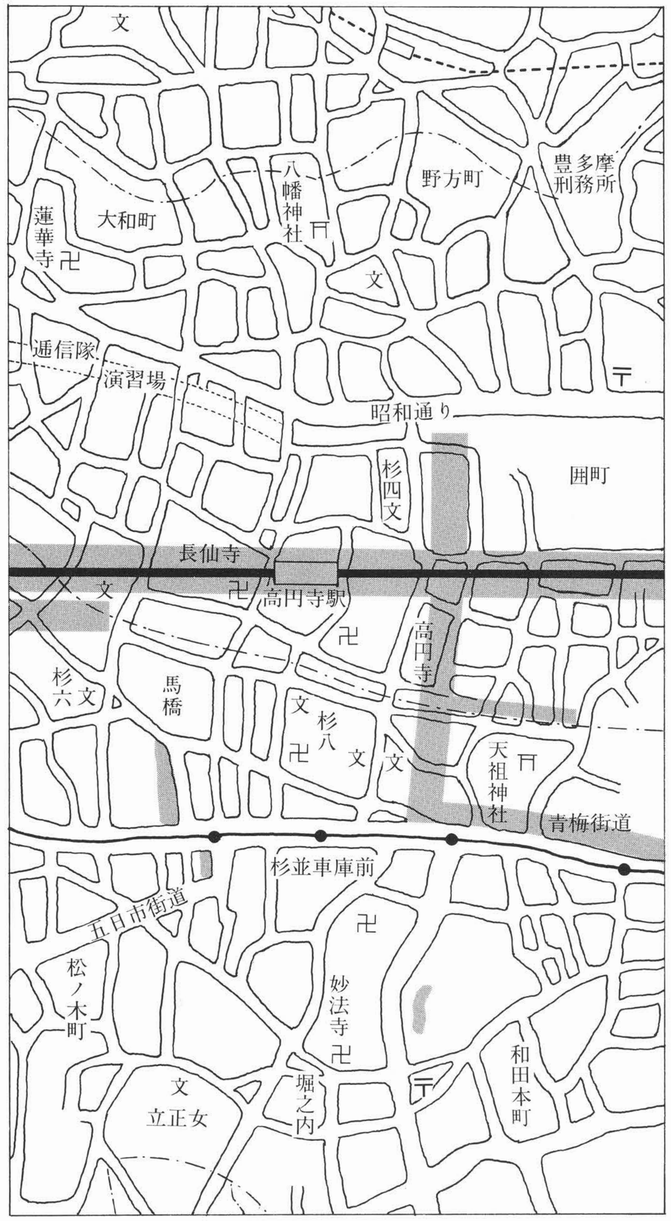
「でも先生、昭和二年の計画は全部できたんだろうね」

「それがね、全部は出来てないんだよ、環八は出来たけどね。中途はんぱで終ってるところも結構あるんだよ。現在工事してるとこもあるしね。近い所じゃ五日市街道が今拡幅工事してるじゃないか、あれも補助線として昔決められたものなんだよ、全部出来てりゃ補助線が幹線のバイパスみたいになって、車も分散できたんだろうがね」

「何んてこったね、もう六十五年もたつんだよ。それでどこもかしこも自動車でいっぱいって訳か。

じゃ先生、もう一度オリンピックやってね、世界一豊かな日本だからさ、金をどんどん注ぎ込んでよ、少なくとも一〇〇年位先を読んだ新しい都市づくりやるしかないね」

## 強制建物疎開区域




強制疎開区域



## 消えた町名『馬橋』
### その名を遺すささやかな提案

その昔、高円寺村と阿佐ヶ谷村の間に馬橋村がありました。明治二十二年の町村制施行によって高円寺、阿佐ヶ谷、馬橋、天沼、田端、成宗の六ヶ村が合併、杉並村となり、更に大正十三年に杉並町となりましたが、旧村名は大字（おおあざ）名として遺されてきました。杉並町大字高円寺、杉並町大字馬橋と云っていたのです。昭和七年区制施行により大字という表記をやめ旧村名は町名となり小字（こあざ）に当る部分を丁目で表すことになりました。馬橋は一丁目から四丁目までありました。

昭和四十年の新住居表示が施行されるまで馬橋の名は町名としてしっかり存在していたのです。ところが、新表示によって馬橋の名は消え馬橋大通り（杉六小前の道）の東側は高円寺、西側は阿佐ヶ谷と表示することになったのです。

馬橋村の地形は南北に長く（北は早稲田通りから南は五日市街道まで約二キロ）東西に狭かった（約五〇〇メートル）ので、行政区画としては、ほぼ中央に当る馬橋大通りで分割し東西の町に組み込んだ方が合理的であることは確かです。しかし江戸時代初期から馬橋の名を継承してきた住民にとっては、その名が消える



馬橋中央通り（今の杉六小東門側道路）開通祝い　大正12年６月５日（浅賀幸雄氏提供）

ことは断腸の思いであったでしょう。それぞれの土地にはそれぞれの歴史と文化が脈打っています。土地の名はそれ自体が文化です。行政上の便宜から由緒ある地名を消し去ることには疑問を感じます。先日知人が高円寺南三丁目に引越してきました。そして云うのです。「転入手続きで出張所へ行ったら馬橋出張所と書いてあった。ウマハシって何なんだ」と。出張所や学校や公園等、区の施設に馬橋の名を冠してあるのは、ひとつの文化を消し去ったことの免罪符かも知れませんが、土地との関連が分からず新住民は困惑するのです。今更町名に馬橋を復活せよとは申しませんが、もっと積極的に馬橋の名を残すようにしたいものです。例えば『馬橋大通り』かつてこの道はそのように呼ばれたようですが今は殆どこの名は使われていません。公式に認知して表示板を取付けこの道はかって馬橋村の人たちが協力して作った中央道路であることを、そしてこの辺りの地名が馬橋であったことを、後の人たちのためにもやっておくべきではないでしょうか。大通りが面映ゆかったら「馬橋中央道」は如何でしょう。いい名前だと思うのですが。



「馬橋」は，神社と公共施設に名残りをとどめている



## 長仙寺あれこれ

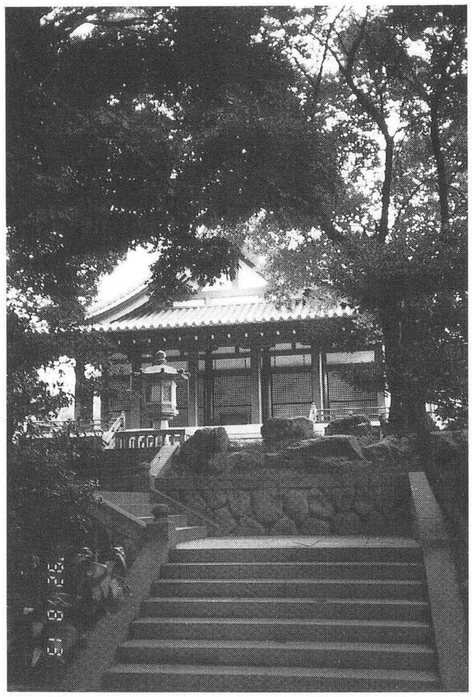
高円寺には、堀の内・梅里地区を含めて沢山のお寺があります。しかとは分かりませんが、その数三十乃至四十程あるのではないでしょうか。

しかし、その大部分は明治以後旧市内から移転してきたもので、江戸の昔からこの地を開基とする寺院は少ないのです。江戸時代後期に作られた高円寺村・馬橋村・堀の内村の絵図によれば、長仙寺、高円寺、福泉寺、清泉寺、妙法寺の僅か五寺を数えるのみです。その内福泉寺は大分以前に廃寺となり今は墓地のみが、ひっそりと守られています（菊華高校北）従って現存する高円寺地区の古刹は四寺であり、その一つである長仙寺が南商店街の西隣りにあるのです。そのような立地条件からパル商店会は長仙寺に随分とお世話になっています。

昔商店会に集会所がなかった頃、町内の集りは大抵ここの庫裏をお借りしていました。阿波踊りの初期には、ここで着付けをしたり化粧をしたりしました。三井銀行（さくら銀行）が出店の時、工事のため地下を掘ったら昔の墳墓が見つかり、直ちに商店会の手で長仙寺にお願いして供養していただきました。昭和六十年頃からは毎年七月のお施餓鬼に商店会代表が出席、万霊塔に詣でお塔婆を供え無縁仏を供養、併せて街の安全と平和を祈念しています。

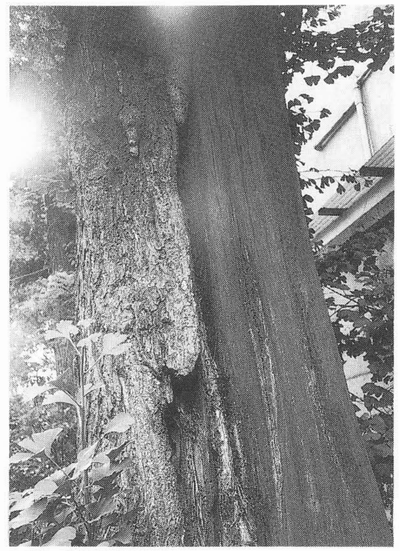
境内の東寄りの広場は戦前からブランコやすべり台、砂場を備えた小公園になっていて、近所の子供たちの遊び場になっていました。近年は区立の公園が整備された関係もあって、この公園はなくなりましたが、時に阿波踊りの練習にお借りすることがあるようです。

尚、同寺は真言宗豊山派の寺院で宝永元年（一七〇四）五代将軍綱吉の頃の開山です。


長仙寺

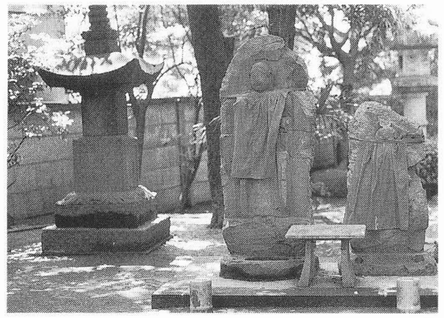
### 大いちょう

樹令は判りませんが、明治以前からあったものと思われます。


大いちょう

秋、黄色い落葉が近くの街路や、アーケードの屋根を彩り、かつてこの辺りが武蔵野であったことを思いださせてくれるのです。

尚、このいちょうの幹は後半面の樹皮が戦災で焼け木肌露出のままになっています。


地蔵尊と庚申塚

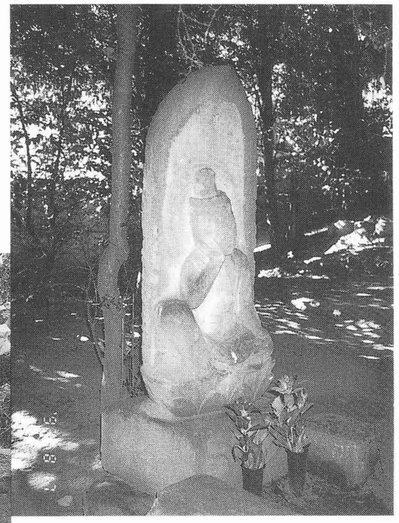
街には戦災のかけらも見あたりませんが、戦争の傷跡は、こんなところに遺っていたのです。

**地蔵尊と庚申塔**

山門を入ったすぐ左手に、元禄年間に祭られた地蔵尊と庚申塔があります。以前中野区内の路傍にあったのですが、顧みる人もなく損壊寸前のものを引き取り修復安置したものです。

**如意輪観音**

観音さまがホホを押さえていかにも歯が痛むようなお姿をしていることから、歯が痛む時お参りすれば、観音さまが痛みをかわってくれるといわれ、親しまれていました。


如意輪観音


境内の池の畔で踊りの練習



# 軍とお伊勢とラッパの森

中野駅北口の中野四丁目には区役所、税務署、警察署を始め勤労青年会館（サンプラザ）警察大学、駐輪場等々がありその殆どを官公諸施設が占めている。町名変更前、この辺りは「囲町」といっていた。「囲町」の由来は、昔この地域に犬屋敷（犬公方として知られた綱吉将軍が設けた野犬収容所）があって、それぞれを区切って一の囲、二の囲等と呼んでいたからである。犬屋敷は綱吉の死後廃止されたが、その跡地がどう処理されたかは定かでない。しかし少なくとも現在中野四丁目に当る部分（二、三、四の囲）は徳川家の管理下で原野のままになっていたと思われる。

ここを収用した明治政府は、この場所に鉄道連隊を創設した。その後電信隊、気球隊、通信隊と部隊名は変ったが昭和二十年太平洋戦争終結まで軍用地として使用されたのである。（地図の①）

それら部隊の内、特に有名なのが陸軍中野学校だった。これは情報、諜報等秘密戦要員を養成する機関として昭和十三年発足、東部第三三部隊として参謀総長直轄の重要機関であった。

一方、現在馬橋公園、馬橋小学校のあるところ（地図の②）には、かって陸軍通信学校があった。後陸軍気象部となり、戦後は気象研究所に変り移転後は公園小学校等になっている。

### 陸軍通信隊の大きな穴

昭和十年頃の話です。お伊勢の森のそばに住み、杉四小の一年生だった少女は通信隊の原っぱを通学路にしていました。学校の行き帰りに兵隊さんが電柱を立てるために大人の背丈ほどの穴を掘っているのを見ていました。ある日の夕方お母さんにお使いを頼まれて、庚申通りの喜六屋飴店（現在の東電変電所の前にあった）に飴を買いに行った帰りのことです。周囲は薄暗くなり急いで帰宅しようとする途中その穴に落ちてしまいました。その時のあざが今でも脇腹に残っているそうです。

ここの少し西寄りのところに「お伊勢の森」があった。（地図の③）現在の杉森中学校付近である。うっそうとした杉の大木とススキ等が繁り昼なお暗く、追はぎが出ると云われる程の寂しい所だったという。

地図の④は現在の日大二高であるが、ここから「お伊勢の森」「陸軍通信学校」を経て「囲町」まで白抜きベルト状の部分がある。ここは陸軍通信隊の演習地だった。演習地だから無論舗装等していない。土と砂利と雑草の幅約三十米の細長い原っぱと思え




①囲町　②陸軍通信学校　③お伊勢の森　④日大二高　昭和14年杉並区図による

ばいい。

演習のない時は近くの子供たちの格好の遊び場だったらしい。南北の道路は通じていたから商店街が面していたところでは、お客さんや通行人のすぐ脇を武装した兵隊さんが駆け抜けていくこともしばしば。又、「お伊勢の森」では演習にきた兵隊さんがラッパの練習をしたことから誰いうとなく「ラッパの森」と呼ぶようになったとか。ラッパの音が聞こえる時は兵隊さんがいるということで、いつも寂しいこの付近も安心して通行できたという。

「お伊勢の森」のいわれは、その昔ここに神明社があって伊勢大神宮の霊石をご神体としていたことによる。この神明社は後、阿佐ヶ谷北（現杉並第一小学校際）へ遷座し天祖神社と称していたが、平成三年神明宮と改称した。

尚、かって陸軍気象部内にあった「気象神社」は戦後高円寺南口の氷川神社境内に移され大切に祭られている。

それにしてもお犬様の囲いが、軍の施設になりそして今中野区の顔になっていることを泉下の綱吉公はどんな思いで眺めていることだろう。




昔，お伊勢の森にあった神明宮
現在地阿佐ケ谷北１－25



# 蚕糸試験場とセシオン

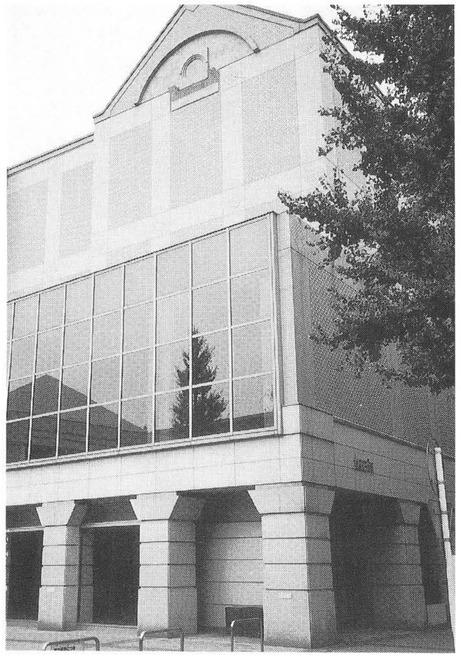
青梅街道と環七通りが交差するところから少し東寄りに「蚕糸の森公園」があります。

ここには明治四十四年に原蚕種製造所として農林省が建てた蚕糸試験場があったのですが、昭和五十四年に筑波学園都市に移転しました。レンガ造りの本館は明治の名建築であり、保存を望む声も多かったのですが、結局取り壊されその跡地約四万平方米の三分の二を蚕糸の森公園として区民の憩いの場とし、三分の一の部分に従来環七通り西側にあった杉並第十小学校を移転しました。

杉並第十小学校の跡地には、区立の社会教育センターと高円寺地域区民センターの併設施設「セシオン杉並」を建設、付近一帯はすっかり様変りしました。

昔、高円寺村の時代は近くに妙法寺がある関係でこの辺りが一番賑ったところと思われますが、平成の現在では別の意味での「集いの場」として区民に親しまれています。

尚、セシオンとはスペイン語で「出合い」「ふれあい」を意味します。



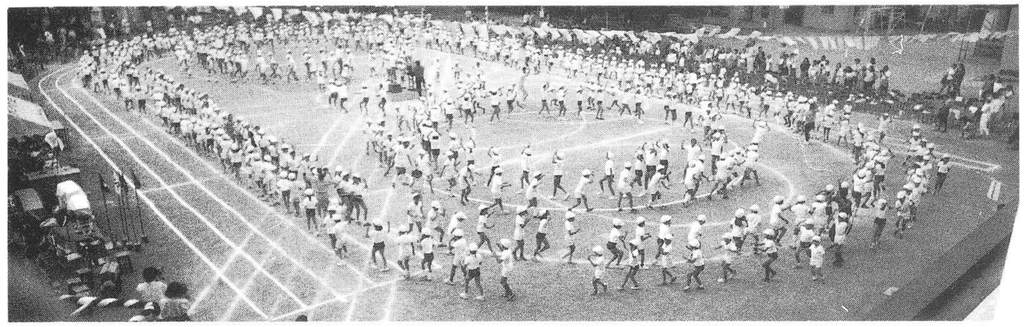
セシオン杉並



公園正門は蚕糸試験場当時のもの



# 高円寺の小学校



創立100周年記念運動会で阿波おどりを踊る杉三小全校生徒

現在高円寺には、六つの小学校があり地域の子供たちが元気に学び、又身体づくりにいそしんでいますが、昔の子供たちはどうだったのでしょうか。

江戸時代には、テレビや映画でお馴染の寺小屋や、村の有力者（庄家さん等）のところで読み書きソロバン等暮しに必要な事を、村の子供たちに教えていたのです。

高円寺界隈では馬橋村の青梅街道沿いにある「清見寺」が知られています。このお寺では住職が教え、地元の子供はもとより遠く高井戸や天沼からも生徒が通っていたといわれています。清見寺と住民のこのような関わりは、明治五年に学制が敷かれてからも続き明治八年に桃園小学校第一番分校がこのお寺に開設されました。この学校が後の杉並第一小学校（阿佐ヶ谷）になるのです。

さて、高円寺に最初に出来た学校は現在の「杉並第三小学校」です。明治二十六年三月十六日「東京府豊多摩郡杉並村高円尋常小学校」という名で、現在高円寺体育館のある辺りに開校したのでした。通学区域は高円寺全域から和田、堀の内一帯に及ぶ広範なものでした。大正十四年に高円寺北口に「杉並第四尋常小学校」が設置されるに伴って「第三尋常小学校」と校名を変え通学区域の変更・児童の分離が行われました。

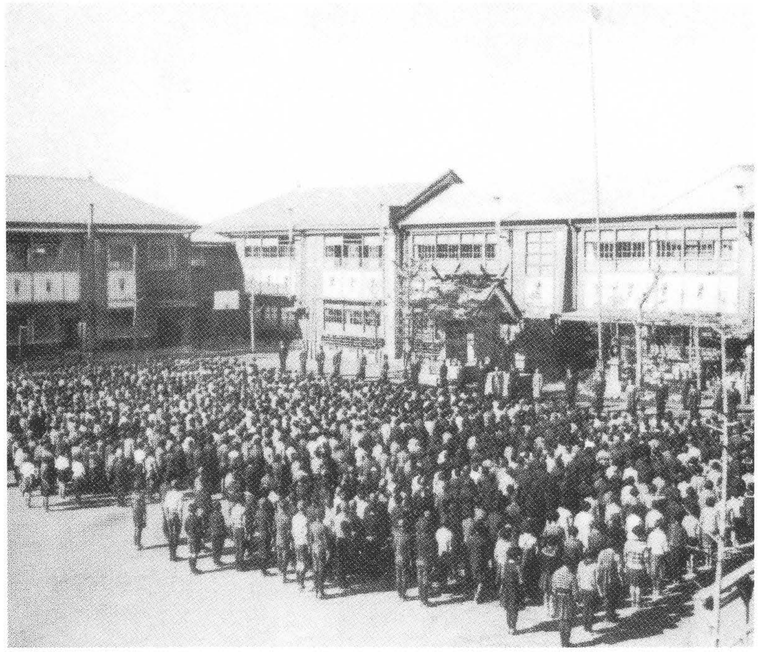
高円寺は大正末期から昭和の始めにかけて人口が急増したので、次々に学校が新設されました。大正十五年に「杉並第六小」昭和七年に「杉並第八小」十二年に「杉並第十小」が設置され、その都度学区の変更・児童の分離が行われたのです。この時期小学生だった人々は入学した学校と卒業した学校が違う方も多いと思います。

戦後新設されたのが「馬橋小学校」です。別表でお分かりのように戦後児童数が急増し特に杉四小の児童数が多いため、これに対応すべく昭和二十七年に開校したのです。

このように、かつて全高円寺を学区としていた「杉三小」が人口の増加に伴って次々に学区を分離してきた訳で、このように見てくると、高円寺の小学校のルーツは正に「杉並村高円尋常小学校」（杉並第三小）であると云ってよいのではないでしょうか。

その「杉三小」は本年度（平成四年）創立一〇〇周年を迎えました。

誰もが学んだ小学校、想い出はさまざまでしょうが、地域の宝として大切に見守っていきたいと思います。



杉並第八小学校（昭和15年当時，全校生徒約1,500名が在籍していた。）



高円寺地域小学校の開校年次と児童数の推移（第二次戦争後）

| 校　名 | 創立年月日 | 昭和21年 | 30 年 | 40 年 | 50 年 | 平成 3年 | 昭和30年を1とした場合の現在の割合 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 杉並三小 | 明26. 3.16 | 722 | 1351 | 663 | 757 | 498 | 0.37 |
| 杉並四小 | 大14. 9. 1 | 1215 | 1456 | 686 | 623 | 299 | 0.21 |
| 杉並六小 | 大15. 6. 2 | 814 | 1254 | 689 | S.51 868 | 458 | 0.37 |
| 杉並八小 | 昭 7. 9. 1 | 864 | 1546 | 762 | 846 | 376 | 0.24 |
| 杉並十小 | 昭12. 4.10 | 445 | 860 | 544 | 684 | 560 | 0.65 |
| 馬橋小 | 昭27. 4. 5 | | 1250 | 799 | 927 | 609 | 0.49 |
| | 計 | 4060 | 7717 | 4143 | 4705 | 2800 | 0.36 |

杉六小のみ50年の個所に51年の数を使用
＊30年は第一次ベビーブーム（20年～25年）の子供達が就学期に当った時期。
＊50年の数が40年を上回っているのは、第二次ベビーブーム（45年～50年）の子が就学期に入るハシリと思われる。漸増は50年代後半で終り、60年代に入るや急激に減少しピーク時の36％にまで落ちこんでしまった。
＊落ちこみが特に目立つのは杉四小と杉八小で、両校共駅近くの商業地域が通学圏内にあり事業所が増え、住民が減りつつあることを明確に示している。

# ぶらり見てある記

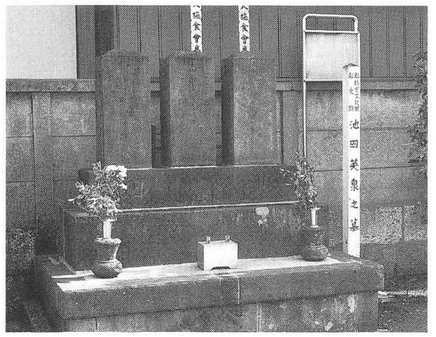
### 佐藤信淵の墓

通称鎌倉街道に面した「松応寺」には、江戸時代後期の学者、佐藤信淵の墓があります。

蘭学・需学・神道・農学・兵学・社会政策他万般に通じ、幕政に大きな影響を与えたと云われています。



松応寺
佐藤信淵の墓



福寿院
池田英泉の墓

### 池田英泉の墓

杉並第八小学校東隣りの福寿院には、江戸時代後期の浮世絵画家池田英泉の墓があり、都指定文化財になっています。

### 氷川神社と気象神社

旧高円寺村小名「原」の鎮守で、祭神は素盞嗚命です。文治五年（一一八九）建立といわれ、境内末社に全国的にも珍しい気象神社があります。

毎年八月二十七、二十八日に例大祭が行われ高円寺阿波おどりもこの日に行われます。




気象神社

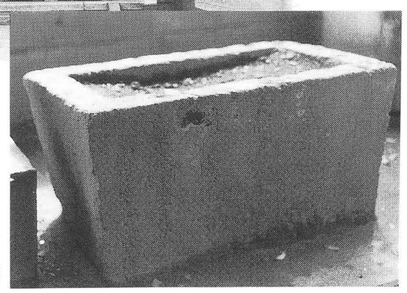


### 高円寺天祖神社

高円寺南一丁目にあるこの神社は、旧高円寺村小名「通り」の鎮守で、寛治元年（一〇八七）の創建といわれています。高円寺村が小沢村といっていた当時は、小沢村の鎮守として尊崇を集めました。境内西隅にある古い手洗水盤には、寛文四年（一六六四）の銘があります。



高円寺天祖神社



手洗水盤

### 馬橋稲荷神社

阿佐ヶ谷南二丁目のこの神社は、旧馬橋村の鎮守で、鎌倉時代末の創建と伝えられます。正面の石の大鳥居には竜の彫刻があり東京三鳥居の一つと云われています。




馬橋稲荷神社

### 妙法寺と有吉佐和子碑

元和年間創立の日蓮宗の名刹。厄除祖師として信仰を集め、落語「堀の内」でもおなじみです。

境内の一隅に、作家有吉佐和子さんの碑が建っています。




妙法寺にある
有吉佐和子碑

## ねがいの像

昭和五十五年十一月二十日地元老人会の川治温泉旅行がホテル火災に遭い、三十名という多数のお年寄りが亡くなられました。

このような悲惨な出来事を再び繰り返すまいとのねがいを込めて中央町会と高南長寿会が南四丁目の中央公園内に建立しました。



ねがいの像

## 純情商店街のアーチ

高円寺北口商店街で生まれ育った〝ねじめ正一氏〟の『高円寺純情商店街』が直木賞を受賞、テレビドラマになる程好評を博しました。

北口商店街では直ちに愛称を変更「高円寺銀座」のアーチをはずし、「純情商店街」の大アーチを設置しました。ユニークでしかも素早い対応ということでマスコミにも大きく取り上げられました。




純情商店街のアーチ

## 立体駐輪場

高円寺駅周辺は、昭和五十年代後半から駅の乗降客の自転車が放置され始め、六十年頃ピークに達しました。駅前広場はもとより周辺道路に自転車が溢れ収拾がつかない有様でした。見かねた商店会、自治会が対策協議会を結成、関係官庁等に働きかけるなど強力な運動を展開、これがキッカケとなって平成三年四月に北口（映画館跡）に立体駐輪場が完成。駅周辺の状況は可成り改善されました。

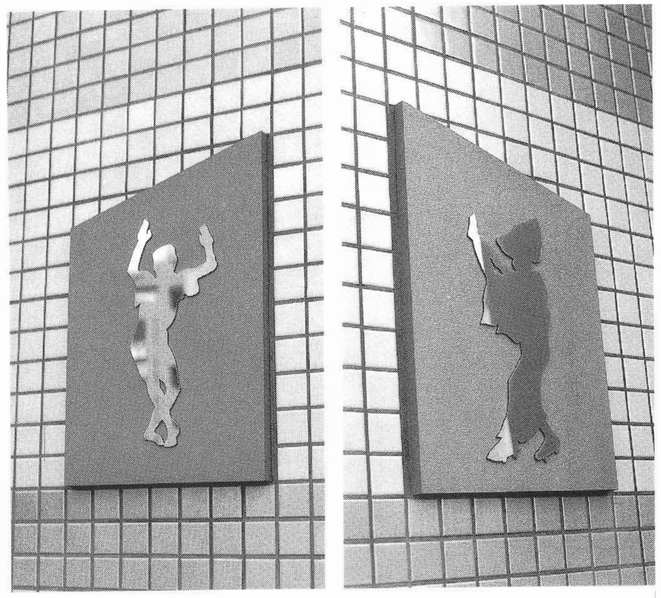



立体駐輪場



## 公衆トイレの表示板

さすが阿波おどりの街高円寺。ＪＲ高円寺駅北側構内の区立公衆トイレ入口の男女表示が、踊り手のシルエットで表わされています。



公衆トイレ表示板。右・女性用，左・男性用

## 阿波おどりの絵看板

ＪＲ高円寺駅に下車し構内から出ると、目につくのが「阿波おどりの街」と書かれた絵看板。さながら観光地の趣です。これは南北両方に立っています。




阿波おどり絵看板



高南通りのガードレール
こんな所にも阿波おどり，
やっぱり高円寺ですね

高円寺界隈の路上で見られる石仏や庚申塚を六ヵ所ご紹介しましょう。

昔はもっとあったはずですが、宅地化や道路造成更には戦災で損壊したり、どこかのお寺へ移したりで路傍で健在なのは数少なくなりました。

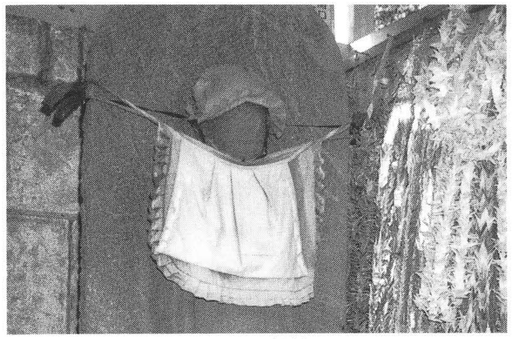
つくづく眺めると、これを祭った当時の人々の思いが伝わってくるような気がします。一度お詣りしてみては如何でしょうか。

### 路傍の石仏（1）

阿佐ヶ谷南二丁目二五番の目立たぬ脇道で見つけた「馬頭観世音」です。ひっそりとした佇まいは見る人の心を和ませます。市街地では少なくなったお地蔵様ですが、こんな近くに健在でした。

### 路傍の石仏（2）

梅里中央公園北斜め角に元文二年（一七三七）に建てられた「関口のお地蔵さま」があります。この辺りは昔「関口」と云い、村のお母さん達が子供を病から守り無事に成長する願いを込めて造立したと云われています。この時代お地蔵さまを立てるのに十両を要したそうで、お母さん達は粟や稗を少しずつ持ち寄ってお金にし約十年の歳月を経て作られたのだそうです。母親の情愛がひしひしと伝わってくるお地蔵さまです。



路傍の石仏(2)




路傍の石仏(3)



路傍の石仏(1)



### 路傍の石仏（3）

杉並と中野の区境に近い高円寺北一丁目の「大河原本家」の向いに小さな祠がありますが、この囲いの中に二体のかなり風化したお地蔵さまがあります。

以前は近くの路端にあったものをここに移したもののようです。昔、名主を務めていた大河原家の寄進になるものですが、この辺りの村人の安全を願って造立したものと思われます。

### 高円寺北の庚申塔

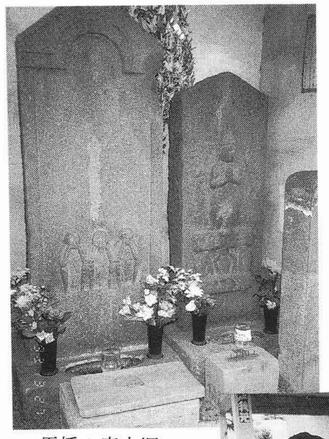
北口庚申通り商店街に面するこの庚申塔は正徳六年（一七一六）に高円寺村の講中十人が悪病退散、村民安全を願って建立したものです。昭和二十年の空襲で一部が破損しましたが、後現在の姿に修復されました。

### 高円寺南の庚申堂

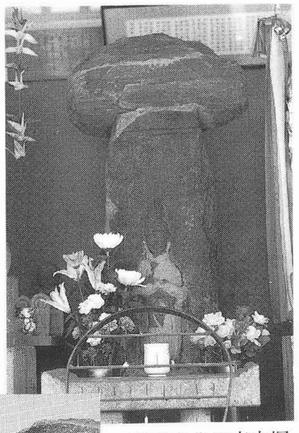
環七通りが青梅街道と交差するところから、僅か北寄り東側に庚申塚、阿弥陀塔等、計五基が祭られています。いづれも旧高円寺村村民の造立になるもので、最も古い阿弥陀塔は寛文十年（一六七〇）の銘があります。

### 馬橋の庚申塔

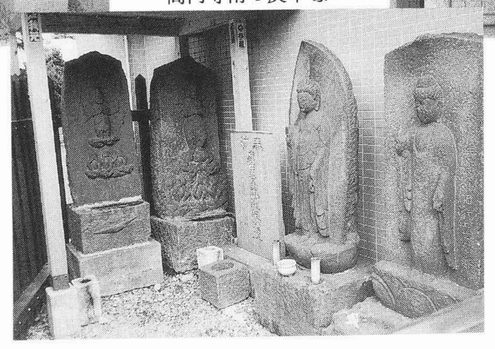
高円寺南三丁目二十七番、杉六小学校の十字路を東に少し入った角に旧馬橋村村民が造立した庚申塔があり、今も地元の人々の信仰を集めています。延宝元年（一六七三）と享保元年（一七一六）のものです。



馬橋の庚申塚



高円寺北の庚申塚

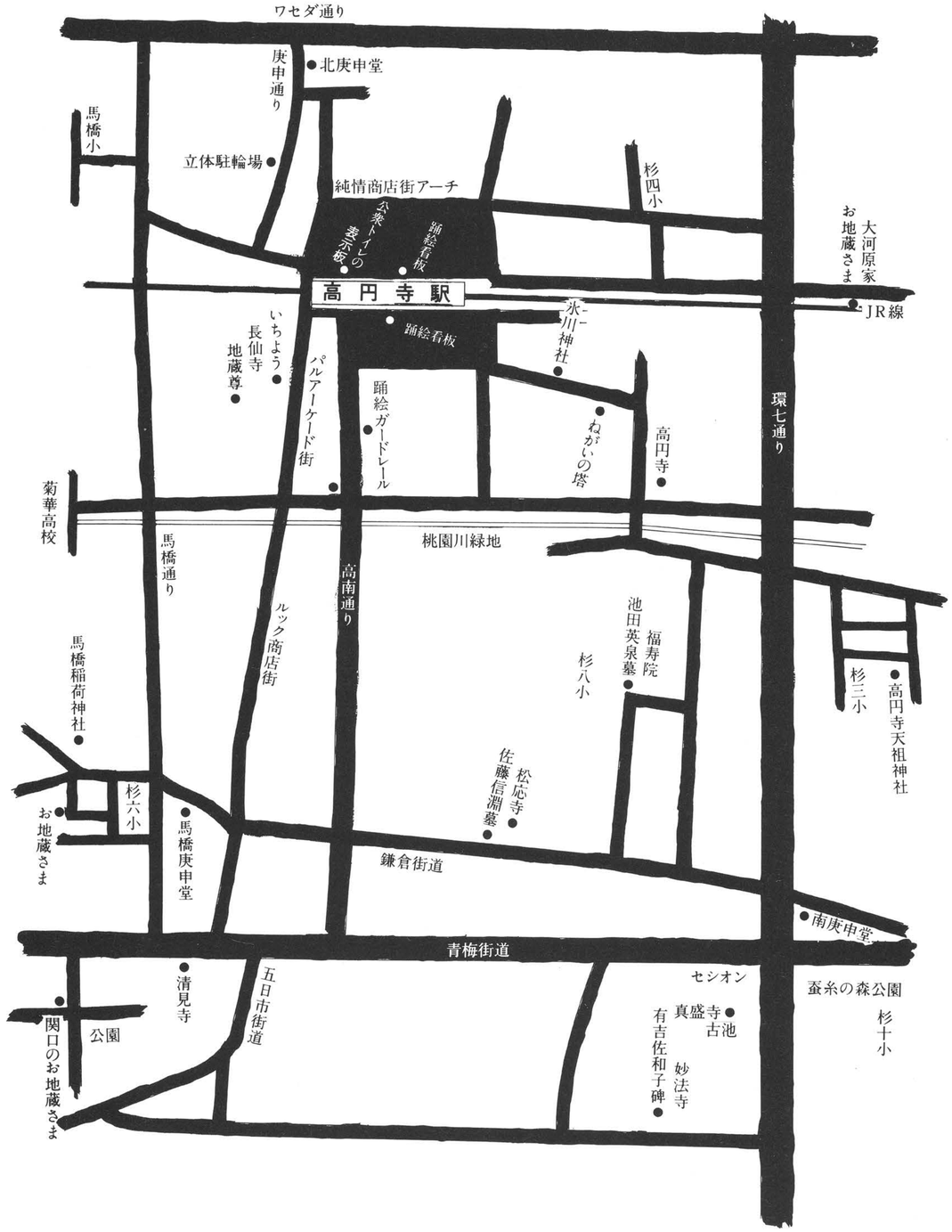


高円寺南の庚申塚

# 第三部

# 高円寺パル覚書




周辺マップ

# 街づくりの設計図——区画整理

高円寺地区の区画整理事業は、昭和二十二年十一月二十六日の戦災復興院告示に基づいて早稲田通りから桃園川までの十六万余坪を対象として始まりました。当時は商店街も道路より建物を引っ込めて建て協力する態勢をとっていましたが、東京都の作成した計画図に不明朗な点があり、またそれを正そうとしない都の態度を見、全地区に反対運動が起こりました。そして遅々として進まぬ事業に業を煮やした商店街の各商店も先を争うように建物を道路際まで前進、反対運動に拍車がかかりました。一方このような混乱状態を解決するための努力も始められました。駅南側の氷川町会、緑ヶ丘町会、商盛会三町会による区整評議会の活動がこれです。同会は住民世論の調査等の基礎的準備を重ねた上、事態収拾に乗り出しました。そして、東京都と交渉の結果として、対象地区を大幅に削減、原案の約三分の一の五万余坪に縮小、かつ十八米道路（現高南通り・当初は二十五米の道幅で夜店通りまでの計画であった）の青梅街道までの貫通を条件としたいわゆる収束案が三十五年三月に出来上がりました。これを契機に、後に高南通りとなる部分の家屋から順次立ち退きが始まりました。しかし、その収束案は商店街（商盛会）に内部矛盾を発生させるものでした。つまり商店街の道路が区画整理対象地区の境界線となり、東側は対象に、西側は対象外となる内容のものであり、商盛会を代表して評議会に名を連ねた人々、態度を一層硬化させる東側の人々、反対運動の熱が冷めた西側の人々と三者の立場が出来てしまいました。そして、その後数年にわたる商盛会の活動の停滞と混乱の原因となったのです。

収束案の内容が徐々に明らかになりつつあった昭和三十二年、商店街の反対派住民は区整対策委員会を結成し、東京地裁に計画の中止を求める提訴を行いました。しかし地裁、高裁、最高裁と約十年に及ぶ民事訴訟も敗訴に終わりました。敗訴に終わった裁判でも、都の長年にわたる怠慢行政が混乱を大きくしたと住民の訴えに理解を示す裁判官もいました。裁判と平行して商店街としても数回にわたり、都に対して計画の中止を求める陳情請願書を提出しました。都の担当者も何回か交替し、裁判の進行とともに、都側も計画の欠点を自ら認めるに至り、都・住民双方が譲歩する環境が徐々に整えられて行きました。旧夜店通り沿いの区画整理が予想以上のスピードで進行し、拡張された道路が西進、商店街に迫る勢いの中、住民側の意識もただ反対を唱えていることから条件交渉へと移りました。

昭和四十年の暮、都の建設事務所より商盛会事務所に対する換地通告が行われたのを皮切りに、各商店に対しても次々と換地指定がなされました。折りもおり四十一年八月十八日の昼ごろ商店街中程で二棟焼失数棟を類焼する火事が発生しました。都による



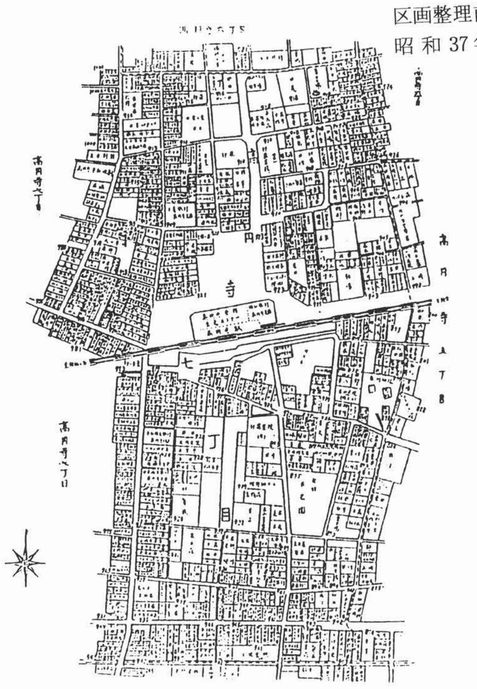
前頁写真：高円寺パル

強制執行近しの噂もあり、焼け跡がさら地になった状況を目の当たりにした住民は、もはや止むなしという心境になっていました。区整対策委員会も円満解決しようと、都との交渉に当たり、自主的な区画整理案を作製することで合意し、商店街各ブロックごとに話し合いが行われました。

昭和四十二年一月上旬に商盛会事務所が現在地へ移転、次いで火事があったブロックが取り壊し、その後ブロック毎に順次進行し、同時に共同ビルや新店舗建設が始まりました。こうして最後に北寄りのブロックの建設事業が四十三年末までに完了しました。

高円寺駅周辺図

区画整理前
昭和37年



区画整理後
平成3年



これをもって、二十年にわたり難行を続けた区画整理問題に一応の終止符が打たれました。

昭和四十四年駅前の十八米道路が完成（青梅街道までの貫通は後年）し、第十三回阿波おどりの演舞場として使用されました。正に、この駅から青梅街道までの大通りがなかったなら高円寺阿波おどりの今日の発展はなかったでしょう。

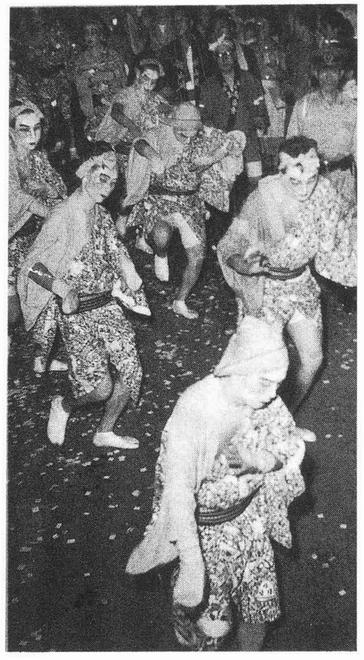
南北駅前広場の噴水は、住民の永年にわたる辛酸と労苦の代償として完成した区画整理事業を記念して作られたものです。



# お江戸の乱舞——高円寺の阿波おどり

昭和三十二年に始まった高円寺阿波おどり、初めの数年は「ばか踊り」の名で細々と続けていたのですが、今では当事者も驚く程の大盛況。その発展過程を第三者として又、ジャーナリストとして暖かく見続けてきた人がいます。

元徳島新聞東京支社長・谷田匡氏です。同氏が平成二年八月十二日の徳島新聞に書いた「高円寺阿波おどり」の記事をここに収録します。当事者が書いたものは兎角ひとりよがりになりがちですが、同氏の記事は正鵠を射ていると思うからです。



昭和33年（第２回）
うれし，はずかし，情けなし




昭和35年第４回

毎年八月二十七、二十八日の両日（前夜祭を含めると三日間）ＪＲ中央線高円寺駅周辺で繰り広げられている高円寺阿波踊りは、今年で三十四回を迎える。今では地元高円寺の連だけではなく、都内はもとより千葉、埼玉、神奈川など首都圏の商店街や職場、地域で阿波踊りを楽しんでいる人たちがそれぞれに連を構成して、どっと繰り込んでくる。昨年は踊り本部に登録されただけで六十四連、六千人が踊った。飛び込みの連もあるから、実数はもっと多いだろう。人出もすごい。高円寺駅の乗降客は平日の三倍、三十万人に膨れ、周辺は百万人の人人人であふれる。

十年前から鈴木東京都知事が開幕のテープを切るのが恒例になった。八年前にはハワイのアロハ・ウイークに東京都の公式民間親善使節として派遣され、約百人が踊った。踊りといい、人出




昭和34年（第３回）前年よりはやや元気あり，手には鳴子を持って踊る

といい、もはや高円寺という東京の一地域の踊りではなく、高円寺の街を舞台にした東京の阿波踊り、大東京の夏の夜を彩る一大イベントである。子供でなくても一瞬、阿波踊りは高円寺のものと幻想する。

## 初めは「ばか踊り」

これほどまでに成長した高円寺阿波踊りも、当初は踊りも人出もさっぱりだった。

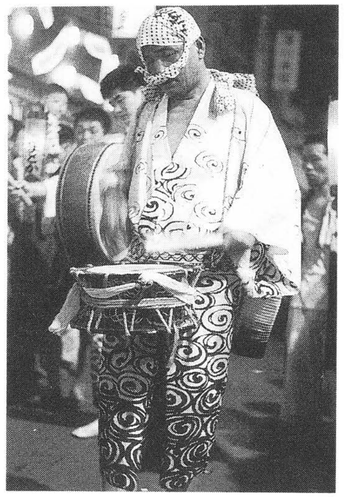
昭和三十五年夏のある日、見知らぬ人が二人、銀座の徳島新聞東京支社にやってきた。当時支社勤務の記者だった私が応対すると、高円寺南商店街（当時七十五店舗）の青年部の人で「阿波踊りを教えてくれる人はいませんか」という。話を聞くと、

▽隣の阿佐ヶ谷商店街が夏枯れ対策に七夕祭りを催し、お客を集めている。それに対抗して「こちらは南のムードで行こう」と三年前（昭和三十二年）から青年部が中心になって、地元の神社の祭礼日に「高円寺ばか踊り」の名称で阿波踊りを始めた。

▽青年部に阿波踊りを知っている者がいなかったので、最初は地元の日舞の先生に教わった。一歩進んで二歩下がり、二歩進んで見栄を切るといった踊り方で、先生がいうままに全員、顔におしろい、まゆ墨、口紅を塗ってお化粧した。おはやしはチンドン屋さんに頼んだ。メロディーは「佐渡おけさ」だった。

▽ところが評判はいま一つで、青年部内でこのまま続けるかやめるか議論になり、投票の結果十対九の一票差でもう一年続けて





昭和36年（第５回）
木場連元連長　鴨川長二氏（故人）

「木場連」が第１号

「木場連」は当時〝東京の徳島町〟といわれるくらい徳島県出

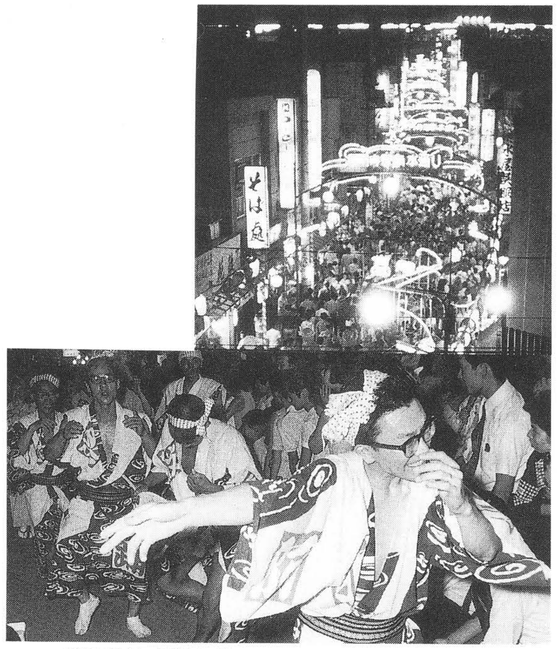
様子を見ることになった。去年（第三回）は違う日舞の先生に指導してもらい、男は鳴子、女は大きな渋うちわを持って踊った。おはやしは杵屋社中に頼んだ。前よりは豪華になり、踊りもマシになったが、テレビで見る本場の阿波踊りとは似ても似つかない。

「ついては正しい阿波踊りを踊りたいので、どなたか紹介してほしい」と支社に訪ねてきたのだった。この二人は現在「葵新連」連長の森田昇栄さん（そば店主）と高円寺阿波踊り振興協会長の小沢淳男さん（書店主）である。

私は当時高円寺に住んでいた徳島市出身の作家三田華子さんと、「木場連」連長の鴨川長二さん（いずれも故人）のおふたりを紹介した。三田さんに阿波踊りと徳島のことを、鴨川さんに実技を指導してもらったらと思ったからである。




昭和38年（第７回）阿波踊り宣伝隊

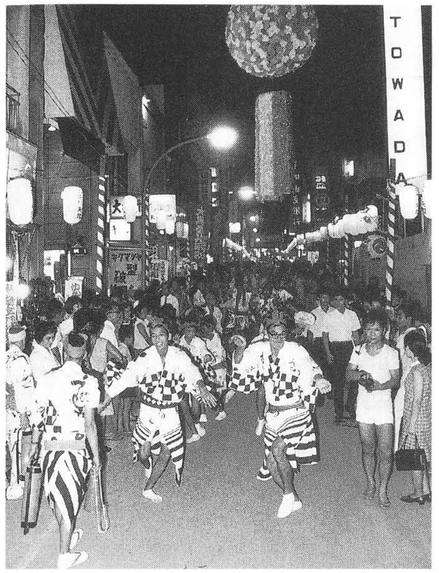


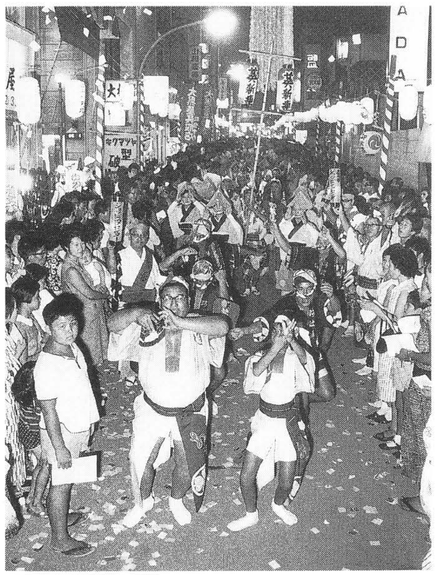
昭和41年（第10回）
10周年を迎える頃にはかなりの人出がみられた

身者が多く住んでいた深川・木場（江東区）の材木屋さんたちが組織する県人の踊り連である。戦後自然発生的に生まれたようだが昭和三十一年、深川の富岡八幡宮の四年に一度の大祭の時、区域の町の大通りを踊りまくった。東京の町中を堂々と阿波踊りを練って踊ったのはこの時が初めてだと思う。

その中心になったのが鴨川さんで、阿波踊りに人一倍情熱を持っている人だった。だから高円寺南商店街の青年部の人たちの依頼に快く応じ、手の空いている木場連のメンバーたちも呼び寄せて、総出で子供に教えるように本場の踊りとおはやしを手ほどきした。

青年部の人たちも〝授業〟に熱心で、仕事を終えて夜遅く、高円寺から木場まで片道一時間かけて鴨川さんが校長役の〝阿波踊り学校〟へ通い、深夜になってからも近くの映画館を借りて復習した。太鼓の騒音で苦情が出、パトカーが駆けつけたこともあったが、ダンボール箱を太鼓代わりにしてけいこを続けた。





昭和42年（第11回）の盛況

その成果が現れて踊りはめきめき上達し、「ばか踊り」が阿波踊りらしくなった。「木場連」も特別参加して、昭和三十八年（第七回）には名称も「高円寺阿波踊り」と変え、名実ともに阿波踊りになった。となると、見物客が増えだし、周辺の商店街や町内会の人たちがわれもわれもと踊りに加わりはじめた。

草創期は駅南口の六㍍幅の狭い商店街を二百五十㍍、ちまちまと踊っていたのが、南口商店街を中心に、さらに南の新高円寺商店街へ伸び、ＪＲの線路をまたいで北口の商店街へと広がった。駅が高架駅になり、道路が拡張、整備されると、それに伴ってさらにスケールが大きくなった。



現在は駅を挟んで南北に通じる幅十八㍍、長さ一・二㌔の通りが踊りのメインで、演舞場を五ヵ所、踊り広場を四ヵ所設け、周辺の十七の町会や自治会が踊りに協賛、区役所、警察署、駅、商店街連合会、ボーイスカウトなど十四の公私団体が協力している。見ようによっては、東京というのはあきれるくらいすさまじい所だ。

三十年くらい前まではわずか数十人が正体不明の踊りを踊り、見物人もちらほらだった高円寺の阿波踊りが、いまでは四百年からの伝統がある本場の徳島に迫る勢いを示している。その上、高円寺の熱気にあおられたかのように次々と他の地域へ広まった。埼玉県越谷市の中央住宅（中内佼三社長＝板野郡土成町出身）が中心となって昭和六十年から始めた「南越谷阿波踊り」は高円寺に次ぐ盛況。昨年は二十九連千四百人が踊り、見物客も二日間で延べ二十二万人に及んでいる。そのほか規模の大小を問わなければ現在、杉並区下高井戸、世田谷区下北沢、新宿区神楽坂、都下の東久留米市、神奈川県大和市、千葉県流山市など、首都圏の五十ヵ所で阿波踊りを催しているといわれ、それなりににぎわっているという。


昭和44年（第13回）こんな威勢のいい連も誕生した

### 生みの親は県人

このように盛んになったのは、経済の高度成長、阿波踊りがもつ人寄せパンダ的要素など、いろいろな理由があるだろうが、そのタネをまいたのは鴨川さんはじめ在京の徳島県出身者である。「木場連」は東京での踊りが盛んになるにつれて木場以外からの参加者が多くなり、昭和四十七年に「天恵連」と改称、現在も活動しているが、同五十八年に七十五歳で死去した鴨川さんの後を継いだ藤原信一連長（徳島市出身、印刷業）によると「鴨川さんが健在なころは、各所から頼まれるままに一年間に七十回も教えに行ったり、踊りに行った」という。一時と比べると最近は少なくなったが、それでも今年は七月末までに二十五回〝踊り出張〟をしているとのことだ。

東京の阿波踊りを花に例えれば、鴨川社長の木場連園芸が栽培していた徳島原産の〝踊り種子〟を高円寺に植え、高円寺の人たちは丹精込めてそれを育てて、見事な大輪の花を咲かせた。それ

が大評判になって、近隣や近郊から大勢観賞に訪れ、木場連園芸本社や高円寺支店に頼んで苗を分けてもらう人が多くなった。その中には枯らせてしまった人もいるが、夏の開花シーズンになると、首都圏のあちらこちらの庭で中輪、小輪の花が見られる…といったところだろう。もし、鴨川さんたちがいなかったら、高円寺の踊りは育たなかったし、東京の阿波踊りも今日ほど盛んにはならなかったに違いない。その意味で「鴨川さん＝木場連＝天恵連」は東京の阿波踊りの最大の功労者だ。


昭和48年（第17回）

### 現代都市の〝魔法〟

かつて高円寺の踊りを社会学的に調べた立教大学の松平誠教授は、高円寺踊り三十周年記念誌で「高円寺の阿波踊りほどに、現代日本の社会と生活を、よく表しているのは少ない。何もかもが、これまでの民俗文化や地域生活の枠組みにははまらない。都市の新たな共同生活が、住む土地を超え、職場を超え、職業や地位、年齢や性の違いをも超えて、つくりあげられつつあるシンボルなのではないか」と考察し、「なんだか現代都市の演ずる魔法のように思えてくる」と述べている。

加速度的に、一極集中が進んでいる東京―。その中で東京の阿波踊りは、今後、どのようにうごめき、伸びて行くのか。楽しみである半面、空恐ろしくもある。




第36回（平成４年）
大会オープニング



## 事務所の変遷

現在、高円寺南商店街振興組合は街の中心部に三階建ての立派な事務所を持っている。一階は組合事務局、二階は一定期間阿波踊り振興協会に賃貸し、三階は会議室として使用する他、貸会議室としても活用している。

しかしこのような事務所が一朝一夕に出来る訳がない。ここに至るまでさまざまな曲折を経てきたのであった。

昭和三十四年頃まで、この街には集会所がなかった。会内の集りは大抵長仙寺の庫裏を使わしてもらったり、個人の家の一室を貸してもらったりしていた。

集会所が出来たのは確か昭和三十五年だったと思う。商盛会会長を務められたこともある鈴木四郎氏（昌美堂）のお宅（店）が改築される際、一階の一部と二階の一部（十畳位）を商店会が借りることとし、その入居権利金（？）として全会員さんから集めた出資金による一五〇万円を支払ったことから、この物語は始まるのである。当時は任意団体だったから日常的事務はそう多くない。業務は各理事がそれぞれ自分たちで処理していたから事務局としての使用はなく、一階は売出しの福引所等で使う程度、二階会議室のみ頻繁に利用されていた。

ところが昭和三十九年四月に至って状況が変った。建物の所有者鈴木氏から当時の商盛会理事長河原廣氏に明渡しの要請をしてきたのである。

千代田土地ＫＫという会社が、この辺りの土地買収を画策、数軒のお店と買収交渉を始めていて鈴木氏にもその話が及んだのである。

理事会としてはこの要請に簡単に応じる訳にはいかない。権利金を支払い月々の賃貸料も払っている以上、居住権は当方にある訳で、しかもそのために会員さんに出資を仰いでいるのだから会の利益を守る義務がある。代替物件を提供してくれるか、或はそれに相当する移転料を支払ってもらわなければならない。

しかし一方では、鈴木氏の事情も考えなければならない。同氏は高齢でもあり、この際この物件を処分して廃業、近くに住居を求めて余生を過ごそうとの考えだったから、会の要望をストレートにぶつける訳にはいかなかった。この点については理事会で度々白熱した議論が交わされた。会の利益を優先すべしとする立場と、鈴木氏の利益を守るべきだとする考えが激突、時に激しい言葉がとびかった。明渡し期限は七月末とされていたから、結論が出ないまま取りあえず異議申立をし、話し合い解決の途を探ることとした。一方、河原理事長のお店は当時鈴木氏の隣に位置していて同じく買収交渉を受けていた。鈴木氏宅の帰趨によって自店の態度も決まるという微妙な関係にあったから、同理事長が会を代表するのは不適当であるとの考えによって当面休職扱とし、

理事長代行として小沢淳男・城石昇の両氏を選任、これに理事最長老として小倉盛氏を加えた三氏が交渉委員として今後の折衝に当ることになった。間もなく売出しの時期もくる、阿波踊りの準備もしなければならないから、その他の理事は通常業務に専念することにした。

その頃になると会内でいろいろな憶測が飛交ってきたので七月に至って全会員を対象に公聴会を開催、正確な経過を説明すると共に意見を出してもらったのである。会員さんの意見も理事会と同じように二つに別れたが、結果としては交渉委員に任せるとの決定をみた。七月二十三日交渉委員は千代田土地に対して折衝を開始した。初め千代田土地は「筋違い」との態度をとった。『当方は鈴木氏と事務所明渡しを条件として交渉しているのであって、会は鈴木氏と話合うべきだ』と云うのである。理屈はそうかも知れないが、会は鈴木氏の利益も守らなければならぬという矛盾した立場にあるから何としても千代田土地をテーブルにつかせねばならない。或はこの会社に土地取得を依頼している実際の買主とも折衝する必要があろうと考えた。情報によれば実際の買主は三井銀行（現さくら銀行）と推定された。何回目かの交渉の席で「これから三井銀行本店へ行くつもりだ」と云った一言で相手は態度を変えたという。

一転して話し合いに応じる姿勢を見せたのだった。会の方針は代替物件を千代田側で確保すること、鈴木氏への買収金額への影響を出来るだけ小さくすることにあった。この辺りの交渉は三人の委員の息の合った駆引で微妙な展開を見せたが、その中身は当事者のみ知ることである。結果的には、宝橋近くのみどりや洋品店を千代田が買収しこれを代替物件とする案が提示された。異論もあったが「物件価格九五〇万円を千代田は商店会へ支払う。みどりやさんとの取引は商店会が行う。鈴木氏の負担額は三五〇万円とする」ことで合意したのであった。みどりやさんとの取引は表向き九五〇万円だったが、みどりやさんは今迄商店会に世話になったとのことで改修費用として五〇万円を会に寄付されたのだった。同じ頃、河原氏と千代田との交渉が成立、河原氏も五〇万円を寄付された。合計一〇〇万円が新事務所改造費用に充てられたのである。借物から自前のものになったにも拘らず、会員には全く負担を掛けずに解決し得たのであった。新事務所は十一月にオープン、同時に商盛会初めての女性事務員二名を採用、近代化への第一歩を踏み出したのである。昭和三十九年東京オリンピックの年であった。

しかし、その事務所を使用したのは二年余りに過ぎない。四十一年頃からにわかに身近に迫った区画整理によって取り壊す運命になる。だがこの事務所は随分活躍してくれた。数々のヒットを飛ばした事業活動もこの事務所あったればこそだったと思う。だから区画整理で取り壊しが決ったとき何とも云えぬ寂しさを感じたのは筆者ばかりではなかったと思う。

都から換地として提示されたのが当時都有地になっていた現在の場所である。地坪十一坪強建坪九坪という小さな土地だから、

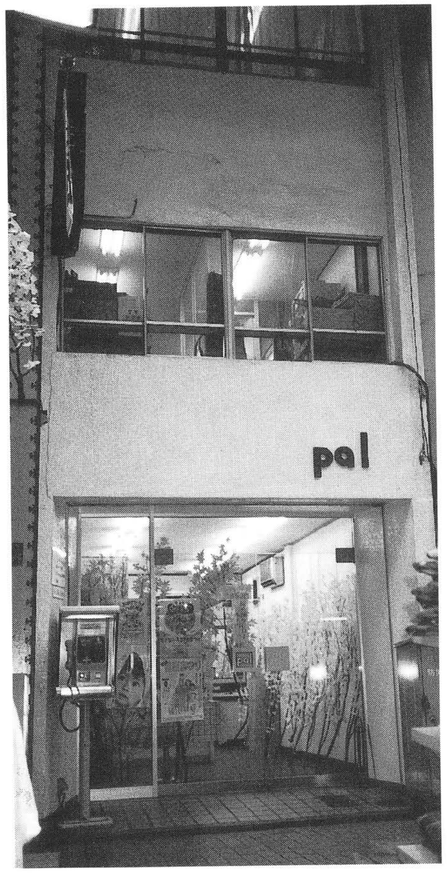


有効に使うには少なくとも三階建てが必要だった。

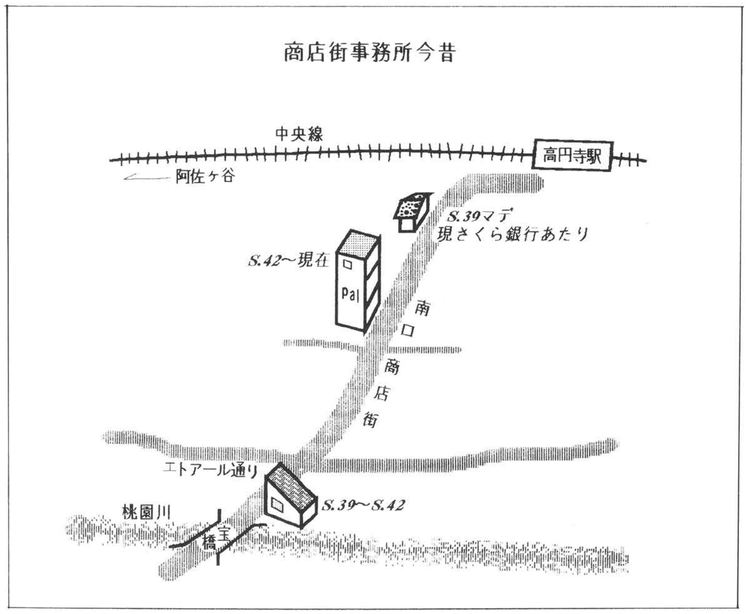
数社入札の結果「穴吹工務店」が落札、軽量鉄骨、工費三〇〇万円で建設することとなった。

因に入札金額の最高は四八〇万円だった。四十二年一月旧事務所取り壊し、四月中旬新事務所着工、八月十二日に完工開所式を行った。建築資金は都の移転補償金二〇〇万円と十人会（会内二世による積立会）提供の一〇〇万円を充てたため、この場合も会員さんには負担を掛けていない。

以上を総括すると事務所に関して出資金を集めたのは昭和三十五年の只一度だけであって、その後は理事の才覚と努力によって、今のような立派な（？）ものを手にしているのである。文字にしてしまえば何と云うこともないが、その都度の決断が如何に大事なことかを事務所の変遷は語っている。




現在のパル商店街事務所



# 法人化とアーケード

## 組合設立の経過

区画整理をめぐるゴタゴタから商盛会役員が総退陣し、その後を結成六年目の青年部が収拾することになったのは、昭和三十八年のことでした。

約三十人の青年部員の中から十人程が選ばれて理事になりました。理事長は河原廣氏で平均年令三十五才位の若さ溢れる執行部でした。

考え方の純粋性と柔軟性という意味では、若いことはよいことでありますが、一面経験不足と指導力未熟は否めません。そのせいでしょうか、引退したはずの先輩さん方から、いろいろのサジェッションを受けました。「我々も協力するから、あれをやれ、これもやれ」と尻を叩くのです。

それ等の中で一番強く云われたのが「法人化」でした。来たるべき区画整理を契機に新しい街づくりが必要、そのために組織を法人化して体質を強化せねばならぬということだったと思います。

若手理事としては、目前の問題を処理することだけでも大変でしたから、いきなり「法人化」と云われても困惑するばかり、理事会でも反発する声が多かったと記憶しています。

しかし、放っておく訳にもいかないということで、三十九年新年会の理事長挨拶で「法人化の検討を始める」旨の言明をしたのでした。云った以上何かせにゃならぬ訳で、その年二月二十四日都商連指導課長木村右門氏を招き理事及ブロック長による勉強会を開きました。次いで三月十日同じ講師による全会員を対象とした勉強会をレクリエーションを兼ねて奥多摩は鳩の巣で行いました。こうして外見は法人化に向けて前進しているかに見えましたが、正直な話区画整理の先行き不透明な時期に「尚早である」というのが、理事会の大勢だったと思います。

折も折、勃発したのが事務所問題でした。（別掲記事参照）それからの一年は「事務所」で明け暮れました。追いかけるように具体化してきたのが、区画整理です。四十年末から四十二年夏まで理事会は区整による事務所移転に掛りきりの状態でありました。一般会員さん方も家屋取りこわし、新築工事でてんやわんや「法人化」どころではありませんでした。

区画整理が一段落したのは四十五年頃だったと記憶しています。会内が静けさを取り戻し始めると、今度は「いよいよこれからが本当の街づくり」という気運が高まり積極的にこれに取り組もうという姿勢が理事会の中に生れてきました。都商連の小池氏を交えて何回かのディスカッションを行った上四十五年の総会で「法人化のための具体的計画」を承認、十一月から出資金の募集が始まりました。

出資金は商盛会時代事務所取得の際の出資金を再評価してこれに充て、未出資の会員さんのみ新規に払い込んでもらうことにしました。

こうして準備整い昭和四十七年六月一日高円寺南商店街振興組合が発足したのです。

北の銀座商店会、南の新高円寺商店会が法人化したのは三十年代でしたから、約十年遅れで一人前の商店会になったのでした。

## 高南振組と商盛会

この二つの組織の実態はほぼ同じものですが、組合は商店街振興組合法に則って、商業活動中心に行動しています。商盛会はお祭りにかかわることや敬老事業等自治会的業務を受け持っております。商盛会の活動資金は、組合から毎年一定額を預りまかなっています。組合を代表する理事長とは別に商盛会会長（現任者は小林忠三氏）をおいています。

## アーケード建設へ

振興組合設立の目的は、近代化のための各種助成措置を利用して大きな協同事業を行い、その過程で組合員の意識向上を計ることにあります。高南振組に於いてはアーケード建設を目的の第一におき、組合結成と同時に具体的検討を始めました。実は昭和四十年頃から将来に備えるため朝井康人理事を担当者として資料の収集を行っていて、その報告からみてもアーケード建設が容易なことではないことが判っていました。

資金の手当、認可の可否、全店賛同の成否等、資金については、条件さえ満たせば総工費の八十％は高度化資金（無利息）が導入できる。残り二十％は積立で用意することにしましたが、問題は認可条件でした。全店防火構造でなければならないのです。シャッターのない店はこれを取り付ける、むきだしのガラスは網入に取り替える、木造部分はモルタルにする、看板はすべて取りはずす等々、これ等がすべてなされなければ審査の対象にならないのです。このような改修工事をして、もし認可にならなかったらその責任はどうする。又、不同意者が出たらどうする。理事会では毎回激論が交わされました。最終的には当時理事長を務めていた小沢淳男氏、建設委員長の小林忠三氏の熱意によって実行の方針が固まったのですが、否定的な考えを持っていた何人かの理事はその席を去りました。

それから認可が出るまでの当事者の苦心は並大抵ではありませんでした。幸い経験深い左右先生（公認会計士）の指導を得て、膨大な資料が作られ、それに基く関係官庁による数回のヒヤリング（面接試問）の後、昭和五十三年五月、建設の認可が降り同時に総工費三億円の八十％、二億四千万円の高度化資金借入が決ったのです。

自己資金六千万円は、二年程前から始めた積立でほぼ賄える見通しが立っていました。

問題は実際に三億円で出来るのかということです。

何故ならば三億円という数字は、設計事務所が積算した基本見積

りを商工指導所の先生たちがチェックし、ギリギリで弾き出した金額だからです。各会員さんの負担額、返済計画はすべて三億円を基礎にしています。追加工事等で建設費がオーバーした場合には、返済計画が狂ってしまいます。しかしサイは投げられました。やるしかありません。案の定次々に追加工事が発生しました。

例えば非常用ハシゴに踊り場を作れ、もう一ヶ所増設せよといったような監督官庁からの指示。又、会員さんからの要望等ある程度応えなければなりませんでした。結局約一割方オーバーしてしまったため、その後十年にわたる返済のヤリクリは大変でしたが財務担当の中川昌夫理事の緻密な計画により、ほぼ予定通り平成三年三月に完済することが出来ました。

このアーケードのデザインは中世ヨーロッパ風な感覚を取り入れ、落着いた雰囲気を醸しだすことに重点をおきました。果たしてその効果が出せたか否かは別として他の街とは一味違った重厚な仕上がりになったことは確かです。

着工は昭和五十三年十一月、完工五十四年三月末でした。四月オープンと同時に愛称を「高円寺パル」と定めました。Ｐａｌとは「ともだち」「なかま」を意味します。お客様と友達のようなお付き合い、仲間のように愛される街でありたいとの願いを込めた命名です。

このアーケードも十三年経ちました。そろそろ老朽化が始まっています。大きな修理が必要になるでしょうし、いつの日か建て替えることにもなりましょう。

その日に備えて今から準備しておかなければならないのです。



アーケード工事中



## 販促娯苦楽帖

その昔、商店街の売出しといえば福引きで一等タンス、二等鏡台ｅｔｃ、末等マッチと大体相場は決っていたようだ。売出しの名称も「中元福引大売出し」「歳末福引大売出し」と判で押したようなもの。戦時中と終戦直後は別として、そんな売出しの在りようは多分昭和三十年頃まで続いていたと思う。

ところが昭和も三十年代に入ると大分様子が変わってきた。「もはや、戦後ではない」と経済白書が言い、その証のように新しい商品が出廻り始め、テレビや洗濯機、冷蔵庫の類が庶民のあこがれの的になる。商店街の賞品もタンスや鏡台にとってかわって電化製品が幅をきかすこととなる。が、売出しのシステムや方法は、変わり映えせず「その時期がきたから、やらにゃなるまい」という具合。

一方、この頃しきりに言われたことは「流通革命」アメリカ式スーパーマーケット商法が従来の流通方式を根本的に変え、今迄通りの商売をしている小規模店はドンドンつぶれてしまうという恐ろしい予言を専門家の先生方がしきりにのたまう。

多分そのせいかと思うが、各商店会での青年部づくりが盛んに行われた。つまり恐ろしい時代を迎え撃つには若い柔軟な頭が必要と言う訳。

そんなこんなで我が商盛会にも昭和三十二年遂に青年部誕生、同時に事業活動のすべてをまかされることとなる。

福引き売出しについての青年部の最初の仕事は点数制の採用だった。従来の方式だと、例えば福引券を十枚持ってきて十本とも末等なら、マッチ十ヶ差上げる。点数制では末等を例えば一点とすれば、十本で十点、十点相当の景品つまりグッと格上の品がもらえる仕組。今では別に珍しくもないが、この時代にこの方式をやったのは可成り早い方だったと思う。

しかし、青年部がその真価を発揮するのは昭和三十八年、商盛会の執行部をまかされてからだ。実はこの原稿を書くために当時の新聞やポスターの綴りを探し出したのだが、どれをみてもアッと驚くタメゴロウ。よくもまあ、こんなことをと思う程の奇手妙手のオンパレード。忘れている方も多いと思うので幾つかを紹介しよう。

### 昭和三十八年中元プレゼントセール〝特ダネを探せ！〟

当時ＴＶで評判だった「事件記者」に便乗した企画。「特ダネ賞」「トップ記事賞」等々。

景品が面白い。いつもガミガミどなってる「支局長賞」が雷おこし、「ボツ賞」クズカゴ、「スクープ賞」が明治スカットといった類。更に各賞には副賞として五千円—一万円の現金がついていてそれはお客様には渡さず、お客様の指定する小学校へその人の






名前で「設備助成協賛金」として寄付する仕組。販促活動に社会性を持たせたところがミソ。

**三十九年中元〇〇〇ピ〇〇セール〝ママ、ボクにも金メダル！〟**

聖火リレー協賛とある。ご存知、この年の十月東京オリンピックを控えて国中五輪一色、しかしオリンピックに商業性を持たせては不可とのことで、売出し名には使えない。四苦八苦のあげくの〇〇〇ピ〇〇セール。〇の中へ適当なカナ文字をいれて投票箱に入れて下さいときた。オリンピックと書いた人に抽選で記念メダルを進呈する一方、福引所前に正解は「オリンピックセール」でしたと看板を立てた。これも現金の副賞つき、これを杉並区聖火リレー実行委員会へ寄付。




**三十九年〝夢の富くじ歳末セール！〟**

グッと江戸情緒で、福引所には「富くじ」と書いた大きなノレン幕を張り、「鶴の一番賞」は純金小判「亀の二番賞」が純銀小判等々。




ついでに福引所前に高札を立て〝力くらべの事〟米俵を三つ置き力自慢の者は頭上高く差上げよ、永く耐えた者に米一俵進呈する也。

結構いましたね力自慢が、数十人が挑戦し最長二十五分の記録が出たそうな。取材に来た某紙の記者「俺もやってみよう」五分でダウン。手がしびれてせっかく取材に来たのにメモがとれないという一幕もあったとさ。

とにかく賑やかな売出しでした。






**〝しごき〟商法**

商店街にワンゲル部隊

**四十年中元セール〝夏は招く！〟**

全国の有名観光地を賞名とし、それにちなんだ賞品を進呈するもの。日本アルプス賞、浅間高原賞等、「ミナト神戸賞」に神戸銀行の定期預金はまあ順当として、「大洗海岸賞」が洗剤三ヶ月分まさしくおうわらいである。

この時は、本物の白樺の木を街の臨時柱に取付け福引所は山小屋風にしつらえ、更に大学の山岳部に依頼して完全装備の山男が街中を行きつ戻りつしてムードを盛りあげるという凝りよう。




**四十年〝日本一ケチな歳末売出し　家計簿は大笑い〟**

特賞　茶碗とハシ、パイプ、徳利と盃　etc

但、すべて副賞つき

茶碗とハシには、米三俵

パイプには、缶入ピース七十三缶

徳利と盃には、一級酒二十四本

本賞品を大きく書き、副賞を小さくしたのがミソ、折から不況ということで、マスコミが不況下の歳末商戦に注目していることに眼をつけ、これがズバリ的中。テレビはＮＨＫ始め民放各局、新聞は全国紙の殆どで報じられた。

この時のイベントとしては、餅つき大会をやり、出来あがった餅は孤児収容施設へ贈り、これがニュース映画となり又一部の新聞に報じられるなど話題の多い売出しだった。

## 四十一年サマー　ファイティングセール〝お部屋にパンチ！〟

賞名に「ヘビー賞」「ミドル賞」「ウエルター賞」等ボクシングの級名を用い、インテリア商品を景品にした。

面白いのは景品の中に「職人派遣」とある。大工、畳屋、経師屋の内、希望によって一万円分の仕事をさせるという趣向。

当時の一万円、八畳の畳替えができたそうだから、今ならさしずめ十万円といったところか。

以上ここに挙げた事例は、その全部がユニークな企画として新聞、テレビで報じられ「アイデアに賭ける商店街」として商盛会の名を高からしめたのである。

昭和四十二年から約二年間は区画整理のため街中が建築現場同様となり、殆ど売出し等行われずようやく落着きを取りもどした四十四年、事業活動を再開した。その年六月ご存知「どんとく」の登場である。年三回程それぞれ三日間、一定時間帯のみのサービスセール。北口銀座商店街では、三十六年頃から「びっくり市」の名でやっていて好評を得ていた。遅ればせながらこれに追従する形で始めたのであった。

○○市では変り映えしない、ちょっと変わった名をつけようと名前にこだわる辺り面目躍如たり。

開始の合図にタイコを鳴らそう「ドーンの合図で、どーんとお得なお買物」これをつめて「どんとく」はどうだ。それがいい、それがいい　となった次第。因に南隣の新高円寺商店街では四十六年から「バッサリ市」開始。（これは五十九年にスタンプを始めたことから六十年で廃止された）「どんとく」が好評のためか、中元歳末の売出しは以前程の華やかさからやや後退し、装飾とイベントを重視する方向に向う。街中に線路を敷きミニSLに子供達を乗せて走ったり、大学の音楽グループを呼んでのミニミニオンステージ。アーケードオープン記念には、ウルトラマンショウetc、色採りどりのイベントが展開された。

今は、商店街の売出し事業は大変むづかしい。物があり余る時代、ありきたりの賞品ではお客様は満足しない。そんな中比較的好評なのは郵パック利用の産地直送品というところか。

最近のイベントでヒット版は、恒例五月の「フラワーセール」季節よし、天気よし、薫りよし　組合員総出のベージェントとして永く続けたいものである。

最後に、数々のアイデァを生み出した元企画部長森田昇栄氏にご登場願おう。

「随分、苦労したでしょう」

「いえいえ、皆さんの協力で出来たことだし、結構楽しみながらやったように思いますよ。結果を考える事が娯しいし、そりゃ実現するのは苦労もあったけど、もくろみ通りいった時はシテヤッタリと本当に楽しい思いをさせてもらいましたよ」






昭和54年　ラッキーサマーセール



初夏の風物詩，フラワーセール

# 広報奮戦記
## 「ひろば」から「パルニュース」へ

太平洋戦争直後に決められた区画整理案が、各所で起こった反対運動のために縮小されて実施されることになり、商盛会は大騒ぎになりました。

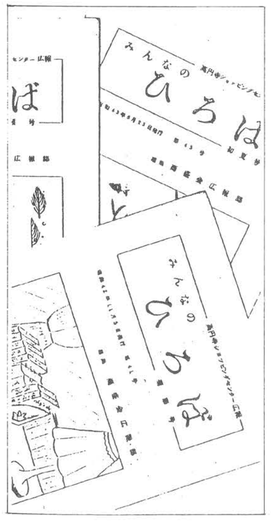
なにしろ商盛会の通りが整理区域と非対象区域の境目になったんですから東側対象区域の会員の大多数は益々反対の結束を強め、他方西側は対岸の火事を眺めるが如くで、これでは商店街活動がうまく行く訳がない。とうとう役員総退陣、後は若い者に任せるということで結成数年の青年部が執行部を預かることになったんです。昭和三十八年のことでした。平均年令三十五才位、親は親、息子は息子ということで、団結して事に当ろうと燃えたものでした。先ず会内の融和が大事、東も西も互いに理解し合うこと、特に事業活動には立場を超えて全店参加を目指すこと、そのためには広報活動を強力に展開する必要がありました。

昭和三十八年八月、初めての広報誌「ひろば」が配布されました。タイプ印刷の八頁、雑誌スタイルでなかなかの出来映えでしたね。

ニュース、エッセイ、随想、投稿等で構成、担当者の苦心が感じられるものでした。「ひろば」は原則毎月一回発行でしたから原稿集めが大変で、時には依頼原稿が間に合わず殆ど全頁を担当者が一人で書いた号も多かったようですね。

そんな苦労を重ねながら、第五十六号まで十年間も発行し続けたのですから大したものです。ファイルを繰ってみると、小説あり小ばなしあり会の様子を読み込んだイロハかるたあり、なかなか楽しいものですが、区整問題や事務所取得についての詳細な解説記事もあり、本書編集にも大いに役に立ちました。やがて振興組合になりアーケード計画が具体化してくると「アーケードニュース」が「ひろば」にとって替わります。速報性が優先したため一枚のチラシ状の「ニュース」が頻繁に配られました。

アーケード完成後は「パルタイムス」手書きの一枚ペラが近代化キャンペーンを展開しました。現在は「パルニュース」ワープロで打ったきれいなものが必要に応じて配布されていますね。いづれにしても広報は会の活動にとって大変大きな役割を果たすものです。その意味で、かっての「ひろば」が果たした役割は特筆すべきものだと思うのです。






# 年　表

| 元号 | 年 | 西暦 | 行政・高円寺・南商店街関係 | 国内外の状況等 |
|---|---|---|---|---|
| 明治 | 22 | 1889 | 甲武鉄道新宿・立川間開通（汽車） | 帝国憲法公布 |
| | | | 高円寺村、６ヶ村合併で杉並村となる | |
| | 23 | 1890 | | 第一回衆議院議員選挙 |
| | 24 | 1891 | 荻窪駅開設 | |
| | 25 | 1892 | | |
| | 26 | 1893 | 杉並村高円尋常小学校（杉三小）開校 | |
| | 27 | 1894 | | 日清戦争始まる |
| | 28 | 1895 | | 〃　終わる |
| | 29 | 1896 | | |
| | 30 | 1897 | | 活動写真始まる |
| | 31 | 1898 | | 新橋にビアホールオープン |
| | 32 | 1899 | | |
| | 33 | 1900 | | 自動車学校開校 |
| | 34 | 1901 | | |
| | 35 | 1902 | | |
| | 36 | 1903 | | |
| | 37 | 1904 | 中野・飯田町間電化され電車が走る | 日露戦争始まる |
| | 38 | 1905 | | 〃　終わる |
| | 39 | 1906 | 甲武鉄道国営になる | |
| | 40 | 1907 | | 国産自動車第一号完成 |
| | 41 | 1908 | | |
| | 42 | 1909 | | |
| | 43 | 1910 | | |
| | 44 | 1911 | | |
| 大正 | 1 | 1912 | | オリンピック初参加（ストックホルム） |
| | 2 | 1913 | | |
| | 3 | 1914 | | 第一次世界大戦勃発 |
| | 4 | 1915 | | |
| | 5 | 1916 | | |
| | 6 | 1917 | | ロシア10月革命 |
| | 7 | 1918 | | 第一次世界大戦終る |
| | 8 | 1919 | 中央線中野・吉祥寺間電化される | |
| | 9 | 1920 | 高円寺地域に電気供給始まる | 日本国際連盟加入　　日本最初のメーデー |
| | 10 | 1921 | 青梅街道に西武電車開通 | |
| | 11 | 1922 | 中央線高円寺駅開設 | 帝国ホテル完成　　ソ連邦樹立宣言 |
| | 12 | 1923 | 関東大震災起こる　東京壊滅的被害 | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 13 | 1924 | 杉並村から杉並町になる（杉並町大字高円寺） | |
| | 14 | 1925 | 耕地整理によって宅地化が進み、人口急増<br>杉四小開校 | ラジオ放送開始 |
| 昭和 | 1 | 1926 | 大正13年頃から南商店街に町会が誕生、活動始まる　杉六小開校 | |
| | 2 | 1927 | 東京市、都市計画を決定（環七はこの時決った） | 金融恐慌 |
| | 3 | 1928 | | |
| | 4 | 1929 | | |
| | 5 | 1930 | | |
| | 6 | 1931 | | 満州事変　北海道東北大飢饉娘身売り続出 |
| | 7 | 1932 | 東京市杉並区高円寺になる　杉八小開校 | 上海事変　5．15事件　　白木屋火災 |
| | 8 | 1933 | 高円寺駅に南口開設 | 小林多喜二拷問死　　ヒトラー首相就任 |
| | 9 | 1934 | | |
| | 10 | 1935 | この頃、商店街は非常な賑いを見せた | 湯川秀樹中間子論発表 |
| | 11 | 1936 | 賑いは昭和15年頃まで続く | 2．26事件、　ベルリンオリンピック |
| | 12 | 1937 | 杉十小開校 | 日中戦争始まる　日本国際連盟脱退 |
| | 13 | 1938 | | |
| | 14 | 1939 | | 第二次世界大戦勃発　　ノモンハン事件<br>国民徴用令公布 |
| | 15 | 1940 | | |
| | 16 | 1941 | | 太平洋戦争始まる、必需物資統制令公布 |
| | 17 | 1942 | 青梅街道の西武電車、東京市に移管、市電となる | 主要物資が配給制になる（米穀通帖・衣料切符等支給） |
| | 18 | 1943 | 東京都杉並区高円寺になる | |
| | 19 | 1944 | | 連合軍ノルマンディー上陸　パリ解放、<br>サイパン全滅、学童疎開 |
| | 20 | 1945 | 4/13高円寺地区空襲により焼野原となる | 5月独降伏　8／6広島・8長崎原爆投下<br>日本降伏 |
| | 21 | 1946 | | 天皇人間宣言　　極東国際軍事裁判開廷 |
| | 22 | 1947 | 高南商盛会結成、戦災復興院区画整理告示 | 日本国憲法施行　　六・三制実施 |
| | 23 | 1948 | 区画整理反対運動起こる | 極東国際軍事裁判判決 |
| | 24 | 1949 | | 湯川秀樹ノーベル賞受賞 |
| | 25 | 1950 | | 朝鮮戦争起こる |
| | 26 | 1951 | | 講和条約調印 |
| | 27 | 1952 | 馬橋小開校 | |
| | 28 | 1953 | | ＮＨＫテレビ放送開始、朝鮮休戦協定調印 |
| | 29 | 1954 | | |
| | 30 | 1955 | | マリリンモンロー来日 |
| | 31 | 1956 | | 日本、国連加盟 |
| | 32 | 1957 | 商盛会青年部結成、第一回阿波おどり（ばかおどり）実施 | ソ連人工衛星打ちあげ　　南極に昭和基地 |
| | 33 | 1958 | 商盛会東側住民多数区整中止を提訴 | 米国人工衛星打ちあげ　　東京タワー完成 |



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 34 | 1959 | | 皇太子ご成婚 |
| | 35 | 1960 | 区画整理収束案が決定、反対派姿勢硬化 | 学生運動激化（安保闘争）カラーテレビ本放送開始 |
| | 36 | 1961 | | 池田内閣成立、所得倍増計画打ち出す |
| | 37 | 1962 | 青梅街道に地下鉄開通 | |
| | 38 | 1963 | 商盛会役員に若手（青年部）が就任　都電廃止 | |
| | 39 | 1964 | 環七通り開通、中央線高架完成 | 東海道新幹線開通、東京オリンピック開催 |
| | 40 | 1965 | 新住居表示実施（馬橋の地名消える） | ベトナム戦争（米北ベトナム爆撃）<br>ミニスカート出現 |
| | 41 | 1966 | 区整中止の訴え最高裁で敗訴、条件交渉に移る | |
| | 42 | 1967 | 商盛会区画整理に着手<br>下水道工事により桃園川暗渠化 | |
| | 43 | 1968 | この頃から法人化を検討 | |
| | 44 | 1969 | 区画整理事業終了、第一回どんとく6/27開催 | アポロ11号月面着陸　東大安田講堂攻防戦 |
| | 45 | 1970 | | 大阪万国博覧会　　三島由起夫事件 |
| | 46 | 1971 | | |
| | 47 | 1972 | 5/9 総会にて組合設立決定、6/1 認可発足 | 浅間山荘事件　　札幌冬季オリンピック開催 |
| | 48 | 1973 | アーケード建設の具体的準備始まる | オイルショック |
| | 49 | 1974 | | |
| | 50 | 1975 | | ベトナム戦争終結 |
| | 51 | 1976 | | ロッキード事件発覚 |
| | 52 | 1977 | アーケード建設実施総会で可決 | |
| | 53 | 1978 | 10月アーケード着工 | 新東京国際空港（成田）開港 |
| | 54 | 1979 | 3月末アーケード完成 | |
| | 55 | 1980 | | |
| | 56 | 1981 | | 神戸ポートピア開催 |
| | 57 | 1982 | | |
| | 58 | 1983 | 周辺自治会・商店会と共に「環境浄化協議会」結成 | |
| | 59 | 1984 | | |
| | 60 | 1985 | パル通りからキャバレー等一掃される | |
| | 61 | 1986 | | |
| | 62 | 1987 | | 国鉄分割民営化 |
| | 63 | 1988 | 駅南北の自治会・商店会「駐輪対策協議会」を組織 | リクルート事件発覚 |
| 平成 | 1 | 1989 | 高円寺商店会、消費税反対の共同行動をとる | ベルリンの壁崩壊　　消費税実施 |
| | 2 | 1990 | | イラク、クウェートに侵攻 |
| | 3 | 1991 | 3月駐輪登録制実施、駅周辺は多少改善された | 湾岸戦争、ソ連崩壊　　ゴルバチョフ辞任 |
| | 4 | 1992 | 高円寺南商店街振興組合設立20周年 | 国会混乱の内にＰＫＯ法案成立<br>佐川急便事件 |

## 現役員・ＯＢ名簿

○印は現職

（理事・監事）

河原　廣　　○伊藤勝正　　○中村英次
城石　昇　　○小堀昭夫　　○冨澤武幸
小澤淳男　　○鹿野俊一　　○城石　豊
中村健一郎　　○河原　一
小倉　盛　　○小出正臣　　（商盛会会長）
北川俊満　　○澤野良治　　須藤信平
森田昇栄　　鈴木四郎
小畑　肇　　（相談役）　　小澤作二郎
○関根敏邦　　小澤作二郎　　河原　廣
○中川昌夫　　城石亮紗　　小澤淳男
朝井康人　　新井確司　　小堀修作
○鈴木俊男　　中川末吉　　○小林忠三
田中儀信　　澤野憲一郎
石川嶽佐久　　井筒雅之助　　（振興組合理事長）
○中居誠一郎　　黒田龍太郎　　小澤淳男
○小林茂雄　　中村友吉　　小畑　肇
石川金作　　小畑愛之助　　○関根敏邦
上原昭弘　　渡辺　繁
○冨澤義夫　　堀田義男　　（事務局）
○新井　健　　小堀修作　　○山本　寛
○谷　幹男　　坂本泰輔　　○城戸厚子
小林忠三　　中村長三郎
川久保賢一　　朝井義雄
○中村吾郎　　横川専治
○井筒庸三　　○小澤淳男
○鈴木　隆　　○城石　昇
○西川芳充




**参考文献・資料**

杉並の地名　（杉並区教育委員会編）
杉並の古道　（杉並区教育委員会編）
杉並歴史探訪　（森　泰樹）
杉並風土記上・中（森　泰樹）
杉並区史探訪　（森　泰樹）
荻窪風土記　（井伏　鱒二　新潮社）
東京の都市計画　（越沢　明　岩波書店）
明治期杉並区域図・昭和14年杉並区図
すぎなみの散歩道（杉並区教育委員会）
西武王国　（上之郷利昭　講談社）
日本の歴史７巻　（入間田宣夫　集英社）
ひろば　（商盛会広報）
大江戸万華鏡　（農文協）
中野区史跡散歩　（中野区史跡研究会　学生社）
中野区の歴史　―東京ふる里文庫15―　（関利雄、鎌田優　名著出版）
清掃事業三〇〇年　―江戸から東京へ―　東京ライフ別冊、東京ライフ社
東京沿線物語　―中央線・西荻・荻窪―　（金子治司　東京新聞）
新修杉並区史　上、中、下（杉並区役所）
天沼杉並物語　（杉並第五小学校創立五十周年記念事業協賛会）
杉並町郷土誌　（矢田部利夫　杉並町報社）
東京府志村　第十九　Ｍ７年編集
新宿の今昔　（芳賀善次郎　紀伊國屋書店）
杉並区の歴史　―東京ふる里文庫12―　（杉並郷土史会・文　名著出版）
江戸の真実　別冊宝島126　（JICC 出版局）
杉並区史跡散歩　（大谷光男　嗣永芳照　学生社）
高円寺むかしむかし　（杉並区高円寺中央児童館　高円寺図書館）
日本の歴史　―13―　（辻達也　中央公論社）
売春の歴史　（邦光史郎、杉村明、廣済堂文庫）
新編武蔵風土記稿　江戸幕府　昌平坂学問所　雄山閣
馬橋村史　（大谷充男　村史編纂委員会）
杉並区立郷土博物館　常設展示図録　（杉並郷土博物館）
伊藤家の由来と高円寺七十年の私　（伊藤邦彦　新風舎）



**ご協力いただいた皆様（順不同・敬称略）**

角田茂（中野区立歴史民俗資料館主任専門研究員）
杉並区教育委員会
東京都立大学図書館
東京都交通局広報課
さくら銀行
杉並第三小学校
杉並第四小学校
杉並第六小学校
杉並第八小学校
杉並第十小学校
馬橋小学校
齋藤　信雄　　武田　周吾　　小澤　淳男
河原　廣　　城石　昇　　北川　俊満
小永井晴彦　　鈴木　隆　　中川　昌夫
伊藤八五郎　　伊藤　勝正　　柴田　正雄
塚本　忠吉　　大谷　四郎　　今枝　滋旦
鈴木　茂　　山崎　友二　　谷田　匡
中村健一郎　　西川　道雄　　小出　正臣
西川利三郎　　島田　嘉一
高原　守一　　美砂旅館　　長仙寺
氷川神社　　馬橋稲荷神社
天沼八幡神社

写真提供（敬称略）
杉並区　　佐藤人止（故人）
浅賀　幸雄　　深沢　養三　　森田　昇栄

写真撮影（　〃　）
森田　昇栄　　関根　敏邦　　小林　忠三
西村　章吾　　松田　長門

# 編集委員からひと言

「人に歴史あり」とはよく聞く言葉ですが、勿論街にも歴史があるわけです。学校では日本史、世界史は勉強しましたが、わが故郷高円寺については特別教わりもしないし、考えたこともありませんでした。しかしこの本を編集することになり、参考文献を読んだり、古い地図を眺めたりしているうちにだんだんおもしろくなって来ました。そしてことに昔の高円寺を知る人たちにお話を伺って、その話をしてくれたご本人やそのお父さんお母さん、そしてそのおじいさんおばあさんの、そしてこの本を読んで頂いた皆さんの親、祖父母たち一人一人の努力と苦労により今の高円寺が出来たのだと思い至りました。この当然のことがやっと理解できたような気がします。今、高円寺の街の歴史を作った一人一人の顔を思い出しています。

河原　一

いやぁ驚いた。

ことの始まりは一（はじめ）ちゃんちの前を通ったとき。「良（りょう）ちゃん、良ちゃん」「なに？」「今度関根理事長を中心に商盛会の歴史みたいなのを作りたいって言うんだけど……皆さんに昔の話なんか聞いてさ……どう？」

なんか苦手なジャンルみたいだけど、なにもしないって訳にもいかないそうだし、まあワープロ打ったりするくらいなら手伝えそうだし「うん、いいよ。」

本人、集めた話をワープロでプリントして二、三〇ページ位の小冊子を作る程度の気でいる。

で、第一回編集会議に出てびっくり、ちゃんと出版社の人がいる、広がる広がる、話がパル、高円寺、杉並、東京……こりゃぁえらいところに足を踏み入れてしまったようだ。二回、三回と回を重ねる度に編集委員の皆さんの集めた資料の量の多さ、実地調査の綿密さ……。これ程まで『高円寺』にこだわりがあったとは、感心する事しきり。

改めて皆さんのすごさにふれたっていうか、ぼんやり生きてないなって感じ……。

恐れいりました。

澤野良治

歴史書づくりに参加したというよりは、郷土雑話に加わっただけの自分でした。

単発の話題はあったとしても、それはポツンとした「点の話」であって、〝話〟と〝話〟の関連性がなければ「線の話」として繋がりません。

まとまった〝話〟とする為には、相当な資料と研究が必要ということを、つくづく感じました。しかし、今回知ることが出来た色々な話は、たとえ「点の話」でも郷土の歴史の一部として、自分が生きていく間に子供達を相手に語っていこうと思います。

殊に感じたことは、「高円寺が今日に至るまで」への強い関心と「高円寺の現状」への厳しい見方そして「高円寺の今後」への熱い思いこそが自分の中の『高円寺』ということです。

城石　豊

昔、桃園川に千川用水が繋がって流域の農耕が盛んになった頃、隣の阿佐ヶ谷村では堰を作って大部分の水を自分たちが使ってしまい、余り水だけを下流に流していたそうです。水不足のため田植えが出来ず困り果て馬橋村・高円寺村それに中野村も加わって、阿佐ヶ谷村と激しい水争いを繰返したそうです。

時移り、今は水ならぬイベント争いを演じています。阿佐ヶ谷村の「七夕」と高円寺村の「阿波おどり」が人出を競っています。江戸時代の因縁浅からぬ両村の、これは宿命かもしれませんね。

ご先祖さまのためにも頑張らなきゃ……

森田昇栄

仕事を片付けてから机に向かうと、どうしても十一時近くなってしまう。毎晩二時三時まで本を読んでいると、だんだん疲れがたまってくる。桃園川の水路の確認に自転車で走る、早くて十時から、路地を覗き、道端に耳を寄せ水の流れる音を聞く、何度怪しまれたことか。それではと仕事をそっちのけで、昼間から調査に走り図書館に通う、家人に随分迷惑をかけた。

今の街を作ったのは誰でもない高円寺に生きた無名の人々です。村の名を挙げ、耕地整理を行い、駅を誘致し、戦争をも乗り越えて区画整理を仕上げました。

事を成し遂げるまではどうしても反対に出会います。「現状でなぜいけないのか、そんなものは必要ない」と、このハードルを越えない限り前には進めません。

高円寺は時代の流れや行政の動きに反応し、大きくなってきました。もがき苦しみながら。

この先、我が街にもいろいろな事があるでしょう、歴史を調べて痛感したのは「チャンスは何度でも苦痛を伴ってやって来る、一度逃したら捕まえる事ができない」ということ、前進への頼りは見識と街作りへの情熱でしょうか。

この仕事を始めてから、多くの方のご協力をいただきました。買い物途中、戦前の思い出を語ってくださったお客様、御不自由な体を押して庚申様の話をして下さった伊藤さん、いつも地元に情熱を注いでいる齋藤さん、高円寺を語るときの皆さんの優しい目が印象に残ります。

杉並郷土史会の森泰樹さんの御本にも大変お世話になりました。もしなければ、本書は出来ていたことか。

大勢の方の思いを受けて作ってきました。力不足の為に思いを十分に伝えることができなかったかも知れませんが、ともかくここに筆をおきます。

一番書きたかったのは、一所懸命に生きた無名の人々の姿。

やっと終わった、さあ仕事だ。

冨澤武幸

この仕事にとり掛ったのは、平成四年の二月でした。水路の調査と路傍の石仏を探すことから始めました。

本業の合間をみては自転車でここかしこをさまよい走ったものです。水路をたどって遂に荻窪駅北口の青梅街道まで行った時、水路に面したある民宿旅館に立ち寄り昔の話を聞きました。天沼弁天池の場所を教えてくれたのはここのご主人です。座敷に上って三十分程話し込んだのですが、ここで出された熱いお茶の味が忘れられません。

極く近くにありながら初めて通つた細道が沢山ありました。みなれた高円寺とはひと味違った風景がそこにありました。

変な云い方ですが、この仕事を通じてこれで私も高円寺村の人間になれた、そんな思いがするのです。

最後になりましたが、ご協力いただいたすべての皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

関根敏邦

高円寺南商店街振興組合設立20周年記念出版

高円寺　―村から街へ―

平成４年11月24日発行

著　者　高円寺パル史誌編集委員会

発　行　高円寺南商店街振興組合
東京都杉並区高円寺南3-57-10
電話 03-3311-7033

制　作　株式会社みづほ

印　刷　東京都北区東田端2-4-4
電話 03-3893-6980



なれぬ仕事に悪戦苦闘
左から関根，澤野，冨澤，城石，河原，森田

富澤周平


高円寺
pal